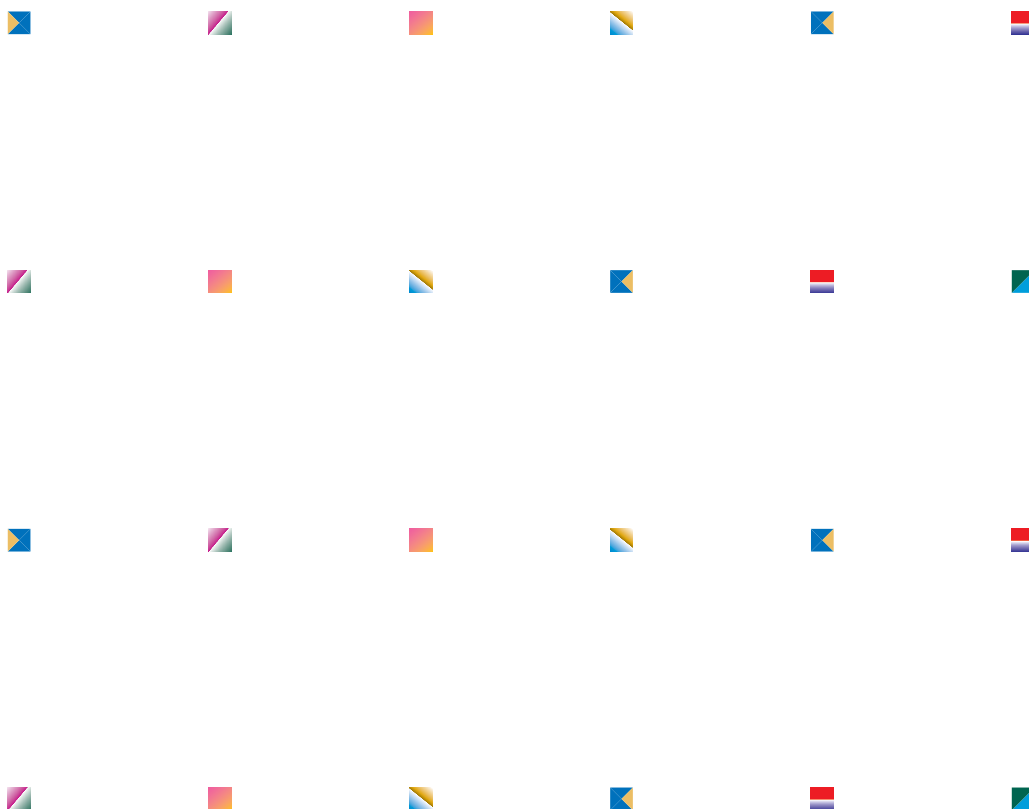


平成20・21年度「地域活性化に向けた男女共同参画推進に関する調査研究」
基礎資料(中間報告)

男性の次世代育成支援活動への参画とその促進 取り組み事例集

学習と活動の循環と男女共同参画の視点



平成21年3月
独立行政法人 国立女性教育会館

はじめに

地域活性化に向けた男女共同参画推進には、男女共同参画の視点に立った男性の地域参画が不可欠です。しかし現状では、仕事をもつ男性の家庭での家事・育児への参画や地域活動への参画は進んでいません。また、退職した男性についても、地域活動への意欲は高い反面、地域での活躍にはさまざまな課題があり、参画は十分には進んでいないことがうかがえます。

家庭や地域の教育力の低下や、子育て環境の孤立化、子どもの生きる力の低下等の子育てに関わる今日的課題を背景として、地域全体で家庭・親等を支援する必要性がいられていますが、特にこの次世代育成支援の分野は男性の参画が進んでおらず、参画促進のための意識啓発やしくみづくりが期待されているところです。

国立女性教育会館では、男女共同参画・女性教育・家庭教育に関する喫緊の課題として、平成 20 年度より「地域活性化に向けた男女共同参画推進に関する調査研究」に取り組んでおります。地域活動への女性のチャレンジに対する支援や、地域における男性の次世代育成支援活動への参画促進等、地域の活性化を図り、男女がともに活躍できる方策を、主に学習の面から検討することを目的としています。

この報告書は、本調査研究の一環として行った地域における男性の次世代育成支援活動への参画を促進する取り組み事例についてのヒアリング調査を、主に家庭教育・次世代育成の行政担当者や子育て支援に携わる市民団体のリーダー等、子育て支援に関わる支援者・指導者の方々の実践に役立つように、地域活動において重要な視点である学習と活動の循環、および男女共同参画の視点に特に留意しまとめたものです。

この冊子が、担当される多くの方々に広くご活用いただけることを期待しております。
最後になりますが、本調査研究にご協力いただいた関係者の皆さまに心よりお礼申し上げます。

独立行政法人 国立女性教育会館
理事長 神田 道子

目次

はじめに	1
I この報告書の構成と使い方	3
II 男性の次世代育成支援活動への参画とその促進 取り組み事例	7
(1)男性による活動・取り組み	
■ あじ島冒険楽校(宮城県石巻市(網地島))	7
昔の子どもたちと未来の大人たちの異世代交流「島の夏休み」体験	
■ 爺時の会(千葉県八千代市)	17
退職後に社会福祉協議会にボランティア登録、未就学児の子育て支援活動を行う	
■ NPO 法人ファザーリング・ジャパン(東京都)	23
「笑っている父親」を増やすことを目的に多彩な活動を展開する NPO 法人	
■ 元石川おやじの会(横浜市)	31
地域における防犯活動からさまざまな活動へと広がり求めている	
■ NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構・久米地区学社連携協力促進協議会(愛媛県松山市)	39
男性が仕掛けた、地域の厚みづくりによる子育て支援の展開	
(2)講座等を実施する取り組み	
■ 仙台市男女共同参画センター「エル・ソーラ仙台」(仙台市)	53
男性へのアプローチ、手を変え品を変え—男性対象の講座を始めて 15 年—	
■ コスモ石油株式会社コーポレートコミュニケーション部(東京都)	65
企業による社会貢献活動プログラムを通じたワーク・ライフ・バランス推進と社員ボランティアの育成	
■ 大田区男女平等推進センター エセナおおた(東京都)	75
行列のできる男性講座開催で地域活性化に向けた男女共同参画推進	
■ NPO 法人マミーズ・ネット(新潟県上越市)	87
「子育てしやすい社会は男女共同参画社会」という考えに基づき、企業への出前講座等、男性を対象とした講座を実施	
■ 静岡市女性会館(静岡市)	95
男女共同参画を「広める講座」とともに「寄り添う講座」「深める講座」を模索	
(3)地域のしくみづくり	
■ 茨城県教育庁生涯学習課・茨城県水戸生涯学習センター(茨城県)	107
県内 5 つの生涯学習センターを通して、地域ごとに父親のネットワーク化を支援	
■ 新潟市教育委員会地域と学校ふれあい推進課(新潟市)	113
地域住民の力を活かした教育の推進で、学校・子ども・住民みんなが元気になる地域づくり	
III おわりに	123
本年度調査研究を振り返って：事例調査からみえた課題	
IV 参考情報	127
(1)参考文献	
(2)関連する国の施策	

I この報告書の構成と使い方

I この報告書の構成と使い方

1. 調査研究の概要

本報告書は、独立行政法人国立女性教育会館において実施している「地域活性化に向けた男女共同参画推進に関する調査研究」（平成 20・21 年度）の 1 年次に行った「男性の次世代育成支援活動への参画とその促進」についてのヒアリング調査の結果を中心にまとめたものです。

「地域活性化に向けた男女共同参画推進に関する調査研究」は、地域活動への女性のチャレンジに対する支援や、地域における男性の次世代育成支援活動への参画促進等、男女がともに地域活動に参画することを通じて、地域の活性化と男女共同参画を推進する方策を、主に学習の面から明らかにすることを目的としています。男性の地域活動への参画については、男性の家事・育児参画促進、ワーク・ライフ・バランスの推進、社会全体での教育力の向上等の今日的課題を踏まえ、特に男性の参画が必要とされる次世代育成支援の分野に焦点をあてることにしました。本年度は、男性を対象とした講座等の情報収集や、男性を対象とした事業に関する男女共同参画関連施設・働く婦人の家へのアンケート調査¹、プログラムの企画・実施²、取り組み事例のヒアリング調査等を行いました。

2. 取り組み事例調査の趣旨と内容

（1）取り組み事例調査の 2 つのポイント

男性の次世代育成支援活動への参画に関する取り組み事例の調査にあたっては、参画促進のための重要なポイントとして、「学習と活動の循環」と「男女共同参画の視点」について、特に留意していくこととしました。

学習と活動の循環

学習と活動の循環とは、ここでは、個人が講座や研修等で学んだことを社会活動の実践に活かし、自らが支援者となって学習者の支援や地域づくりを行って学習の成果を社会に還元すること、また、社会活動を行う個人が活動を通してさまざまな学びを得る、あるいは、社会活動をしながら必要な学習を行うというような循環として捉えています。地域活動においては、人材の育成や発掘も課題ですが、「育成した人材が活動していない」「育成した人材が活躍する場が十分でない」という大きな課題があります。学んだことを活動に活かして地域に還元することは、地域の活性化につながるだけでなく、個人の生活や社会活動におけるキャリア³を豊かにすることにつながります。文部科学省の中央教育審議会答申(平成 20 年 2 月)では、このような学習の成果の社会への

¹ 全国の男女共同参画関連施設 374 施設および働く婦人の家 185 施設を対象に、平成 20 年 8 月に郵送による(回答はファックス)アンケート調査を実施した。

² 平成 20 年 11 月 15～16 日に実施した「家庭教育・次世代育成地域協働フォーラム in 上越」のプログラムの 1 つとして、共催の NPO 法人マミーズ・ネットと協働し、事例報告とワークショップ「次世代育成支援活動への男性の参画促進」を企画・実施した。

³ ここでいう「キャリア」とは、個々人が、職業生活だけでなく、家庭や地域、社会等において生涯にわたって経験するさまざまな立場や役割を遂行する活動をさす。

還元を「知の循環型社会」とよび、「各個人が、自らのニーズに基づき学習した成果を社会に還元し、社会全体の持続的な教育力の向上に貢献する」といった『知の循環型社会』を構築することは、持続可能な社会の基盤となり、その構築にも貢献するものと考えられる(p.5)」としています。学習と活動の循環が効果的に行われるには、学習の成果を活動に活かすことを前提とした、活動に必要な資質の向上や力量形成を図るための学習機会の提供や、学習した人材が活躍でき、活動しながら学べるしくみの提供等、学習や活動を有機的に支援することが大切です。

男女共同参画の視点

次世代育成支援の分野は、地域活動の中でも特に、従来、多くの活動が女性を中心に担われてきました。今後の地域活性化や地域の教育力の向上に向けて、男性の参画とその促進・支援が地域における課題の1つとなってきました。地域活動における男女共同参画推進のためには、今まで地域活動をあまり行っていない男性たちが活動を行うための支援がまずは必要ですが、男性たちが地域の人とどのような関係性をとり活動を行うか、固定的な性別役割分担意識にとらわれずに活動を行っているかにも留意する必要があります。

1つめの学習と活動の循環は、地域における男女共同参画推進のためにもまた、重要となります。内閣府の男女共同参画会議基本問題専門調査会「地域における男女共同参画推進の今後のあり方について」(平成20年10月)では、「地域における男女共同参画の第二ステージへの移行」として、今後はこれまでの知識習得や意識啓発を中心とした取り組みから、課題解決型の実践的活動中心の取り組みへ変えていくことが求められているとしています。男女共同参画社会の実現に向けて、実際の活動に結びつく学習や、活動をしている人に必要な男女共同参画の推進に役立つ学習の提供等について検討していくことが大切といえます。

(2) 取り組み事例の構成

この報告書に掲載している取り組み事例は、次の3つに分けられています。

1. 男性による活動・取り組み
2. 講座等を実施する取り組み
3. 地域のしくみづくり

2は学習を中心とする取り組み・支援、1と3は活動を中心とする取り組み・支援といえますが、どの事例も、学習や経験と活動とのつながりについても注目しています。活動や参画支援の対象となる男性は、次世代育成支援活動や地域への参画が特に期待されている①子育て中の父親、②団塊の世代・高齢者の2つの世代を大きく想定しています。

取り組み事例の内容は、ヒアリング調査に基づいています。ヒアリング調査の実施にあたっては、前述2つのポイントを踏まえて項目をたてたインタビュー調査票を作成し、本報告書の取り組み事例も、基本的にインタビュー調査票の項目にそって記載されています。各取り組み事例の細かな項目の違いはありますが、大きな流れは次のように共通しています。

1. 団体・機関等の概要
体制、事業概要、団体発足の背景等
2. 取り組み・事業の内容

取り組み・事業・プログラム等の内容、特色・工夫、課題、評価、実施の背景等

3. 内外との連携

団体・機関内の連携、地域での連携等

4. 企画・実施の視点

男女共同参画の視点、学習と活動の関連、社会的役割や地域還元の捉え方等

5. 今後の取り組みと課題

今後の取り組みや方向性、今後に向けた課題等

3. この報告書の使い方

この報告書は、家庭教育・次世代育成支援や男女共同参画に関わる行政担当者、男女共同参画関連施設を含む社会教育施設担当者、地域活動を行う団体リーダー等、関連する分野の指導者・支援者の実践に役に立つことをめざして作成しています。

前述の取り組み事例の3つの分類と、取り組みを行う主な機関の関連を、現状を踏まえて整理すると、下の表のようになります。○と◎は実施している取り組み、◎は特に多くの機関で取り組みが実施されていることを示します。

取り組みと実施機関の関連

	行政	社会教育施設	女性のグループ・NPO、 地域教育コーディネーター等	男性のグループ・ NPO等	企業
1. 男性による活動・取り組み	—	—	—	◎	—
2. 講座等を実施する取り組み	○	◎	◎	○	○
3. 地域のしくみづくり	◎	○	◎	◎	○

この表を参考にして、所属する機関に特に関連した取り組み事例から読むとよいかもしれません。その上で他の分類の取り組み事例も読み、地域において学習と活動を有機的に循環させるには、自分の所属する機関はどのような役割を果たせばよいのか、どのような学習の場の提供、活動の場の提供等が可能なのか考えてみるとよいでしょう。

各取り組み事例を読む際には、「学習と活動の循環」と「男女共同参画の視点」に着目しながら、取り組みの工夫、参考になる点、課題の乗り越え方等を項目の流れにそって書き出し、自分の行う支援や活動、参画促進にどのように取り入れることができるのかを具体的に書き表してみよう。

掲載した取り組み事例はどれも、男性の次世代育成支援活動への参画促進に関して大変参考になる事例ですが、“モデル的事業”“先進的事業”というもののばかりではありません。特に男女共同参画の視点については、課題も多くあります。自分の地域、自分の取り組みと照らし合わせながら、男女共同参画推進のための課題は何なのか、その課題の解決にはどのようなことを行っていけばよいのかも書き出していきましょう。その際には、取り組み事例を踏まえて考察したⅢの「おわりに 本年度調査研究を振り返って：事例調査からみえた課題」も参考にしてください。

Ⅱ 男性の次世代育成支援活動への参画とその促進 取り組み事例

(1) 男性による活動・取り組み

昔の子どもたちと未来の大人たちの異世代交流 「島の夏休み」体験

あじ島冒険楽校

【取り組みの概要】

人口の流出と高齢化の問題を抱えた島で、活気ある地域づくりのために、何かできることはないかと島のみんなで考え、実施したのが子どもの体験学習「あじ島冒険楽校」である。

「あじ島冒険楽校」のコンセプトは「昔の子どもたち」（島の高齢者たち）が先生となり、「未来の大人たち」（島の外から来た子どもたち）と一緒に、「昔ながらの島の夏休み体験」を行うというものである。

毎年、都市に住む子どもたちが参加し、島の伝統的な魚釣り「アナゴ抜き」や竹鉄砲・竹とんぼ作り、肝だめし、島からの鮎川の花火鑑賞、シーカヤック等を楽しんでいる。同校の夏休み体験活動プログラムは参加者から好評を博している。

あじ島冒険楽校は、網地島（あじしま）の自然と島の人々の伝統文化を活かして、高齢者の生きがい作りに寄与している。島の高齢者たちは、冒険楽校に来た元気な子どもたちとの交流により、表情や声がとても明るくなっていった。また、プログラムの中では、島の高齢者が教える昔遊びで目を輝かす子どもたちの姿を見聞きすることで、島民たちは自分たちが培ってきた島の生活や文化に対する「誇り」を取り戻していったという。

1. 団体について

（1）団体名

あじ島冒険楽校（網地島地区コミュニティー推進協議会「あじ島冒険楽校」部会）と 石巻市。

（2）構成員

代表の小野勝吉氏、事務局長の阿部欽一郎氏（インタビュー先）のほか 13 名。

また、専門知識を持った島外の NPO が応援団として参加し、クラフト作りや植物観察等の指導を行う。さらに、大学生のボランティアが参加し、子どもたちが楽しく過ごせるよう配慮している。

（3）構成員の属性

60 歳代～80 歳代。退職者、漁師、市議会議員など。

2. 取り組みの内容

（1）取り組みの内容・方法

1泊2日のキャンプを実施（例年、2～3コース：コース名はうに、あわび、ほや、くじら）。

平成16・17年には、児童福祉施設の子どもたち35名程度（引率者含む）が参加。現在は、主に仙

台の子どもたち(親も参加可能)60名を対象。今年は、県外(福島、岩手、栃木)から申し込みがあった。定員オーバーで10数名を断った。

あじ島冒険楽校とは

網地島は、あまり開発がなされておらず、数十年前の懐かしい風景が広がっている。南国のリゾートを思わせる「網地白浜」に代表される「海」があり、おにやんまやきれいな蝶がたくさん飛び交う「山」がある自然たっぷりの島だ。「昔の子どもたちが過ごした夏休みを未来の大人たちに伝えたい」という思いから、平成16年2月に宮城県の網地島民の自治組織である網地島地区コミュニティ推進協議会を母体にスタートした。



あじ島冒険楽校の参加者と島民

ねらい

網地島の高齢者が60～70年前に過ごした「島の夏休み」を島の高齢者が先生となって「未来の大人たち」に体験してもらうことによって、「昔の子どもたち」が普通に遊びとして行われていたものを自然体験活動として復活させ、心健やかに強い連帯意識を持った日焼けの似合うたくましい子どもたちにする。

また、網地島の海を体感できるシーカヤックを子どもたちに1人で体験させ、自信と的確な判断力を持たせるようにしてあげたい。さらに、砂浜に打ち上げられた流木や貝殻等を使ったクラフトにより豊かな表現力を身に付けさせるようにしていきたい。

①参加者数

冒険楽校は平成16年のスタート以来、5年間で約400人を都市部から招いている。子どもたちは、旧網長中学校を改装した「島の楽校」に宿泊。島内のお年寄りたちから自然を生かした遊びや釣り、料理などを教わり、島ならではの生活に触れる。



シーカヤック体験

平成16・17年には、仙台市宮城野区にある児童養護施設「ラ・サール・ホーム」に入所する小学3年～中学3年の35人を網地島に招待した。2泊3日で夏休みを楽しんでもらい、豊富な自然と海の幸でもてなした。子どもたちは「島の楽校」に宿泊し、海水浴、島の植物観察、島の伝統技法での魚釣り、シーカヤック、竹とんぼ・竹鉄砲作り、肝試しなど、島ならではの体験メニューを満喫し、網地島を「心のふるさと」にしたという。

例えば、平成16年の参加者数は以下のとおり。

あじ島冒険楽校の実施状況			
コース名	開 催 日	参加人数	うち子ども
うにコース	平成 16 年 7 月 31 日（土）～8 月 1 日（日）	34 人	18 人
あわびコース	平成 16 年 8 月 6 日（金）～8 月 8 日（日）	32 人	32 人
ほやコース	平成 16 年 8 月 28 日（土）～8 月 29 日（日）	18 人	14 人

この他、大学生リーダーとして、延べ 13 人が参加した。なお、大人については、スタッフ扱いとなり、各体験は子ども中心となる。

②参加費用

子ども 1 名につき 7,000 円（保険料込み）大人 1 名につき 7,000 円（保険料込み）

（例）子ども 2 名と大人 2 名の場合、28,000 円（子ども 14,000 円＋大人 14,000 円）

島までの交通費は各自負担

定期運航船料金：石巻⇄網地島網地港 大人 1,300 円（片道）小学生 650 円（片道）

鮎川⇄網地島網地港 大人 450 円（片道）小学生 230 円（片道）

③タイムスケジュール(例)

日時：平成 20 年 8 月 3 日（土）12：30～4 日（月）14：00

場所：網地島（宮城県石巻市）

参加者：未来の大人たち（子ども）27 名、昔の子どもたち（保護者はスタッフとして参加）13 名

8 月 3 日	
12：30	自己紹介ゲーム：シーカヤックの順番を決めながら、友達の名前を覚えよう。
13：00	開校式
13：10	網地島の獅子踊り指導
14：00	網地島の海を体験（シーカヤック・海水浴）
16：00	シャワー・身支度
16：30	自由時間（どんな遊びをするか子どもたちで決定）
17：30	ながぐつ和吉先生の網地島の植物教室
18：00	郷土料理体験・夕食・後片付け
19：30	あじ島冒険楽校のロゴをTシャツにプリントしよう
20：00	肝だめし
21：00	就寝準備
21：30	就寝

8 月 4 日 朝からの雷雨のため、スケジュールを変更して実施	
06：00	起床・身支度・宿泊教室の清掃
06：30	トイレ・浴室・廊下・玄関の清掃

07 : 00	朝食準備・朝食・後片付け(終了した者から自由時間)
08 : 00	自由時間 1 (どんな遊びをするか子どもたちで決定)
09 : 00	自由時間 2 (どんな遊びをするか子どもたちで決定)
11 : 00	早めの昼食：味噌焼きおにぎりが美味しい
11 : 20	記念写真・出発(雷雨が止んで釣りができるようになった)
11 : 30	本物の漁師が教える魚釣り・釣り上げた魚を焼いて食べてみよう・磯観察
14 : 00	閉校式

④主なプログラム

名称	概要
開校式（網地島の獅子踊り、ニックネームで自己紹介）	<p>楽校長の小野勝吉氏の挨拶のあと、長渡地区の方々による獅子踊りが披露される。迫力満点で子どもたちは興味津々。島の高齢者の指導を受けながら、子どもたちも実際に獅子踊りを体験。</p> <p>自己紹介ではボールを使って「〇〇(自分のニックネーム)から、△△(相手のニックネーム)さん、ヨロシク」とキャッチボール。子どもだけではなく大人もニックネームで呼び合うことで、早く打ち解けることができる。</p>
シーカヤックと海水浴	<p>海とのふれあいを目的に、海の自転車といわれる「シーカヤック」を 10 隻購入。シーカヤックのボートは 2 種類あり、ボート選びが重要。細長い船はスピードは出るもののバランスを取ることが難しい。幅が広い船はスピードは出ないが安定感がある 3 人乗り。</p> <p>友達や家族と力を合わせて遠くまで漕ぎ出す。ほとんどの子どもは初めてだが、すぐに操作を覚え、自由にスイスイと漕ぐ。</p> <p>岩場に引っかかった子のシーカヤックを他の子が助けてあげるなど、助け合いの姿を見かけることも。シーカヤックの楽しさに、みんなとっても満足する。</p>
竹鉄砲作り教室	<p>島にあるたくさんの竹は、おもちゃが簡単に手に入らなかった時代には、子どもたちの遊びの材料だった。昔の子どもたちは、自分のナイフを持ち、竹とんぼや竹鉄砲を作って遊んだ。</p> <p>竹鉄砲は、細い竹を使って作る。筒の部分は節を避けて作り、持ち手の部分は片方に節を残す。後は、筒の中をきつくなく、またゆるくなく、ぴったりに通る細い竹を見つけて心棒として持ち手の部分に付けて完成。</p> <p>木の実やちり紙を筒の両側に詰め、持ち手に付けた心棒で一気に押し出すと、大きな音とともに玉が発射する。</p>
流木や貝殻を使ったクラフト教室	<p>浜辺に打ち上げられた流木や小石は、そのままでは何の価値もないものだが、子どもたちの豊かな発想力により、「目」「鼻」「口」「ひれ」「手足」「しっぽ」を付けるとあつという間に、楽しい魚や動物に大変身する。</p>
ながぐつ和吉	40 年前に網長中学校に赴任され、在職中に網地島を探索して「宮城県網地島

先生の網地島の植物教室	<p>植物誌「島民の生活と植物」をまとめられた、高橋和吉(わきち)先生が島特有の植物について話してくださる。先生はいつも長靴を履いていたことから、愛称「ながぐつ和吉先生」と島の人から慕われている。</p> <p>先生は、島特有の植物について、熱心にそしてわかりやすく子どもたちに説明してくれるので、子どもたちも興味津々。タブの葉を餌にするアオスジアゲハやオニヤンマも数多く飛び交う、網地島の豊かな自然の素晴らしさが熱心に語られる。</p> <p>「網地島は、東北の中でも特に温暖な気候で、常緑のタブの木や、江戸時代に四国から持ち込まれたシュロが自生するなど、ちょっと変わった植物相を持っている」</p> <p>「網地島は、東北の中では特に気候が温暖で積雪することが少なく、3cm も雪が積もると子どもたちは大喜びして雪合戦をした」</p> <p>「紅葉する樹木が少なく、常緑のタブの木やトベラなど年中緑の絶えない島である。トベラは昔、とびらに付けて魔よけにしたことからその名が付いた」「ハマナデシコ」や「ハマギク」など「ハマ」が付く植物がたくさん紹介される。現在、網地島では「ヤマユリ」と「スカシユリ」の2種類が咲いており、子どもたちも実際に2つの花の匂いを嗅ぎ分けてみる。「いい匂い！」という声もあれば、「化粧臭い」や「花粉症になる」など声が聞こえる。楽しい笑い声の絶えない授業。</p>
植物を使った昔の遊び	<p>その後、島にたくさん自生している「トクサ」(スギナを大きくしたような棒状の植物)を使った昔遊びを学ぶ。トクサは、タワシ代わりに鍋洗いに使われたり、鳴子のこけし磨きに使われている。実際に、トクサで爪を軽く擦ると削られていき、まさに「砥草」を実感することができる。</p> <p>節の部分で茎を折り、もう一度つないで、「どこつないだ？」というもので、素朴な遊びだが、みんな喜ぶ。おもちゃが買えなくとも自然のものを活かし、子どもたちの創意工夫でいくらでも遊びは考え出すことができる。子どもたちの創造力と連帯意識を育むことができる。</p>
朝食づくり	<p>朝食の材料は、米、卵、トマトを除いてすべて島で採れたものばかり。使っている味噌や梅干しもすべて手作りで作ったもの。島特有の「マルコ汁」、メカブ、ひじき、銀鮭などが出される。</p>
本物の漁師が教える魚釣り・釣り上げた魚を焼いて食べてみよう・磯観察	<p>網地島では「あなご抜き」と呼ばれている。仕掛けは簡単。針の付いているテグス 20cm くらいを竹竿の先端に付け、餌は岩場で採れた「えらこ」を使う。</p> <p>本物の漁師が教える魚釣りは指導が厳しいのだが、子どもたちは自分の力で魚を釣りたいので、真剣に高齢者の話を聞く。参加した子どもたちのほとんどが、魚を釣り上げることができる。</p> <p>魚は浜辺で塩焼きにして、子どもたちと食べる。不思議なことに、ふだん魚</p>

	<p>を食べない子どもでも、自分が釣った魚となると骨までしゃぶるように食べてしまう。</p> <p>また、多くの子どもたちは 串付きのソーセージを食べるように、串の先端から食べる習慣があるようで、魚も尾びれの固いところを最初に食べるという。大人だったら一番美味しいところから食べるのに、そうできない子どもが多い。</p> <p>磯観察では、磯だまりに カニ、ヤドカリ、ウニ、ナマコ、ヒラメ、小さな魚がたくさんおり、子どもたちは、それらを捕まえたりして大喜び。多くの生物が生きていることで自然界が成り立っていることを網地島の豊かな海で実感できる。</p>
郷土料理体験	<p>夕食には、網地島の海女さんが採った「うに」や「あわび」が出される。都市部では贅沢品だが、島ではとても安く手に入る。動いている「うに」や「あわび」に子どもたちはみんな驚くという。</p> <p>また、対岸の鮎川が捕鯨の基地であったことから、今となっては懐かしいくじら肉の味噌焼きやくじらの脂身を使った豚汁風の「トイ汁」も出される。何度もおかわりする子どもがいるという。</p>
あじ島冒険楽校のロゴを T シャツにプリントしよう	<p>あじ島冒険楽校のロゴを、持参した T シャツにプリントする。</p> <p>ロゴは毎年新しくなる。インクで文字を T シャツに写し、それをドライヤーで乾かした後にアイロンで熱を加えると完成。</p>



漁師が教える魚釣り



釣り上げた魚を焼いて食べる

(2) 企画・実施の工夫・特色

子どもたちが網地島の自然を体感し、思いっきり遊ぶように、あじ島冒険楽校では、さまざまなメニューを用意している。ただし、「遊びは、やりたいことはみんなで考えて、相談してから決める」が基本方針であり、各講師は各教室にいるが、子どもたちから「教えてください。お願いします」と言われなければ、何もしないこととしている。子どもたち自身が他者との関係づくりを学べるようにしている。

また、教育の一環と捉えているので、ゲーム機の使用を禁じるなどの規制がある。

（３）事業を実施するに至る背景

事務局長の阿部氏は、平成元年に地元に戻ってきて、鮭の養殖を開始した。周囲に推されて、平成8年からは市議会議員。今までのような行政主導型ではなく、民間主導で地域を活性化していきたい、と考えている。

石巻市は、平成17年4月に周辺6町と合併し、新「石巻市」となった。網地島は旧牡鹿町に所在しており、県東部の牡鹿半島の先端に位置し、同町には黄金山神社で有名な金華山がある。また以前は捕鯨の基地としても有名で「くじらの町」として栄えていた。

あじ島冒険楽校のある網地島は、石巻港からは定期船で約1時間、鮎川港からは約20分の場所にある。かつては3,000人の人口があった島は、現在では6分の1の500人余りとなっている。特に、平成2年から平成12年のわずか10年間で人口が半減したぐらい、急速に人口流出が進んでいる。

島を出ることになった主な理由は、「子どもの高校進学に合わせて家族で転居した」、「働く場所がない」といった状況。高齢化率も約7割と高く、一人暮らしの高齢者も多くなってきている。集落としての機能が急速に低下している、いわゆる「限界集落」*となっており、島の環境整備をするマンパワーにも事欠く事態となっている。

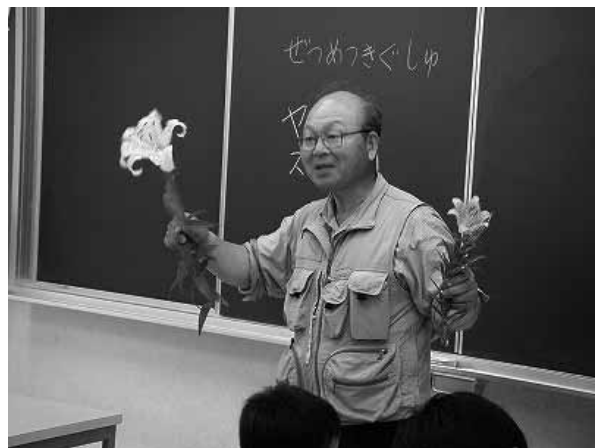
*「限界集落」とは大野晃が平成3年に提唱した概念で、本来は65歳以上の高齢者が人口の過半数を占める状態を指す。過疎化による集落消滅という現象が社会的に認識されるようになってから、国やマスコミにおいてよく使われるようになった。

一方で、子どもたちは激減している。島には、かつて小・中学校があり、数年前までは数多くの生徒(昭和35年には、網長小学校だけで571人の児童が在籍)が、勉強や運動に励んでいた。しかし、島に唯一あった網長小学校は、平成9年3月に休校し、平成12年3月に閉校された。また、網長中学校も平成12年3月に廃校されてしまった。

自分たちの母校がなくなり、子どもたちの声を聞くことが少なくなる中で、「すかたねえ」という島の将来に対する不安や諦めの声が大半を占める状況だった。このような網地島の厳しい状況を打開し、島の振興を図るとともに、島の高齢者がいきいきと島で暮らせるように、あじ島冒険楽校を企画した。



網地島の獅子踊り指導：高齢者の指導で子どもたちも体験



ながづつ和吉先生の網地島の植物教室

あじ島冒険楽校は、島民有志によって網地島地区コミュニティー推進協議会の一組織として発足し、網地島活性化プロジェクトの実践団体として活動している。

（４）取り組みの評価

5年間に370名の「未来の大人」が参加してきた。参加した子どもたちの感想をみると、「いつも抽選にもれて参加できなかったけど、あじ島冒険楽校に参加できる最後の中学2年生になって5年ぶりに参加できました。5年前はホームシックになって職員室で泣いてしまい、夜遅くまで島の方に優しくしてもらいました。大きくなった自分を島の方に見てもらうことができてよかった」、「網地島はいいところだ。住んでみたい」、「大学生になったら、スタッフにしてほしい」といったように、子どもたちが成長している姿、将来への可能性を感じさせる言葉が並んでいる。

また、「島の活性化」にも直結している。島では見かけることが少なくなった子どもたちが元気に走り回り、大きな歓声を上げ、泣いたり笑ったりする姿が島の高齢者たちを励ました。これまでは何の価値もないと思っていた島の文化や遊びが子どもたちを感動させている姿を見て、初めは「高齢者ばかりの島では新たな活動はできない」と反対していた高齢者も今では自ら「アナゴ抜き」の先生を務めるようになった。

（５）課題

外向きと内向きの活動を展開。内向きの活動としては、島内の美化(倒木・流木がそのままになっており、自然景観を損なっていた)。

団体内で行っている学習会等は、特になし。ただし、参加者と島民との懇親会(意見交換会)をやっている。

（６）今までの課題解決に向けた取り組み

隣の田代島などと「愛ランド推進委員会」を設置した。

新聞・テレビ向けの「情報発信」が重要。みやぎ地域づくり団体協議会に参加し、すべて助成事業に応募して、実施している。

行政などからの表彰が励みになった(総務省「平成16年度地域づくり総務大臣表彰」、(財)あしたの日本を創る協会「平成20年度あしたのまち・くらしづくり活動賞振興奨励賞」など)。

3. 活動にあたっての連携等

（１）関連機関・団体との連携

あじ島冒険楽校では、NPO 法人宮城県森林インストラクター協会と連携し、流木を使った工芸品づくりなど、クラフト体験メニューの開発も行っている。これは、島の人々がノウハウを身に付け、冒険楽校を自分たちで継続して実施できるようになろう、と考えたため。

また、宮城県の教育大学に通っている学生を対象に、ボランティアを募集しており、学生にとっては良い研修の場となっている。

地域の婦人会と連携し、食事の準備は主に婦人会が行っている。

(2) 行政等との連携

県、市職員がボランティアとして参加をしている。牡鹿町の職員や宮城県の地域振興課からも、キャンプに人材が派遣されている。

宮城県地域振興課が島の人々と一緒に準備し、企画および運営を協働で行っている。また、県は県民に広く参加を呼びかけている。県にとっては、地域振興策であるとともに、県民のリクリエーションの場としても機能している。

4. 活動の視点、学びについて

男性が担うことの比較的少ない次世代育成支援の活動を通して、島の活性化と都会の子どもに対する教育(自然体験学習・活動の提供)を実践している。事業を開始するにあたっては、メンバーは、県の協力により自然体験学習に関する研修会で学び、また、事業の実施では、教員や漁師等、メンバーのこれまでの仕事の経験を活かしてプログラムを構成し、子どもたちの指導にあたっている。活動する以前には、島の活性化のために自分たちにできることは何もないような気持ちでいた島民も、活動に参加して子どもとの交流を深めることを通して生きがいや誇りを得るようになっていく。

5. 今後に向けた展望・課題

今後、離島でもこういうことができるという成功事例として広めていきたい。そのためにも、できるだけ長く継続していきたい。運営しているメンバーの高齢化が著しいので、後継者を養成していきたい。また、助成に関する情報収集を行い、活動の維持につなげたい。

ヒアリングを終えて

平成 18 年に国土交通省が過疎地域市町村に対して実施した調査によると、いずれ消滅するおそれがあると予測される集落は 2,643 集落で全体の 4.2%、うち、今後 10 年以内に消滅するおそれがあると予測される集落は 423 集落になる(『平成 18 年度国土形成計画策定のための集落の状況に関する現況把握調査～最終報告～』)。

網地島は、そうした可能性も懸念される地域の一つだが、島民有志の情熱が歯止めをかけている点にたいへん共感するとともに、男性たちが率先して社会貢献活動に参画することで、地域活性化につながった好事例であると考え。「あじ島冒険楽校」に参加している子どもたちは、宮城県にとどまらず、最近では他県からも参加するほどの広がりを見せているという。地縁、血縁を超えて、世代間交流が進んでいる事例として、たいへん興味深い。

内閣府が実施した、仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス、以下 WLB)をめぐる意識調査をみると、希望と現状のギャップが大きいのは「地域・個人生活」だ。今後、WLBに取り組む地域は「働きやすく暮らしやすいため、子育て世代や準備世代を惹きつける→納税者が増え、自治体の税収も潤う」という正の連鎖が生まれるであろう。実際に、筆者が 3 年前に訪れた英国のバーミンガムでは官民連携して WLB に力を入れたところ、子育て世代が首都圏から移住してきている。それに伴い、労働者の確保を狙う優良企業も多数移転し

てきており、地域経済も活性化している。同様の例は、ドイツやフランスにもある。

今後わが国でも WLB 推進による成功事例は増えていくであろう。ただし、都市と地方ではモデルが異なるため、きめ細やかな施策展開が重要だ。今回、ヒアリング調査をした網地島は、地方の極みにある好事例として、たいへん興味深い。

筆者が感銘を受けているのは、短期的な視点ではなく、中長期的な視点に立って、昔の子どもたちから未来の大人たちに、日本社会が培ってきた伝統的な遊びや文化を伝承しようとしている点だ。

これまで筆者は、諸外国および日本各地の企業や自治体の取り組みを調査した結果、WLB は企業の経営戦略のみならず、自治体による地域戦略としても極めて有効だと筆者は確信している。ワーク・ライフ・バランスは、しばしば一人ひとりの生活時間の配分と矮小化して捉えられやすい。しかし、筆者は「お互いさま、思いやりの相互作用」、「個人を超えて、社会連帯を進めること」だと考えている。

筆者自身の個人的な体験で恐縮だが、独身の時から地域の「子ども会」にボランティアとして参画し、実際に自分自身の子どもを授かり、子育てとか家事をする中で、子どもは社会全体で育てるものだという気持ちになり、父親として自分の子どもに関わることはもちろん、地域全体の子どもたちへと視線が広がっていく、すなわち「地域社会が子どもと関わるのが子どもにとって必要だ」という確信を持つに至った。

あじ島冒険楽校に参加した子どもたちの感想をみると、「網地島はいいところだ。住んでみたい」、「大学生になったら、スタッフにしてほしい」といったように、将来への可能性を感じさせる言葉が並んでいる。もちろん、同校に参加した子どもたちが実際に大きくなって網地島に移住する、スタッフになると短絡的に考えることはできない。

しかし、参加した子どもたち一人ひとりにとって、ひと夏の体験は生涯を通じた「宝」となることであろう。あじ島冒険楽校は、網地島の方々が地縁、血縁を超えて、未来の大人たちにひと夏の楽しい思い出をプレゼントしよう、日頃は他の地域社会で生活している子どもたちに対して関わろう、という考えがベースにある。まさしく、「個人を超えて、社会連帯を進めること」であり、筆者は深い敬意をおぼえる次第である。

(渥美 由喜)

退職後に社会福祉協議会にボランティア登録、 未就学児の子育て支援活動を行う

【取り組みの概要】

「爺時(じじ)の会」は千葉県の八千代市社会福祉協議会のボランティアセンターに登録している男性の保育ボランティアグループ。退職した2人の男性を中心に、社会福祉協議会からの依頼で、母親が講座等に参加する際に子どもを預かる保育のボランティアや、おもちゃの図書館の運営を行っている。市内のボランティア活動の拠点となっている社会福祉協議会や地域でのつながりを広げながら、子育て支援活動を続けている。

1. 団体について

(1) 団体の構成等

社会福祉協議会に登録して活動するボランティアグループ

爺時(じじ)の会は、千葉県の八千代市社会福祉協議会のボランティアセンターに登録しているボランティアのうち、保育ボランティアとして活動している退職した男性7名ほどで構成されている。主として活動しているのは60歳代と70歳の男性2名(保坂さんと斉藤さん)。

八千代市社会福祉協議会のボランティアセンターには、個人登録が約400名、ボランティアグループが45グループで約1000名、市内に20地区に分けた「支会」⁴に約700名、その他に地域の一人暮らしの人に配る給食ボランティア約100名、全体で約2,200名がボランティアとして登録している。

保育のボランティアを希望している人は約200名おり、そのうち女性は約9割、60歳以上の人が多い。八千代市内のボランティア活動は、社会福祉協議会が窓口となり、登録したボランティアとボランティア依頼をつなぐコーディネーター機能を果たしている。



爺時の会 保坂さん(左)と斉藤さん(中央)

(2) 団体発足のきっかけ

保育ボランティア依頼の増加で声がかかり、活動をスタート

⁴ 「支会」とは、八千代市内に20か所設置されている社会福祉協議会により組織された任意団体。自治会、老人クラブ等のメンバー、地域の代表者等が福祉委員として協力し、各種講座の開催や、世代間交流事業、食事サービス等の活動を行っている。

ボランティアセンターに登録し、社会福祉協議会からの依頼で、主に運転ボランティア(車椅子を常時利用している人をリフトカーで送迎するボランティア)を行っていたが、4年ほど前に、第2子が生まれる妊婦を対象とした講座が毎週木曜日に実施された際に、講座の間に第一子を預かる保育ボランティアの要請が社会福祉協議会からあった。保坂さんと斉藤さんは依頼に応じ、これをきっかけとして保育ボランティアを始めるようになった。保育ボランティアを続けるうちに、運転ボランティア等、他のボランティアと区別して依頼や活動の際にわかりやすくするために、約3年前にグループ名をつけた。

保育ボランティアは、市内のさまざまな施設で行事の際の一時保育等が必要な時、社会福祉協議会に依頼がある。介護保険制度導入前には高齢者関連のボランティアの依頼が多かったが、導入後にはボランティアの仕事の多くをヘルパーが担うようになり、その頃から子ども一時保育の依頼が多くなったという。

2. 活動の概要

(1) 活動の内容

おもちゃの図書館の運営

保坂さんと斉藤さんを中心に、ステップ 21 という市子ども支援センターにて、毎月第2、4土曜日の月2回、12時30分から15時30分の3時間、おもちゃの図書館を開催しており、今年で4年目になる。「おもちゃの図書館」とは、子どもがおもちゃで自由に遊び、おもちゃの貸出、修理も行う全国組織で、本来は、障がいのある子どもたちが楽しくおもちゃで遊べるようにと願いつくられたボランティア活動の場である。2人は、社会福祉協議会からの依頼で前任者から運営を引き継いだ。



おもちゃの図書館のクリスマス会

子どもの対象は未就学児。おもちゃを準備したスペースに、子どもと親が来て自由に遊ぶ。両親と来る子どももいれば、母子、父子で来る人もいる。スタッフは、修理を行うおもちゃドクターを含めて1回4、5人がおり、親は子どもと一緒にすごしてもいいし、隣の部屋にいて親同士がしゃべっていてもいい。親同士がしゃべっている時等は、スタッフが子どもと遊ぶ。1つしかないおもちゃを奪い合う子どもに「順番だよ」とルールを伝えるのも仕事の1つ。自分の家では好きなようには散らかせないおもちゃも、ここでは親も驚くくらい好きなように散らかして、後片づけもきちんとさせる。子どもが社会性を身につける場になっているとともに、親(主に母親)がつどえる場となっている。月2回のこの活動のほか、月1回は、出前で別の子育て支援センターでおもちゃの図書館を行っている。

一時保育ボランティアやその他の子育て支援活動

社会福祉協議会から依頼があった時には、社会教育施設の講座等が開催される際の子どもの保育のボランティアを行っている。

斉藤さんは、爺時の会としての活動のほか、学校のある日は毎朝、小学生の登校の見守りを行ったり、休日には学校の体育館で小学生に卓球の指導をしたり、地域ごとにある「長寿会」という集まりに所属して教育委員会からの依頼で保育園や小学校等に昔遊びを教えにいく活動に参加したり、子どもに接するボランティア活動を多く行っている。



保育ボランティアの活動

(2) 活動と学習・経験との関連

抵抗なく活動を開始、活動を始めてから子育て支援の講座に参加

保育ボランティアの活動する前には、2人とも特に子育て支援に関する学習はしていなかった。学習を受けずにボランティアをすることには、2人とも全く抵抗はなかった。保坂さんは、自分の子どもの子育てには積極的に関わったが、その方法についてはあまり覚えていなかった。しかし、孫に接するうちに、子どもへの接し方や、親とは違う関わり方等がわかってきたという。ボランティア経験を重ねていくうちに、子どもの接し方に慣れていった。

活動を始めてから、市内で活動する NPO 法人八千代子どもネットと社会福祉協議会が共催で開催した子育て支援者を対象とした講座に参加した。週 1 回 2 か月間の 8 回連続講座で、行政職員による八千代市の子育ての現状について、小児科医による母子の心身の健康について、市内の子育て支援関連施設の見学、子育て支援について考えるグループワーク、遊び・リクリエーションの実技等の内容で構成される実践的な講座となっていた。この講座に参加することによって、今まで経験から漠然と得ていたものを裏づけることができて、非常に参考になったという。また、NPO 法人八千代子どもネットからの依頼で、同 NPO 法人が主催する乳幼児と母親のリトミック等のワークショップにスタッフとして参加したこともあり、この経験はとても役に立っている。

3. 活動にあたっての連携

(1) 地域他機関・団体との連携

ボランティア活動を通じた地域のつながり

社会福祉協議会の登録ボランティアとしてたくさんの依頼を引き受けて熱心に活動する2人は、協議会のコーディネーターとよく連絡を取り、協議会内に登録ボランティアのためのスペースを設けたり、事業についての提案を行ったりしている。

また、ボランティア活動を行う上で、地域の関連する人たちのつながりを大切にしており、市内の子育て支援の NPO 法人の保育ボランティアを手伝ったり、講座に参加する等、自然体で行動

を広げている。斉藤さんは、居住地域の「長寿会」や「支会」に所属し、また、小学生の登校の見守りや休日の卓球指導を行うなど、地域のボランティア活動のさまざまなつながりを持ち、地域の子育て支援に関わっている。

4. 活動の視点について

（１）活動の社会的役割、地域への還元についての捉え方

「動けるうちは地域のために貢献したい」

保坂さん、斉藤さんは２人とも、社会活動を通して地域のために貢献したいという気持ちを強く持っている。

保坂さんは、祖父母や父母が地域の恵まれない子どもを援助したり、積極的にボランティア活動をしていた影響で、自分も会社を定年退職したらボランティアをしようと思っていた。会社で働いていた時は、仕事が忙しくて地域との関わりもなかったが、今は動けるうちはボランティア活動をしていたいと思っている。

斉藤さんは、勤めていた会社が社会貢献活動に熱心で、総務担当として率先して川の清掃活動等を行ったのがボランティア活動に関心をもつきっかけとなった。斉藤さんには子どもはいないが、近所の子どもを預かったり遊んだりということを昔からしていた。退職後のボランティア活動は、始めは高齢者の病院の送迎等、地域の支会の手伝いをしていたことが広がり、保育のボランティアも抵抗なく始めた。斉藤さんも、「動けるうちは地元で役に立ちたい」と考えている。

（２）活動を通して得る学び等

子どもと接することで得る精神的な充足感

斉藤さんは、保育ボランティアの経験を通して精神的な充足感を得ている。保健所の保育ボランティアを最初に行った際、第１回目の初顔合わせの時は子どもは始めから終わりまでずっと泣いていたので、仕方なく、乳母車に乗せて外に連れて行ったり、途中で母親に渡したりして過ごした。しかし４回目の時には子どもは進んで自分のところに来てくれるようになった。そのような時はボランティアをやっている最高だと思う。また後日、病院でその子どもとばったり会い、自分のところに来てくれた。「それはなんとも言えないボランティア冥利」と斉藤さんは話す。

5. 今までの活動の課題

（１）男性の保育ボランティアグループとしての課題

なかなか集まらない男性の保育ボランティア

おもちゃの図書館の運営や一時預かりの保育ボランティアについて、周りの男性にも声をかけて参加を促すが、なかなか来ない。保坂さんは、多くの男性は、保育ボランティアをすることに、抵抗があるのではないかと考えている。一つには、子どもの世話をすることに慣れていないこと、また、現在の子育ては自分たちの時代の子育てとは流儀が全く違っており、預かる子どもの母親と接することに面倒くささを感じるのではないかと。保坂さんも実際に、叱り方等ささいな

ことで、母親との考え方の違いを難しく感じることもあるという。

また、社会福祉協議会に登録しているボランティアはたくさんいるが、よく活動している人はいくつも掛け持ちしている一方、登録しても活動していない人も大勢いる。保坂さんも斉藤さんも、いくつもボランティア活動を重ねており、忙しい人はどんどん頼られ、さらに忙しくなるという状況になっている。

（２）社会福祉協議会ボランティアセンターとしての課題

増える保育ボランティアの依頼への対応

社会福祉協議会への保育ボランティアの依頼は年々増えている。母親が子どもを預けて学習するような機会が増え、また１回の学習の機会に必要とされるボランティアの数も増えている。登録しているボランティアの人々に、ファックスと郵送で協力をお願いをしているが、増える依頼に対応してボランティアをできる人を確保するのに苦労している。ボランティア登録している人の数は多いが、実際には提示した日時に活動できる人を集めるのは簡単ではない。定年を迎えた人のボランティア登録は徐々に多くなってきているが、何のボランティアをしたいかが特にならない人がほとんどという実情もある。そのような人をうまく取り込みながら、保育ボランティアの依頼に応えられる体制を整えることが必要だと思っている。

６．今後に向けた展望・課題

（１）今後の取り組みと課題

保育ボランティアをさらに組織化

斉藤さんは、今後、保育ボランティアをもっと組織化していきたいと考えている。現在、社会福祉協議会にはたくさんの保育ボランティアの依頼があり、その対応が課題となっている。保育ボランティアを希望する人たちのグループづくりに力を入れて、必要な時に人が集まる体制をつくりたい。男性でも子どもの世話ができることは自分がやってみてわかっているのに、自信がない人でも、まずは一緒にやってみるのが一番だと思う。仲間づくりを求めてボランティアを希望する男性も多いので、そのようなニーズとうまくつなげていきたいと考える。

交通の便のよい社会福祉協議会を会場に、だれでも集える企画の実施

保坂さんは、現在運営しているおもちゃの図書館を発展させ、子どもだけでなく、保護者も大人も高齢者も、いろいろな人が集まって一緒に遊べる企画を、交通の便が良い社会福祉協議会を会場にして行いたいと思っている。おもちゃの図書館をその中に含め、月１、２回実施することを来年度に実現したいと考えている。はじめは参加者として来た人の中から、ボランティアになる人もいるかもしれない。また、現在活動しているおもちゃの図書館は、本来は障がい児のために全国組織の財団が始めたものだが、自分たちのおもちゃの図書館には障がい児は来ていないので、本来の目的に沿う形にして、障がい児が集える場所にしたいとも考えている。

ヒアリングを終えて

退職を機にボランティア活動を始めたお二人は、社会福祉協議会からの依頼をきっかけとして、自然に保育ボランティアの活動と地域のつながりを広げている。退職した男性が、就学児の登下校の見守り等の活動に参加するケースは増えているが、未就学児の子どもを対象とした子育て支援の活動を行う男性は、とても少ないと思われる。自分の子どもの育児にあまり関わってこなかった男性たちは、小さい子どもに接するボランティアをすることに抵抗があるのかもしれない。しかし、斉藤さんが「なんとも言えない冥利」だと話されているような、多くの男性が自分の子どもの育児期には感じ得なかった充足感、人生における経験(キャリア)の広がりをまずは体験してみることは、増加の傾向にあるボランティアを希望する男性たちが、保育のボランティアに関わっていくカギになるのではないかと思う。

お二人が、子育て支援の学習よりもまず活動を始めて保育ボランティアを体験し、活動の途中で学習を行った点も、男性の参画促進を支援する側にとって参考になるだろう。講座等で知識を得ても、それらが活動と結びつかない場合が多くある中、まず活動してから必要なことを学べるシステムをつくることも、活動を広げる有効な方法なのではないだろうか。

(飯島 絵理)

＜男性による活動・取り組み＞

「笑っている父親」を増やすことを目的に 多彩な活動を展開する NPO 法人

NPO 法人ファザーリング・ジャパン

【取り組みの概要】

NPO 法人ファザーリング・ジャパンは、「Fathering＝父親であることを楽しむ生き方」の理解・浸透が、「よい父親」ではなく「笑っている父親」を増やすことや、働き方の見直し、企業の意識改革、社会不安の解消、次世代の育成につながると考え、父親支援に関わるさまざまな活動を展開するために平成 18 年に発足した NPO 法人である。絵本の読み聞かせやワーク・ライフ・バランス関連のセミナーの開催、「子育てパパ力(ぢから)検定」の実施等、国や自治体、企業等と連携しつつ多彩な活動を展開している。

1. 団体について

(1) 団体の体制

NPO 法人ファザーリング・ジャパンは、平成 18 年 11 月に発足し、平成 19 年 4 月に NPO 法人を設立。安藤哲也さんが代表理事を務め、理事 5 名、監事 1 名、アドヴァイザリー・ボード 29 名、約 60 名の全国に広がる会員と、6 社の法人会員により構成されている(平成 21 年 3 月現在)。メンバーは、自営業や会社員の子育て中の父親が中心。

(2) 団体発足のきっかけ

笑っていない父親を笑わせたい

平成 15 年から「パパ's 絵本プロジェクト」を各地で実施していたが、平成 17 年頃から男性の参加が増えてきた。男性の育児参加の機運が高まってきたと思う一方、参加する父親たちを見ると、妻に言われて義務的に来ているような人も多いと感じた。子どもたちも、疲れているような笑わない子どもが必ず何人かいることに気づいた。そこで、笑わない子どもを笑わせるためには、笑っていないお父さんを笑わせたい、育児の楽しさや、子育てが自分の成長にもつながることを伝え、父親であることを楽しむという考え方を広めたいと思い、ファザーリング・ジャパンを立ち上げた。

2. 活動の概要

(1) 活動の内容

父親を支援する事業によって、「よい父親」ではなく「笑っている父親」を増やすこと、10 年後、20 年後の日本社会に大きな変革をもたらすことをめざして、多様な活動を行っている。

絵本の読み聞かせ講座等、セミナーの実施

代表理事の安藤さんは、平成15年に仕事で知り合った父親たちと3人で、絵本の読み聞かせや絵本の紹介等を行う「パパ's 絵本プロジェクト」を始め、全国各地の男女共同参画関連施設や社会教育施設等で絵本の読み聞かせ会を行っている。安藤さんは他に、ワーク・ライフ・バランス関連の講師やパネリスト等も多数行い、また、「小渕内閣府特命担当大臣直轄『ゼロから考える少子化対策プロジェクトチーム』」、「子育て応援とうきょう会議（東京都）」等、国や自治体の委員も多数務めている。



絵本の読み聞かせ



絵本ライブ



プレパパ産後料理セミナー



パパとキッズの週末キャンプ:太古の火起こしに挑戦

子育てパパ力(ぢから)検定の実施

平成20年3月に全国7会場(東京、大阪、新潟、長岡、名古屋、広島、倉敷)にて、父親、父親予備軍の男性、育児に関心があるすべての人を対象として、「妊娠・出産」「赤ちゃんの病気」「乳幼児期の暮らし」「習慣・文化」「子育て支援制度」「ワーク・ライフ・バランス」「内外の子育て事情」等、子育てに関わるさまざまな設問(四者択一、50問)を出題する「子育てパパ力検定」を実施、1,100名を超える受験者が集まり、大きな反響をよんだ。この「子育てパパ力検定」は、「合否」ではなく、高得点の「スーパーパパ」から「ナイスパパ」「チャレンジパパ」、まだまだの「ドキドキパパ」まで4段階でパパ力が認定される。父親が育児そのものへの関心やパートナーとの関係、自身の働き方の見直し、子どもを取り巻く社会環境等への問題意識を喚起することを

目的とし、検定に取り組むことを通じて、家庭や地域での「父親の役割の重要性」に気づき、主体的に子育てに関わる「笑っている父親」が1人でも増えることを期待している。

平成21年2月には、ネット環境があれば、受験料300円でいつでもどこでも受験できる「パパ検オンライン模試」を開始した。

父親支援基金「ファザーリング・ファンド」の創設

これまでの活動を通して、笑いたくても笑えない状況の父親がいることに気づき、特に父親同士が支え合い連帯することを期待して、基金事業を始めた。この父親支援基金「ファザーリング・ファンド」は、個人や企業、自治体等から寄付や出資・融資等で集めた資金を、父親の育児やその関連分野の個人および団体に寄付や出資・融資等で助成していくもの。サポート先は分野や領域が多様であるため、それぞれのテーマ・対象に合わせた個別の基金を企画し運営していく形態をとっている。この基金の第一弾として、平成21年2月に、父子家庭支援を目的とした「フレンチトースト基金」（父子家庭支援基金）を企画した。基金の名“フレンチトースト”は、映画『クレイマー・クレイマー』（1979年、米）で父子家庭の父親が子どもに初めて作った料理からとっている。寄付の受給申請時には申請書類の1つとして、「私の子育て」がテーマの父親の作文を提出すること、また、受給終了後にも「どのように子育てが変わり子どもの笑顔が増えたか」等の作文や「子どもが描く父親の似顔絵」の提出することが条件となっている。事業を通して、父子家庭の現状や父親の困窮が可視化されることにより社会全体の関心が高まり、行政への政策提言や資金面以外に必要とされている支援の具現化につなげていくことも目的とされている。

コミュニティサイトの運営

父親支援の情報提供や父親の子育てに関わる意見・情報交換等のためのポータルサイト Fathering Studioの運営、メールマガジンの発信を行っている。

コンサルタント事業

企業への父親に関するマーケティングの支援、企業との商品・サービス共同開発（絵本クラブ パパ向けコース、父子キャンプ）、共同セミナーの開催等、企業に対して、あるいは企業と組んで、父親のあり方に関する提案、情報発信を行っている。

リサーチ事業

「父親が子育てしやすい会社」についてのアンケートを、第一生命経済研究所と共同で実施している。従業員数301人以上の全上場企業に調査票を郵送、今までに年1回、2度実施し、平成21年4月に第3回目を実施する予定。

音楽配信事業

平成20年に、スタッフの1人でミュージシャンである父親が作曲して歌った「お父さんソング」の音楽配信、ケータイ着うた配信を開始した。

（２）活動と学習・経験との関連

各メンバーが仕事で培った力を活動に活かす

安藤さんは今まで、出版社や書店、電子書籍事業等の仕事をしてきており、これらの仕事で培った広報・宣伝やマーケティングに関わる能力やネットワークが、現在の活動に活かされている。新しい提案を社会に周知するためには、メディアを活用しないとなかなか届かないと考えるが、その手法・内容は、安藤さんのこれまでの仕事の専門性を活かした得意分野である。他のメンバーも、いろいろな業界で活躍している人がたくさんいるので、各々が得意とすることに参加して力を発揮している。例えば、父親支援基金の事業は、金融関連で働くメンバーが手を挙げてしくみをつくり、子育てパパ力検定は、保育士経験のあるメンバーが検定内容を企画している。

3. 活動にあたっての内外の連携

（１）団体メンバー間の関係

ビジョンにそってチームで事業を展開

理事会は会員に公開して２か月に１回行い、総会は年に１回行っている。開催するイベント等でメンバー同士はよく会っているが、メンバーが全国に広がっていることもあり、メールでの情報交換は頻繁に行っている。

企画は主に代表理事の安藤さんが考え、細かい内容についてはメンバーで話し合って詰めていく。安藤さんがメンバーの得意分野を考慮して事業ごとにプロジェクトチームを作り、チームのリーダーにまかせて運営を進めている。安藤さんはそれぞれの事業内容がファザーリング・ジャパンのビジョンやコンセプトとのぶれがないように見ている。安藤さん以外のメンバーは実費以外の報酬を受け取っていないが、各事業はチームリーダーを中心にうまく展開されており、各メンバーも得意分野に応じた仕事以外での活躍の場を求めている、活動を通じた充足感も得ていると考えている。「この指とまれ方式」と呼んでいて、できる人ができる時に得意なことを楽しんで行っており、小さい頃、原っぱで遊んでいたような感覚を大切にしている。

（２）他機関・団体との連携

事業ごとの特色に合った機関と連携

事業の実施にあたっては、各々の事業の内容に関連した企業と協働で行う場合が多い。例えば、人材派遣事業のテンプスタッフ株式会社が運営する女性総合支援センター テンプ・アップと共催し、セミナー（平成20年11月ファザーリング・ジャパン×テンプスタッフ コラボセミナー「教えて！先輩パパ～共働き・子育て・キャリア・パートナーシップについて」）を開催したり、メンバーの1人が代表取締役を務める株式会社絵本ナビと共同で、絵本の年間定期購読の父親向けコース（絵本クラブ パパ向け年齢別コース）を開発したりしている。また、平成21年2月よりスタートさせた「子育てパパ力検定」のオンライン模試は、検定試験の企画・運営サポート事業を行う日本出版販売株式会社と連携し、この企業が運営するオンライン受験サイト「ネットde 受験」のシステムを利用している。また安藤さんは、内閣府や地方自治体の委員を複数務めるほか、男女共同参画関連施設や社会教育施設等からの依頼で父親の子育て参画やワーク・ライフ・バランス

に関する講演を多数行う等、行政とのつながりも多く持っている。

立ち上げ当初は、安藤さんが営業をして連携先を探していたが、現在は連携を含めた依頼が1日に何本も入るので、やれることとやれないことを判断し、優先順位をつけて依頼を受けたり連携したりしている。

4. 活動の視点について

(1) 活動の社会的役割、地域への還元についての捉え方

社会の変革をめざした活動

ファザーリング・ジャパンのホームページ(<http://www.fathering.jp/>)に掲載されている「FJ 事業ビジョン」には、「Fathering Japan は、父親支援事業による『Fathering』の理解・浸透こそが、『よい父親』ではなく『笑っている父親』を増やし、ひいてはそれが働き方の見直し、企業の意識改革、社会不安の解消、次世代の育成につながり、10年後、20年後の社会に大きな変革をもたらすということを信じ、これを目的（ミッション）としてさまざまな事業を展開していく、ソーシャル・ビジネス・プロジェクトです」とある。活動によって、父親個人の意識や生活に影響を与えるのみでなく、子育てに関わる社会問題の解決に向けて取り組むことにより、社会に影響を与え、変化をもたらすことをめざし、「公益」のための事業を行っている。

安藤さんは、小学校 PTA 会長等の地域での活動と、もう少し広い範囲の社会的な活動を並行して行っている。父子家庭支援を目的とした「フレンチトースト基金」を始めたのは、身近に過労死したシングルファザーがおり、その社会的な問題性を看過できなかったという。身近な出来事を、次世代育成や家族についての社会的な問題として捉え、社会を変えていきたいという思いを活動につなげている。

(2) 活動を通して得る学び

さまざまなネットワークで得られた学びを次の事業に活かす

安藤さんは、講演依頼や連携事業で全国のさまざまな機関、さまざまな人に会うことによって得られるものが一番大きいという。各地の担当者や参加者等と話すと、その地域の独特の課題もみえる。日常的にそのような情報を収集できるのはありがたいと思っている。また、国や自治体と連携できることは、現状や課題を知る上で非常に勉強になっている。

メンバーも活動を通して、メンバー同士や関わる人たちと情報交換し話し合うなかで学び、それらをまた次の事業展開に活かしている。例えば、メンバーには父子家庭の父親が3名いるが、彼らの話を他のメンバーが聴くうちに父子家庭の社会的な問題が浮かび上がり、自分たちの誰でも父子家庭にはなりうる立場なのだから、これらの問題を解決して安心して生活できる社会をつくっていかうということになり、父子家庭支援の事業を企画することになった。

(3) 社会的性役割についての捉え方

虐待や母親の育児不安等、家庭のなかで起きている問題を解決するキーパーソンが父親であると考えている。父親たちが、義務ではなく、楽しく育児をすることで、家族や地域も変わってい

く、それを実証するために1つ1つ取り組んでいる。

安藤さんは、地域での PTA の活動で、専業主婦をしている女性の中に、会社にいると高い能力を発揮できるし向いているだろうと思う人に出会うという。男性も、育児や家事の能力が高いのに気づいていない人も多いかもしれない。本人が気づかない、気づけないような状況を生んでいる社会がおかしいと思うし、育児をするためにキャリアをあきらめたり、誰かが何かを我慢するような社会はおかしいと思う。そういう社会に自分がいることすらイヤなので、そのような状況を変えたいと思ってファザーリング・ジャパンの活動を行っている。

5. 今までの活動の評価と課題

(1) 活動の評価・課題

安藤さんは、今までの仕事で培った感覚で、成功するという勝算があって活動を始めた。自分が関わることで父親の育児参画はもっと加速できるという気がした。活動を始めた時に、例えば北欧のように育児を男性も9割とるというようなことに15年か20年かかるとしたら、自分たちが活動することでそれが10年になったらおもしろいと思った。その点では100点満点で70点くらいまではできているかなと考えている。

企業の管理職や地方の家庭等は、父親の育児参画についての理解がなかなか浸透しない。意識の上では良いこととして反対しなくても、実践としてはなかなか進まない。当事者が自発的に行動するような情報提供、しくみづくりを行っていきたい。

安藤さん自身の生活は、会社員をしている時よりも子どもと過ごす時間が断然増えている。平日は1日5、6時間くらいは子どもと一緒にすごしている。地方へは講演等で年間50日ほど行っているが、出張の多いサラリーマンよりよほど少ないと考えている。会社を辞めてNPO法人の活動に専念することで、家庭生活とのバランスは非常にようになった。

6. 今後に向けた展望・課題

(1) 今後新たに実施する予定の取り組み

父親が主体となる保育園づくり

父親も子どもも成長していける、父親が主体となって保育園を創り、運営することを計画している。保育園の具体的な運営ルール、園舎のデザインや建材選び、園庭の構成、食器・食材の選択、遊具・絵本のセレクト、遠足の行き先、イベントのプログラム等は、園まかせにせず入園した子の父親たち中心になって議論・検討を重ね、自分たちで企画・立案・実践していくというもの。そして、こうした家庭だけではできない貴重な体験を通して、父親たちが、子どもにも、家族にも、地域にも、未来にも優しい眼差しを持ち、他者との共生を前提とした自分の生き方・働き方の見直しと実践につなげることをめざす。土地や建物を含めた資金については協力者を待っているところだ。ニーズがあり機が熟せば連携先があると考えている。

ファザーリングスクールの実施

父親を対象としたスクール事業を実施することを計画している。連続の 8 回コースや土日だけのコース等を、公共の施設や保育園・幼稚園への出前等で、料理や絵本等、さまざまなテーマを盛り込んで企画する予定である。

(2) 今後に向けた課題・方向性

事業型 NPO としての新しいモデルをめざす

「行政・自治体」「企業」「地域社会」「家族」の 4 つのなかで、今は「家族」が一番手ごわいと感じている。非常に固定的な性別役割意識を持っている人が多い地域がまだあり、「家族」にどのように働きかけ、どのように変えていくかは課題である。母親向けのセミナーや、社会環境・時代の変化に応じた子育て支援について中高年・祖父母世代向けのセミナーも開催していきたいと考えている。

セミナーやワークショップは、NPO 法人を立ち上げた平成 19 年には年間 25 本しかなかったが、平成 20 年は 110 本に増えた。最初は資金もなく、安藤さんの自宅を担保にして銀行から借入れをし、貯金を崩して事務所も借りた。子育てパパ力検定の実施を境に注目をあびるようになってからは、行政・企業等との連携や資金調達の苦労はない。持っている力を全部出し、行政の助成金に頼らない事業型の NPO をめざしている。利益追求ではないソーシャル・ビジネスで食べていける社会の循環を創りたい。現在は、学生から新卒採用があるかという問い合わせはあるが、インターンが何人かいるだけ。事業により収入を得ているのは現在は安藤さんだけが、事業をうまく拡大していけば、新卒を採用することもできると思う。日本の NPO の新しいモデルになれるといいと考えている。

ヒアリングを終えて

男性の育児参画や性別役割、個人の意識変容等に焦点をあてた 1990 年代前後の男性たちの“運動”とは全く異なる方法・内容で男性の育児参画、次世代育成支援活動の参画促進のための活動を行う NPO 法人。その事業展開や広報の手法は、代表理事安藤さんの今までの仕事で蓄積した経験が活かされ、圧倒的な広報・宣伝・連携力を持つ。メンバーそれぞれが、金融、保育等、仕事で培った力を十分に活かして事業を行い、活動を通して父親の育児参画に関わる新たな問題について気づき、それらをまた事業展開につなげている。行政の助成金に頼らず事業の利益をあげつつ、次世代育成支援の課題解決を図るファザーリング・ジャパンの活動は、主に女性が担っている次世代育成支援活動の分野において、時代に即したこれからの活動として大いに参考になるのではないだろうか。

(飯島 絵理)

仕事も子育ても 楽しもう！

お父さん
お母さん

子育ても地域活動も
夫婦や家族で楽しむ時代がやって来た！

●日時・場所

2008.11.18(火)

13:00開演 約1時間半 吉浜小学校体育館

●講師

安藤哲也

NPO法人ファザーリング・ジャパン
代表理事



NPO法人ファザーリング・ジャパン代表理事の安藤氏を迎えて成人教育委員会主催を行います。安藤氏が立ち上げたNPO法人の活動、今年第1回「子育てパパカ(ちから)検定」について、また、2児の父親として、PTA会長としてのお話など「父親として育児として何を出来るかを考えよう」をテーマに、家族のあり方、子供との関係、仕事のことなどをお話していただき、後半は参加されている方々と意見交換をしながら、子育てや地域活動、及びPTAの活動など、参加者の立場に立って問題を共有しながらお話し合いをしていきたいと思います。

この講演を吉浜小学校に限らず、源河原の小中学校の保護者の皆さま方に参加していただきたいと思いご案内いたします。多くの方が参加されることを望みます。平日ではありますがお時間の許すかぎりお父様にもご参加をお願いいたします。

参加申込書

参加申込書は、
10分程度で記入
済みの表にお返し下さい

参加申込書

参加申込書は、
10分程度で記入
済みの表にお返し下さい

参加申込書

参加申込書は、
10分程度で記入
済みの表にお返し下さい

参加申込書

参加申込書は、
10分程度で記入
済みの表にお返し下さい

ファザーリングのすすめ お父さんを楽しもう！！

宇都宮市では、父親の家庭参画支援、親力向上支援の一環として、
「ファザーリング(父親であることを楽しむ生き方)」を推進しています。

ファザーリングってなに？

ファザーリングとは、「父親であることを楽しむ生き方」のことです。

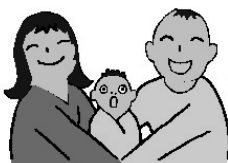
「よい父親」ではなく、子育ても仕事も社会活動も趣味も、人生を楽しむことができる
「楽しい父親」を増やすことをコンセプトとしています。

なぜ、ファザーリングが必要なの？

最近では、積極的に子育てしたいというお父さんも多く、子どもと一緒に楽しんでいるお父さんをよく見かけます。しかし、子育てしたくても、毎日残業で子どもの顔しか見られない…なんてお父さんも多いのでは？

平成18年版厚生労働白書によると、日本の男性が育児・家事に費やす時間は1日48分、育児のみだと、わずか1日25分と極めて短い状況です。
その主な原因は、子育て世代の男性の長時間労働。そのことにより、育児に参加したくても参加できない男性が多く、希望にそったワーク・ライフ・バランス(※1)の実現が難しい状況にあります。

※1 仕事と家庭生活、地域生活、個人の自己啓発など、さまざまな活動について、自らが希望するバランスで展開できること



子育ては義務である前に、楽しい権利です。子育てしないなんてもったいない！！
働き方を見直して、できることから始めてみましょう！

問い合わせは、宇都宮市男女共同参画推進センター まで
320-0845 宇都宮市明保町7-1 TEL 636-4071 FAX 636-4079

高津区子育てフォーラム

パパの極意



～仕事も育児も楽しむ生き方

子育ての時期は働き盛りの時期でもありますよね。

仕事も大事にしたいし、子育ても楽しみたい。

…そんなヒントを一緒に考えてみませんか？



子育て中のパパ・ママ。これからパパ・ママになる方。そして子どもや子育てに関心のある方。多くの方のご参加をお待ちしています！

日時 3月20日(金) 13:30～15:30
場所 高津区役所 5階 第1会議室
内容 講師による講演・絵本の読み聞かせ
定員 100名
保育 10名(6か月～未就学児)
参加費 無料
※いずれも定員を超えた場合、抽選とさせていただきます。
申し込み締切 3月16日(月)



安藤パパおすすめの
絵本の紹介もあります！

＜講師 安藤 哲也氏＞
(NPO法人ファザーリング・ジャパン代表理事)
出版社、書店、IT企業などの転職を経て 2006 年に父親の育児支援を行うNPO法人を設立。「育児も仕事も人生も笑って楽しめる父親を増やしたい」と講演活動等で全国を飛び回る。2007 年に話題になった「子育てパパカ(ちから)検定(パパ検定)」の仕掛け人。3児の父であり、小学校のPTA会長も務める。著書に「パパの極意 仕事も育児も楽しむ生き方」(NHK出版生活人新書)「PaPa's 絵本ガイド 33～パパのための Rock'n 絵本ガイド」(小学館)等

申し込み・問合せ先
高津区役所 ことも支援室
電話：044-861-3329

地域における防犯活動から さまざまな活動へと広がりを求めて

元石川おやじの会

【取り組みの概要】

元石川おやじの会は、横浜市立元石川小学校に子どもを通学させている父親たちが、子どもたちの安全を守ることを中心に、夜間のパトロールを実施するボランティア団体として発足し、その後防災活動、各種イベント活動、環境活動など、学校を中心に地域、商店街などで多様な活動を展開している。子どもたちの安全を地域で見守る活動等を行う父親たちの姿を子どもたちに見てもらうことにより、父親との結びつきが深まる等の効果も表れている。

1. 団体について

フラットな関係を重視

メンバーは登録上は約 70 名であるが、実際に常時活動しているのは 20 名くらいである。

会長はいるが、他に特に役職はおいていない。その意味でメンバーは皆フラットな関係である。

加入もメーリングリストに登録をしてもらうことで会員となる方式をとっており、特に入会のための諸手続はとっていない。誰でも気軽に参加できることを第一にしているためである。

メンバーは 40 歳代を中心に 30 歳代から 60 歳代までの男性が中心。女性も数名参加している。

職業は会社員が多いが、自営業（牛乳屋、床屋、税理士など）の人も結構いる。

子どもたちの安全を守るための防犯活動が初発

元石川おやじの会は横浜市立元石川小学校に子どもを通わせている父親たちが中心となって、平成 15 年 12 月に立ち上げたボランティア団体である。

当時、社会的にも子どもたちの安全ということが問題となりつつあった中で、近所に不審者がいるという情報が入ってきたり、元石川小学校にも夜間、人が侵入することがあって、子どもたちの安全を守るために学校周辺を見回る活動を行おうということで始まった。

2. 活動の概要

防犯活動からさまざまな活動への広がり

活動は子どもたちのためになることを基本として取り組んでいる。当初は元石川小学校が中心であったが、小学校区およびその周辺での活動も行うようになっている。

防犯活動について

防犯活動は、発足当初から力を入れている活動で、横浜市から自主防犯活動の委嘱団体として、平成 17 年 11 月に神奈川県警より青色回転灯搭載車両によるパトロール活動について認可を受け、元石川小学校の学区内を中心にパトロールを行っている。自分たちの自家用車に青色回転灯をつ

けて巡回する。暮れなどには町内会の防犯部などと一緒にやる場合もある。現在、28 台の青パト車両の登録(運転パトロール許可証も 28 名)がある。当番制ではなく、各自が自分の自家用車に青色回転灯をつけて、時間のあいているタイミングで自主的に行っており、役割分担などは特にない。

防災活動について

防災活動は、おやじの会が主催しているわけではないが、元石川小学校が防災拠点になっているので、その拠点の運営委員会の事務局をおやじの会のメンバーで担っている。

3 年前までは、地域の防災訓練は自治会だけで主催しており、参加人員もごく限られた自治会関係者のみで行われていた。しかし、防犯同様、これでは万が一のときに不安で機能しないと感じ、おやじの会で防災に関心の高いメンバーが中心となって、自治会役員とコンタクトをもち、防災拠点運営委員会を立ち上げた。

元石川小学校の防災拠点は、避難地域となっている 5 自治会が 2 年サイクルの持ち回りで当番自治会となって防災訓練を実施している。そのため、防災訓練のノウハウが次の当番自治会にうまく引き継がれず、これまでは従来どおりの防災訓練を繰り返すだけとなっていた。防災拠点運営委員会の事務局をおやじの会が担うことにより、毎年同じメンバーが防災訓練に関わることで、毎年少しずつではあるが、防災訓練をより充実したものに変えることができている。また、防災時のことを想定し、徐々にではあるが、地域の課題なども把握し、役割分担を決めて、万が一の事態に備えている。

学校や商店街と連携した活動

もともと元石川小学校から発足したので、小学校の行事とは必ずリンクして、小学校のお祭り、餅つき大会への参加、授業参観や運動会の時の警備等も行っている。

また、たまプラーザ商店街とも連携し、夏祭り、たまプラーザ祭りなどに店を出している。商店街の防犯活動にも後で述べる「民間交番」の立ち上げということで参加している。

小学校のお祭りは、PTA 行事ではあるが委員のほとんどは母親となっているため、お祭り前日や当日の準備、後片付けのお手伝いを教職員と一緒にやっている。また、お祭りのイベントとして、子どもたちの防犯に関するイベント(大声コンテスト：日頃から何かあったときに大きな声を出せるように練習をさせる)や、親子の親睦を深めるための親子工作教室、紙飛行機大会などを主催している。餅つき大会では、つき手として自治会の人々が来てくれるが、おやじの会の父親た



地域の一斉年末防犯パトロールに参加



防災訓練の様子



小学校のお祭りで：親子紙飛行機大会



餅つき大会：子どもたちの餅つき体験
地域の人たちと一緒に



夏休みの親子花火大会でのすいか割り



地域ケアプラザでおやじの会が出店

ちもつき手として、自治会の人たちと顔なじみになっており、交流のよい場となっている。

新しい取り組み

新しい取り組みとしては、商店街の人たちと話をする中、子どもたちにいい未来を残してやろうということで、環境問題、ゴミ問題などにも取り組もうとしている。

会の運営について

月に1回、第2土曜日に定例会を開催し、活動内容を話し合っている。参加者は10名から多い場合は20名くらいになることもある。集まらない場合には、メーリングリストを使って、メールでやりとりをすることもある。

防災に関する研修会への参加

防災に関しては市の主催する防災リーダー研修会に参加したり、アマチュア無線の免許を持っているメンバーを中心に無線チームを結成し、横浜市アマチュア無線非常時通信協力会と連携をとりながら非常時に備えている。

また、メンバーに消防のOBで防犯、防災のアドバイザーがおり、機会あるごとにいろいろ指

導を受けている。

3. 活動にあたっての内外の連携

個人個人ができる時にできる活動を

あくまでも1人の子どもの親として、また地域住民として活動することを基本としている。会にはさまざまな趣味、特技、キャラクターを持った人が集まっており、それぞれ得意分野を活かして活動している。例えば、平日比較的時間がとれ、人との交流が得意な自営業の人は、学校や警察、商店街との連絡・調整や、新規メンバーの勧誘などを中心的に行ったり、デザインの得意な人は、防犯グッズのデザイン、ロゴ作成などを行ったりしている。無線や電機技術の得意な人は、防犯、防災で使うアマチュア無線についてメンバーの免許取得の手伝いをしたり、防犯、防災に詳しい人は防犯、防災の中心的な役割を果たしたりしている。その他、マスコミ関係、教員、法律関係など、それぞれ自分の職業での知識、経験、人脈を活かして活動している。また共通の趣味でバンドを結成して活動しているメンバーもいる。

また、会のポリシーとして、個人個人ができるときにできる活動を、ということをもットーにしているので、基本的にはみんなが参加してやるというわけではなく、こういうことをやってみませんかと提案し、それに興味を持ったメンバーが集まって活動するという形になっている。

さまざまな他機関・団体との連携

元石川小学校およびPTAはもとより、現在では自治会や商店街などとも連携をとりながら活動している。

自治会とは主に防犯や防災関連で連携をとっており、防災では防災拠点運営委員会の事務局として毎年、防災訓練の裏方を務めている。メンバーには消防団に入っている者も多数おり、また、防災を通じて、消防署や医師会、非常時通信協力会などとも連携をとっている。

商店街とは、防犯をきっかけに、夏祭りへの参加、「民間交番」への参画なども行っている。

元石川おやじの会は小学校との関わりが強いため、子どもたちのイベントを企画する際などは、学校経由で広報ができるため、地域のお祭り、イベントなどでは連携しながら子どもたちの参加を呼びかけたりしている。

民間交番などは、新しい取り組みとして県や市から補助金をもらっているが、補助金を受けるには商店街や自治会だけの活動ではなく地域住民の参加が不可欠となっている。また、地域住民の窓口的役割をおやじの会が担い、保護者を中心に活動と呼びかけることにより、活動が成り立っている部分も大きい。一方、おやじの会としては、資金的にはほとんど収入がないため、ともに活動することによって商店街の資金や補助金を共有し使用している。

行政等との連携

防犯活動において、青色回転灯搭載車両(青パト)によるパトロール活動をするために、横浜市の委嘱団体となり、警察の認可を受けて活動を行っている。警察とは常に連携、情報交換を行い、地域の防犯活動を行っている。

4. 活動の視点について

活動の社会的役割、地域への還元についての捉え方

自分たちの地域の子どもたちを自分たちで育て、自分たちの地域を自分たちで守り、住みよい街にしていきたいということから、まず防犯活動を始め、それが地域へのさまざまな活動へと広がっていった。そこに会の社会的役割があると考えている。そうした活動が地域の安全に寄与していると受けとめている。



青葉警察署での青パトの決起集会後、小学校にて

活動を通して得る学び等

いろいろな活動を通してさまざまな子どもたちと接することにより、父親として普段あまり接することのない子どもたちの考え方、行動について学ぶことができる。

朝、防犯のために校門や通学路によく立っている父親や住民は、子どもたちにとって顔なじみのお父さん、おじさんとして親しまれており、挨拶はもちろんのこと、普段の学校生活のことなども話したりしている。お祭りやイベントなどでおやじの会が出店することもあり、その時には子どもたちが積極的に手伝ったりしてくれる。このような活動を通じた地域の父親たちと子どもたちとの関わりの中で、お互いの結びつきが深まっている。

5. 今までの活動の評価、課題と工夫

活動の評価

はじめは小学校を中心に活動を行っていたが、徐々に地域や行政とも関わりを持つことができ、周囲からも認知される団体となってきた。そのきっかけとして、平成18年の4月から5月にかけて、地域で「ひったくり」が多発したことがあった。1か月で何十件もあり、これは何とかしなければならぬということで、青パトで夜間パトロールをしたり、駅前でビラを配ったりしたことがあった。そういう時に駅(東急電鉄)、警察、行政とも話をし、いろいろなところでビラを配った。それが新聞等のマスコミにも取り上げられることにより、おやじの会の存在が地域の人々に認識されるようになった。

団体メンバーに関わる課題

活動が徐々に大きくなると、新たに入ってくる人が、土日両日や、会社を休んで平日の授業参観日の校門警備、児童の課外活動・体験学習のお手伝いボランティアなどの活動をするメンバーの姿を見て、そこまでの活動をすることはできないと思って参加しにくくなっている面がある。実際はちょっとお手伝いする程度の参加や、興味のあるところだけ参加するというスタンスでもいいのだが、なかなかその点が理解しにくいようだ。

新しい人には、いろいろなイベントの時に声をかける、学校の行事の時のボランティア活動に参加してきた時に声をかける、新入生の保護者に案内を出すという方法で呼びかけている。

年間数名ずつメンバーは増えているが、子どもが小学校を卒業してしまうと活動が少なくなったり、仕事で忙しく参加できなくなるメンバーもあり、一度、活動が途絶えてしまうと、活動に復帰しづらいところもある。結果として、設立当初の活発に活動していたメンバーは徐々に抜けつつあり、新しいメンバーは定着するかどうかまだわからない。今後、継続的な活動ができるかどうかという不安が常につきまとう。現状は、主な活動メンバーとしては増減なしぐらいの状態である。

団体としての対外的なことに関わる課題

活動の方向性に関しては、元石川小学校の学区内のこと、または子どもたちに関することを motto やっていきべきだというスタンスと、もうちょっと範囲を広げて、いろいろな団体とも関わり合って取り組んだ方がよいというスタンスの人がいる。会長は、基本的にはこの会は、小学校に特化したわけではなく、地域のボランティア団体として活動しようと言っているが、その活動の方向をめぐる議論がある。

また、会の運営資金をどうするかということも課題となっている。基本的に会費制をとっておらず、行政からの助成金や寄付などでまかなっている。多くの活動はメンバーが自腹を切る形で行っている。

課題の乗り越え方、解決の工夫

各メンバーが自分の得意分野をもち、それぞれの分野で力を発揮して課題に向かっている。たとえば、牛乳屋のメンバーは配達が早朝なので、お昼は時間がとれることから、行政や警察、学校との対応の窓口になっている。一番の課題は、平日昼間に動ける人が少ないということであり、このメンバーの活動にかなり頼っている。少しずつではあるが、女性のメンバーも増えており、平日昼間の活動を担ってもらっている部分もある。土日、平日夜が中心となる父親たちの活動を他団体との連携していく活動にしていくために、こういった人の参加が大切であると考えている。

6. 今後に向けた展望・課題

今後実施予定の事業・取り組み

・民間交番および防犯広報パトロール

会独自の活動ではないが、商店街とおやじの会が参画して、民間の空き店舗を使った交番をつくり、防犯活動を行っている人たちの拠点にしようと考えている。横浜市と青葉区から助成金が出るので、それを申請しようとしている。

防犯広報パトロールは、青パトにスピーカーをつけて、決められたテープを流し、防犯の啓発活動をするものである。警察からも依頼があり、実施する方向で進めている。

・環境問題

商店街でリサイクル、ゴミ問題に非常に強い関心を持っている人がおり、一緒に何かできないかと話し合っている。

・地域新聞づくり

おやじの会主体ではないが、地域の新聞を出しているところがあり、地元のことを調べている。

そこで子どもたちにいろいろな形で取材してもらい取り組みをやらうとしている。基本的には子どもたちが自主的に取材をするのに協力することを考えている。

今後の活動の方向および課題

基本的には現在の路線で活動をブラッシュアップしていき、長く継続できる活動としていく。

おやじの会は男性中心であるが、特に女性を排除しているわけではない。夫婦でメンバーとなっている人もいる。父親が参加する場合には母親(妻)の理解がないと活動はできないと考えている。活動にあたっては、家庭を第一に優先するということにしている。無理に参加させるようなことは絶対に言わないようにしている。そうでないと、土日とか活動に出かける場合など、妻から土日なのにごどこかへ行ってしまおうといわれ、活動しにくくなってしまう。その点は皆、共通の理解を持っている。最近は父親も子育てや地域のことに関心のある人も増えてきていると感じる。また、父親同士のつながりを持つことに関心がある男性も増えてきているが、おやじの会などの組織がないところでは、どうすればいいのか、最初のきっかけ作りが難しい。

こうした父親たちの活動を広く伝えてもらう場があるとよい。今まで父親のイメージはとにかく仕事一筋といった受けとめ方が一般的であるが、父親の生き方として子育てもけっこう楽しいということを広くアピールできる場があると、父親たちに子育てにも興味を持ってもらえると思う。元石川おやじの会にはホームページがあり、アクセス数は多い。

なお、おやじの会とは一応別組織で、「元石川小学校学援隊」と呼ばれる組織がある。メンバーはおやじの会をはじめ、元石川小学校の保護者、自治会、地域住民からなる。目的は「元石川小学校やその通学路における児童の安全を確保し、その学区内および周辺地域の治安を確保することにより、児童が安全で楽しい学校生活を送れるためのボランティア活動を実施する」ことである。活動としては登下校時の校門での児童の見守り、登下校中の通学路の安全確保、パトロール活動、校内の巡回などである。「元石川小学校学援隊」は、青葉区で唯一「よこはま学援隊」活動助成制度による初年度第一次助成団体としてモデル校に選定されている。

ヒアリングを終えて

元石川おやじの会は小学校周辺の防犯活動を中心として発足し、その後防災活動、各種イベント活動、環境活動などとその活動の場を広げていっている。こうした防犯・防災活動という地域に密着した地道な活動を通して、子どもたちに安心して暮らせる地域、学校、家庭を残していこうという会のねらいは無理のないものであり、そうした地域における父親たちの活動の姿は、仕事や家庭とは違った父親像を子どもたちに伝えていくことにもなっている。また、防犯・防災活動という地域のさまざまな人々との密接な協力・連携が欠かせない活動は、地域他機関・団体との連携を深めることにもつながっており、結果として地域の活性化に寄与する可能性は高いとみることができる。また、会は組織的には非常にフラットであり、活動も各人がそれぞれ参加できる範囲で参加するという方針を堅持しており、決して無理をしないという会のあり方は地域における活動の持続性を考える上で示唆に富んでいる。

男女共同参画の視点からは、その会の性格から男性(父親)中心となることはやむをえないが、会として特に女性を排除しているわけではなく、さまざまな活動の広がりとともに女性が参加す

る場面は増えてきており、これまでの性別役割観を問いなおす契機になる可能性を秘めていると思われる。会の今後の活動を見守りたい。

(近藤 弘)

男性が仕掛けた、地域の厚みづくりによる 子育て支援の展開

NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構
久米地区学社連携協力促進協議会

【取り組みの概要】

- ア. 任意団体「学びのコミュニティ研究塾」にて、コミュニティと学びの関係について学習していく中から、子どもも含め社会全体のチャレンジする意欲低下が課題として出てきた。そこで、県内に子どもの自主的なチャレンジを支援するしくみをつくろうと NPO を設立した。3つの「ショク」触・食・職をキーワードに活動をはじめた。
- イ. 愛媛県松山市久米校区では平成 20 年秋に「久米学校支援地域本部事業」がスタートした。これに先立ち、久米地区では近年、地域の公民館が主導し、学校や地域の各団体、また NPO が連携して、地域の廃園となったみかん畑を拠点とした里山づくり事業や、子どもたちの通学路を検証する安全マップづくりなどの独自の事業を展開してきており、子どもたちの健全育成をめざす地域ぐるみの取り組みが定着してきている。平成 19 年度には子どもたちと地域社会との日常的な出会いやボランティア活動の推進を図り「久米地区学社連携協力促進協議会」を設置、平成 20 年度からの学校支援地域本部事業につながっている。久米地区の活動の展開の推進役を果たしてきたのが公民館長や元 PTA 役員等の地域の男性たちであり、使命感と遊び心をベースに、優れた企画運営能力とネットワーク力を持った力強い活動により、子どもを中心とした新たなコミュニティづくりの輪が広がってきている。

1. 団体について

ア. NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構（平成 18 年発足）

代表：村上伸二 元学校長（インタビューを受けた人：事務局 仙波英徳）

青少年の「チャレンジ活動」を支援する NPO 団体の会員は約 100 名。現職や元教員、PTA 出身者、社会教育行政関係者、公民館関係者、防犯や補導員など自治会で活動している人など、趣旨に賛同して集まった広域的な集団である。大学生は準会員。現在、アクティブメンバーは松山地域で約 20 名、八幡浜地域で約 30 名。会費は年会費 1,000 円で会員にはメーリングリストを通じて情報提供および交換を行っている。NPO には事業ごとに委員会があり、「みんなでチャレンジ」の委員会、支援事業ごとの委員会、全体をまとめる広報委員会などが緩い形で作られ、メンバーは好きな委員会に所属して活動する。

本 NPO は平成 18 年に発足したが、10 年ほど前の PTA 改革をきっかけとして元 PTA 役員を中心に人々が学習・実践活動を継続し、発展的に NPO 活動につながってきている。平成 8～9 年に、松山市 PTA 連合会で子どもたちの問題を見直そうと、市内の子ども 1 万人を対象としたアンケートを実施し、子どもたちの生活実態から、人との関わりが薄れている現状が見えてきた。子どもたちの実態とミスマッチを起こしている PTA 組織の改革に着手、平成 10～11 年の 2 年間をかけ

て松山市 PTA 連合会の組織を再編し、単 P 組織もそれぞれの事情に合わせた組織変更を行った。

平成 13 年には学校が取り組むことになった「心の教育」について市 P 連独自で特別委員会を設け、1 年間勉強を重ねた結果、「学社融合」の考え方にたどり着いた。そこで、平成 14～15 年の 2 年間、市 P 連の特別委員会として「融合ネット委員会」を立ち上げ、学社融合について先進地を見学し、松山市独自のあり方を探った。

PTA としての活動の限界を超えるべく、平成 16～17 年にかけて任意団体「まなびのコミュニティ研究塾」を編成。元学校長を塾長とし、教員、公民館、行政関係者たちが個人で参加。学びを基軸に子育て共同体の厚みをましていく方法を研究した。

平成 18 年 2 月に社会教育関係者が集い、子どもたちのために何ができるのか皆で話し合い、今の子どもたちが、挑戦することに非常に臆病であるという結論を得た。挑戦する機会と場と人を作ろうということで、任意団体から NPO へ、「子どもチャレンジ支援機構」を構想、8 月に 108 名の参加を得て設立総会を実施した。

イ. 久米地区学社連携協力促進協議会

会長：安永耕三 久米公民館長（インタビューを受けた人：事務局 仙波英徳）

久米公民館は、古代遺跡の地であり松山市内の人口 3 万人弱を抱える久米地区の公民館である。久米の地域活動のコアメンバーは、久米公民館の運営審議会約 20 名と町内会も合わせ約 50 名。町内会長が公民館の分館長を兼務しており、地域と直結した公民館活動が行われている。

久米地区学社連携協力促進協議会は、学校と公民館がこれまで以上に連携し、地域の教育コミュニティを形成して子どもたちの健やかな育ちを地域社会全体で推進するために、久米公民館の下に平成 19 年 4 月に設立された。地域の 1 中学校、4 小学校、町内会長はじめ、地域の青少年育成に関わりのある諸団体の協議会で構成員は約 200 名。公民館長が会長となり、公民館に事務局を置き、各町内会長とボランティア約 20 名がコーディネーターとなって、学社連携活動を促進するものであり、コーディネーター全体会を月例で開催、毎月第 2 月曜日には各学校訪問による情報交換会を実施している。

久米公民館には本協議会に先行する組織として、昭和 61 年 3 月に設立した久米地区青少年健全育成連絡会がある。公民館長が会長を務め、公民館が主体となって、子どもに関わる諸団体を束ね、諸活動相互の連絡をとりながら、「地域の子どもは地域で育てる」をスローガンに地域ぐるみの青少年健全育成の推進に取り組んできた。会員は公民館・町内会長・警察関係者・子ども会関係・教育会・福祉協議会・補導員関係・小中高等学校校長・教頭・生徒指導・各 PTA・久米体協等、久米地区の子どもに関係する団体および関係者とその他趣旨に賛同する者たち 200 名余りである。久米地区の小中学校 5 校が輪番で事務局を務め、学期に 1 回、定期会を開き、定期会の前に各団体の長による小委員会を開催する。同連絡会がリードして実践してきた近年の特色ある事業として

- 1 久米里山事業（廃園を地域のコミュニティの場として再生していく）
- 2 里山キャンプ事業(小学 4 年生の自然・集団体験を学校と協働)
- 3 地域安全マップ事業(NPO と協働してインターネットを使った安全マップと地域情報の開示)

4 子どもの居場所事業(愛媛大学と協働した学びと心と体づくり)

等がある。

1の久米里山事業は、平成16年度より地域の多様な人々のボランティア参加を得て行われてきた。これまでに地域の廃園を利用し、市民農園の開発、井戸掘りや池づくり、炭焼き窯製作、植樹、果樹園や椎茸植栽事業、竪穴式住居の建築、久米・窪田小学校と連携した6年生の埴輪づくり、5年生の赤米づくり、また、2の里山キャンプなどの活動を活発に行っており、大人も子どもも自由に集い、遊び、交流し、自然との共生を学ぶ場づくりが進められている。

また、平成17年から毎年、小学校児童や保護者、住民らが協働で3の地域安全マップづくりを実施し、地域の人々が世代を超えて一緒に取り組む活動として定着しつつある。

久米地区学社連携協力促進協議会は、この連絡会を基礎に、学社連携による地域活動を一層推進するために地域総ぐるみの体制を整えて発足した会であり、連絡会の活動のなかの学校との協力を特化する組織として位置づけられる。

平成20年度からは、この協議会が母体となって国の「学校支援地域本部事業」を受け、久米学校支援地域本部事業をスタートさせた。事業提案は学校支援地域本部で決定したものを連絡会に提案し、連絡会に動員を図りながら協議会で事業を運営している。

2. 活動の概要

(1) 活動の内容

ア. NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構

①主催事業「みんなでチャレンジ」

主催事業として平成18年度に松山で「みんなでチャレンジ」事業を実施、平成19年からは八幡浜地域でも実施している。触れあい、食育、職業観、ボランティアをテーマに中学、高校生、大学生たちが参画し、事業の決定から企画運営、発表までを行う参加型事業で、大人は安全確保、場の提供、資金援助を担っている。毎回20名余の生徒が参加。

平成19年度で第3回目となった松山の活動は中学生と大学生が参加。7月の1泊2日研修で子どもたち自身がチャレンジ活動計画を企画し、その計画に基づいて8月に愛南町の海岸にテントを張り、1泊2日のキャンプを実施した。自分たちがミラクルを起こすぞ！とグループ名を「海楽



事業の企画



たくさんの魚を釣り上げた！



みんなで作った食事は美味しい！



鯛をさばいて鯛めしをつくる



魚カルタで遊ぶ

る！！(みらくる)」と命名、キャンプでは魚を釣って調理したり、シュノーケリングやシーカヤックをして海を楽しんだほか、内海村資源開発センターで真珠養殖講座を受け、地場産業である真珠養殖の苦労や地球温暖化の問題を学んだり、工房を訪ね、オリジナル真珠細工を体験した。大人スタッフのサポートの下で子どもたちは自主的にのびのびと活動を楽しんだ。9月には久米公民館で愛南町の郷土料理に挑戦。宇和の鯛めしやじゃこ天

を料理して楽しんだ後、キャンプで魚を釣っても魚の名前がわからなかったことから、遊んで学べる魚のカルタを制作した。10月には松山市青少年センターで活動報告会を実施し、参加した保護者や教員たちと一緒に魚カルタ遊びも楽しんだ。この事業では大人は青少年の活動の環境整備と安全確保のサポート役に徹し、子どもたちがすべての活動に自主的に取り組んでいる。制約のある学校ではできないゼロからの挑戦は、与えられたものの中で育つ現代の子どもたちにとって初めての貴重な経験であり、子どもたちはチャレンジの大切さを知り、大きな自信と達成感を得ている。また、活動を通じて人と人との関わる力の大切さにも気づいていっている。

また、同 NPO のノウハウを提供する以下の支援事業を実施している。ニーズがあるところに NPO スタッフを派遣して、企画運営のアドバイス等を行う。

②松山市の中学生のジュニアリーダー研修会（ライオンズクラブ、愛媛大学、NPO 共催）

NPO はスタッフを派遣して、その企画運営に関わった。島の学校で1泊2日の宿泊研修を実施、初年度は中学生の生徒会役員たち 51 人が参加。部活の先生、大学生、NPO メンバー等がボランティアで参加。平成 20 年度は 80 名近くの参加を得た。地域の協力も得て、学校単独の事業ではできない充実した事業を実施している。(H19～)

③全国都市再生モデル事業の市場調査

内閣府の都市再生本部の全国都市再生モデル事業に応募し、久米地区で実証実験として富士通が開発した電子ペーパーという情報ツールを使った市場調査を実施した。(H19)

④安全マップづくり

久米小学校で東京の NPO と組んで地域の安全マップづくりを企画運営し、新入学生に安全マップをプレゼントした。(H19)

⑤御五神島の無人島チャレンジキャンプ

県がこれまで継続的に実施してきた事業を引き取り、御五神島の無人島チャレンジキャンプを支援した。NPO から数名参加。小学校と中学生の子どもは 41 名参加した。これまでのように国の予算が付かないため、補助金申請や企業や個人からの寄附などの資金獲得活動を行って事業を実施。広報で事業報告を行った。(H19～)

⑥他地域での安全マップづくりの指導

久米地区の実践をモデルに、別の地域でも子どもたちと地域をまわり、未来地図*の作成指導にあたった。(H19)

*未来地図：小学生の参加が多かったので、こうなってほしい未来のまちを絵にして発表した。こどもたちによるまちのランドデザインは好評であった。

⑦第一回地域教育実践交流会の開催

子どもに関わる地域活動の実践者の交流会を 1 泊 2 日で実施。県内外から諸団体、グループ、行政担当者、教育者等約 230 名が参加し、活動報告、情報交換と交流を行い、ネットワーク構築への足掛かりをつけた。(H20～)

イ. 久米地区学社連携協力促進協議会

久米地区学社連携協力促進協議会は、地域社会の人間関係の再構築、地域社会の文化・歴史の理解と愛着形成、学校・家庭・地域の学びの連携の推進の 3 つの目的をめざして活動している。平成 20 年度からは久米学校支援地域本部事業をスタートさせた。これまで連絡会が主導してきた久米里山づくりの事業などを継続実施するとともに、以下の事業も開始した。

①久米ボランティアカード「ゆいま～る」

「おねがい『ゆいま～る』」と「できます『ゆいま～る』」の 2 種類のカードを作成し、学校が地域住民にしてほしいこと、また、地域住民が学校や子どもたちのためにできることをカード化し、ボランティアニーズのマッチングを図るシステムを導入した。「ゆいま～る」の「ゆい」は「結」からとり、結をまわすので「ゆいま～る」と命名。沖縄語で助け合うという意味があるという。各学校、町内会が公民館にカードを提出し、情報の収集・発信の一元化を図り、学校と地域住民の相互のニーズを調整して子ども、学校支援の活動を行うことができるようになった。

②久米中学校職場体験学習受け入れのコーディネート

「ゆいま～る」による久米中学校からの依頼を受け、中学 2 年生の職場体験学習の受け入れ事業所募集のコーディネートを実施。以前は学校が行っていた職場体験の段取りを地域が引き受け、町内会が窓口となって地元の事業への依頼、日程調整を行った。学校と公民館が結びついて地域に子どもたちを送り出している。

③地域安全マップづくり

学校支援地域本部事業は子どもの安全確保を基本テーマに置き、通学路を重点に防犯・防災体制の整備を進める。平成 17 年からの地域安全マップづくりを継続、発展させ、子ども、保護者、地域住民と一緒に町を歩き、マップづくりを行っている。毎年 200 人を超す参加者があり、マッ

プを更新している。小学校の新入生向けマップも配布して好評を得たので平成 21 年には配布校を 3 校に増やす。報告を兼ねて地区交通を考える座談会を実施、課題の確認から、公園の剪定・防犯灯の設置などの具体的改善につなげている。

④久米地区見まもり隊

各小学校区で行われている見守り隊活動に新たな組織・団体・企業も勧誘し、公民館に一元化し、防災組織との連携も探り、学校支援地域本部事業として組織的、継続的な支援体制を整える準備を進めている。



ガリバーマップに乗って点検箇所した箇所を書き込む



安全マップづくり



各校の作品を作品集に



体育館でまちあるきワークショップ説明



里山づくり
久米小学校 6 年生の卒業作品の埴輪が並ぶ



久米の里山づくり



大人の遊び心がつくった炭焼き窯
裏山の竹を竹炭に焼く

(2) 活動と学習・経験との関連

NPO の事務局および久米公民館の運営審議委員長であり同地区青少年健全育成連絡会の運営を務める仙波氏は地域でタクシー会社を経営している。大学卒業後、30 歳前までサラリーマンで、地を元に U ターンして家業を継ぐことになり、自分よりも年上の従業員に対する言い方や接し方で苦労したことが、社会教育団体での活動で役に立っているという。会社経営を通じて、それぞれの人の個性や得意領域をよく理解して、相手を頼りにしていることをいかにうまく伝え、その気にさせるかという対人関係能力を学んだ。平成 4 年から北久米小学校 PTA 会長を、平成 7 年からは松山市 PTA 連合会役員を務めたのがきっかけで、社会教育活動に本格的に関わるようになる。平成 18 年には社会教育主事の資格を取得。情報の得方、アンケートのとり方、学習プログラムの企画や参加型学習方法など、習得したノウハウを NPO の企画運営に係る支援活動に活かしている。

仙波氏は NPO や公民館活動の運営の事務処理を専ら担当する中心的人物であるが、少しずつ他の人と分担していく体制を図ってきている。公民館では、従来の公民館活動は公民館主事が担当し、行政の関わらない新規事業は、仙波氏が中心に企画し、公民館運営審議会に諮り、運営にあっている。

なお、仙波氏を含め NPO のメンバーのうち PTA 役員経験者の 6 名が講習を受けて社会教育主事資格を取得したが、民間からの受講者は全国でも珍しい。PTA 改革の活動を通じてそうした活動の意義を社会教育の視点で検証するのを感じたことがきっかけであり、主事講習を受け、活動を俯瞰的に見るができるようになったのは大きな成果であるという。そのメンバーがそれぞれの得意パートを活かしながら今も活動の中心を担っている。

（３）団体内で行っている学習会等

NPO えひめ子どもチャレンジ支援機構の構成員には教員や行政経験者が多く、実行委員会等の会合は、実質的に課題把握や事業の企画立案などにおいて互いの経験や知識を活かしあう貴重な相互学習の場になっている。大学教員を交えての協議の場が公式、非公式に適宜持たれており、また、アンケートのノウハウ等の専門的知識や情報の提供を専門機関である国立教育政策研究所社会教育実践研究センターから得ており、そうした専門的助言指導が活動の方向性や方法論の開発に役立てられている。活動を通じて学習が動機付けられ、メンバーの数人が社会教育主事講習を受講したことにより、その後の活動の質が大きく高まったといえる。平成 20 年に実施された地域教育実践交流会は、組織を超えた地域の活動諸団体の有益な相互の情報交換と研修の機会となり、活動の相互評価とネットワーキングのきっかけを作ったことを評価できる。今後も継続的にこの研修事業を実施していくことが決まっている。

久米地区の活動においては、関係諸機関、団体の相互の協議および情報交換の場は定期的に持たれているが、学習会という位置づけではない。さまざまな新しい活動に先立ち、必ず事前アンケートを実施しており、地域住民の意識を喚起するとともに、現状やニーズを把握する作業は関係者にとって活動に向けての重要な学習のステップになっている。公民館長はじめ、公民館活動のリーダーたちの立ち位置は、PDCA ではなく、まず実践してみてそれをしっかり評価し、改善して次の活動を練るという DCAP のサイクルを追求するものであり、いわば活動実践の場が学習の場となっていると認識している。

3. 活動にあたっての内外の連携

（１）団体メンバー間の関係

面白いから参加するというのが活動の基本にならない。あてがいぶちの役割では満足度も低く、活動の発展につながらないので、一人ひとりの持ち味が活かせるような場を見つけていくことが大事。活動をしているといろいろな思いがでてくるので、思いの違う部分を別の活動に結び付けるよう、思いついた人を新しい活動の責任者にするなどの工夫をしている。各人の思いや個性に頼って持ち場を提供することで面白く生きた活動になる。

（２）他機関・団体との連携

気のあった仲間だけの活動は楽にできるが広がりや発展性が得られないので、異なる団体との連携が不可欠である。組織にもそれぞれの個性、特性があるので、老人クラブにラジオ体操の係を担当してもらうなど、事業では各団体の特性が活かせる場を作ってわりふるように心がけている。

（３）行政等との連携・支援

とくに意識していないが、活動に関係する助成金や補助金の申請はできるだけ行っている。

4. 活動の視点について

(1) 活動の社会的役割、地域への還元についての捉え方

PTA の経験を通じて学校の閉鎖性の問題を痛感するようになった。学校を開くことで子どもの育ちがよくなると考え、地域公民館の活動にも関わるようになってみると、公民館も活動が固定的で地域に開かれているとは必ずしも言えないと分かった。公民館には行事はたくさんあるものの活動にミッションがないことを知り、公民館の活動にミッションを持ち込むことで地域の人々が乗ってくることがわかった。学校と公民館という地域の二つの公的な使命を持った教育機関を、それぞれバラバラではなく子どもの健全な育ちのためにもっと有効に結んでいくために、双方のミッションと特性を活かした連携の推進を、実践を通じて追求している。学校と公民館の両方を開くことで子どもの育ちにつながる新しい信頼と協働の関係性が地域に形成されつつある。

(2) 活動を通して得る学び

仙波氏等は活動する中で自分たちの活動の意味やあり方についてさらに学ぶ必要を感じるようになっていった。その思いが平成 16 年に活動仲間 6 人で社会教育主事講習を受講することにつながった。社会教育を専門的に学び、地域活動を全体的なグランドデザインの中で位置づけることができるようになった成果は大きいと認識している。また、活動の意味や方法論、事業評価などの専門的知識や技術を身につけることによって、その後の活動の質的向上が得られた。

地域活動においても NPO 活動においても、活動を評価し、報告会等を通じてその成果を社会に発信していくことが必要と考えており、外部への報告や発信を次の活動への課題の発見や企画、実践につなげている。

活動を通じて、問題意識を共有し、協働できる仲間も増えた。地域には多彩な人材がおり、仕掛ければ必ず動いてくれる人がいることがわかったので、活動について現場の目線からの目標、方向性、またそれぞれの持ち場をしっかりと提示することで仲間を増やし、地域内の連携ネットワークが形成されつつある。

また、地域や団体を越えたネットワークも広がりつつあり、平成 20 年に実施した地域教育実践交流会でさらに広域かつ他分野の人たちとのつながりのきっかけができ、その後、異なる地域や活動分野のグループ間での連携的な取り組みも始まってきている。多様な人々のいろいろな知恵や力を借りて活動を発展的に展開することができるようになり、次の新しい活動につながっている。

(3) 社会的性役割についての捉え方

活動を行っていく上で男女の別はとくに意識されていない。各々に得意分野で活躍してもらうのが基本であり、結果として、例えば里山キャンプで、食事づくりの指導を婦人会に担当してもらうとか、子どもの夜中から朝までの安全確保はおやじの会の仕事というようなことはあるが、性別にこだわらず、やってくれる人がパートナーというスタンスで、それぞれの人やグループの特技を取り入れてうまく組み合わせて活動してもらうことに努めている。防災マップづくりを中心とした地域の安全、防災に係る活動は、男女に関係なくこれからの地域の新たな関係性を作っ

ていく活動である。PTA 出身者等、女性にも潜在力をもった人が大勢おり、こうした地域活動を通じてリーダー役ができる人がでてきている。地域の潜在的な層に働きかけ、きっかけと出番を提供して地域のリーダーに育っていったらいいことを期待している。

久米地区では男性が大勢活動に参加しているが、使命感よりも「面白いからやる」を基本にし、思いついたらまずみんなでやってみようという姿勢を維持することで多くの人に参加してもらうことができるとともに活動が継続できている。

5. 今までの活動の評価と課題

(1) 活動の評価

活動する上では、事前の調査とともに必ず事後の報告、評価を行っている。内部評価アンケートを実施し、自分たちの活動を見直すプロセスは必ず必要であると認識している。同時に、活動の成果や評価結果を、報告会等を通じて外部に伝えることも必要であり、地域に活動を認知してもらう貴重な機会としてとらえている。外部に伝えることで新たな賛同者の輪が広がり、次の活動の場を作る人が出てきている。

たとえば、里山キャンプを4年前に始めた時は、地域の学校はどこも消極的であったが、子どもたちの任意参加によるキャンプ等の活動が徐々に定着し、2年前からは、地域主導による体験活動が久米小学校と久米中学校のカリキュラムに正規に組み込まれた。平成21年度からは、他の4小学校もカリキュラムに組み込んで、5小中学校合同で里山キャンプを実施する予定である。地域活動の教育的意義と成果が徐々に認知され、学校の参加、協力が進んできているといえる。

(2) 代表者個人や団体メンバーに関わる課題

多くの人に持ち場や出番を提供し、主体的に参加してもらう努力を続けており、うまく機能してきているが、それでも会員間に意識や参画意欲の違いがあり、とくにNPOでは活動者が固定化する傾向が出てきたことが課題として挙げられる。

(3) 団体としての対外的なことに関わる課題

常に苦勞しているのは資金確保であり、いかに上手に各種の補助金や助成金を獲得するかが課題である一方で、限られた予算のなかでいかに多くの人の協力を得て活発な活動を行うかも重要な課題である。

子どもの参加者の確保も難しくなっている。今の子どもたちは塾、習い事、部活などで多忙であり、いろいろなNPOや地域の活動が子どもを取り合う状況が生じてきており、子どもの参加がなかなか難しい状況がある。

また、現在、学社連携への取り組みは学校によって濃淡があるが、学校を開く上でのキーパーソンは校長であり、校長の理解が得られないと活動が進まない。今後いかに学校に丁寧な働きかけ、理解協力を得る努力を続けていくかが課題である。

(4) 課題の乗り越え方・解決の工夫

学校支援地域本部事業の推進

学校支援地域本部事業がスタートし、地域活動の実践者と PTA 出身者の 2 名のコーディネーターを配置し、学校と地域の連携の新たな体制を整えつつあり、これまで以上に学社連携への取り組みを進めやすい状況になってきたことを活かし、引き続き学校の理解を求める努力を続ける。学校との連携は校長次第であり、また、教員の大半は地域を知らない。機会をとらえて学校に地域力の教育的意義を理解してもらう努力を続けるとともに、教員自身の地域参加を進める方策を探る。

一方で、おやじの会や高齢者クラブ等、地域の団体から学校支援の要望等も出てきており、学校と地域をつなぐコーディネーション力を強化し、新たな人材や団体を発掘し、地域の潜在力を有効に活動に結び付けていく。

DCAP の循環による活動の展開

資金獲得の取り組みを積極的に続けると同時に、予算なしでも活動を継続できる環境醸成に努める。それには、やりたいことを思いついたらやってみようという思いを大切にし、活動から入る方法が有効であることをこれまでの経験から学んできた。久米公民館の活動においては、まず企画会議から始まる一般の PDCA のサイクルではなく、まず D から入る DCAP のプロセスで皆が参加しやすい状況を作ってきた点が成功のカギであるといえる。まず実践し、その成果を検証(評価)し、反省のもとに修正をかけて次の企画につなげるという DCAP の好循環が生まれており、このサイクルをシステムとして仕掛けていくことにより、予算がなくてもボランティアで地域住民を巻き込んだ活動の継続と展開が行いやすくなる。

6. 今後に向けた展望・課題

(1) 今後実施予定の取り組み

NPO は、これまでの事業を継続する。地域教育実践交流会も第 2 回の実施に向けて実行委員会をスタートさせている。来年の課題として、県のヤングボランティアセンターと NPO とのリンクの仕方を模索中。3 年間の予算と期限限定で立ち上げにかなり関わったが、組織がサークル化してきており、センター機能強化の新しい提案のために、しばらくテコ入れしていく。

公民館を中心とした地域活動では、学校支援地域本部事業に本格的に取り組む。1 年目は地域の安全確保を主要テーマに定め、見まもり隊の組織化を進める。また、安全マップづくりに始まった地域防災・防犯体制づくりを進め、地域安全情報の収集と発信に地域全体で取り組む。2 年目は環境美化、3 年目は学校の授業支援を主テーマとして活動を展開すべく企画中である。また、次年度は地域の全小学校との合同でキャンプを実施するほか、里山づくりでは現在のエリアが手狭になってきたので奥の裏山を皆で開墾することを予定している。

（２）今後の活動の方向性

学社連携活動の促進

これまで以上に学校と公民館の関係を密にしていくことが重要課題であるにとらえている。学校と地域が共通に取り組む課題を設定して協働を図る。また、連携の実体化をさらに推進するために相互の協議を積極的に行い、学校がしてほしいことと地域ができることとのニーズのマッチングと調整機能を高めていく、地域の人材や教育資源の発掘、開発に努める。

広域性を持った連携ネットワークの構築

これまで安全マップづくりや子どもの居場所づくり事業で実践してきたように、地域内の人材やノウハウのみに頼るのではなく、大学や広域性を持った NPO 活動などとの協働を図り、外からの教育的、人的資源を地域密着の公民館活動に落とし込んでいくという連携のあり方を求め、活動の質の充実と発展を図る。

現在、大半の地域や NPO、ボランティア団体において、各組織はそれぞれの伝統と文化の中で活動をしている状況にあるが、各団体のネットワークづくりを図り、新しい情報発信のツールを探り、全部の活動情報が集まるシステムづくりを民間で実施してみたい。

（３）今後に向けた課題

①活動資金の獲得

まずは活動資金の獲得が引き続きの課題である。いろいろな助成金等に応募して資金を得ているが、継続的な補助金がなく、また額も減ってきており、安定的な収入がないのが苦しい。事業の中に資金獲得活動も組み込んでいく必要がある。

幸い久米地区は、公民館の役員も半数近くが農業をしているので、ビジョンさえしっかり出せば、資金はなくても何かとボランティアで道具や知恵、力を提供してくれる協力者は得られる。

②学校の教育課程への導入

学校が地域と一緒に継続的な活動をするためには学校のカリキュラムに入れることが大事である。すでに一部の学校で実現しつつあるが、カリキュラムに入れると、先生は地域に目を向けだし、次第に地域に対する拒否反応が少なくなっているようだ。これを実現するためには校長の理解、協力が不可欠であり、今後は、さらに、学校の教育目標および年間計画を作成する段階から地域も一緒に関わられるようになることを願って学校と交渉中である。子どもたちを地域社会全体で育成するという視点から、地域も学校教育の教育課程の中で参加できるようになれば、活動も変わってくるはずだ。

③コーディネーターの養成

活動を支えるキーパーソンがいることに加え、人や団体を結びつけるキーパーソンも必要であり、とくに学校に本気になってもらうために地域と学校をつなぐ役割が非常に重要である。人が一番動いてくれるキーワードは「子どものため」で、また、活動は面白くないと動いてもらえない。子どもをだしにして、学校および地域の大人の活動参加を促進するために、連携とネットワークを担うコーディネーターとしての能力を持った人材の育成を図る必要がある。今、一番地域で少ないのはそうしたコーディネーターの感覚を持っている人で、コーディネーターやコーチ

ング能力を持った人材を育てる研修会が必要である。例えば PTA の役員にはそうした役割を担う潜在力を持っている人が多いので、そうした人々に地域で活躍する場を積極的に提供し、関わらう中で育ってもらうことが大事である。また、外部の専門的なリーダーシップ養成の研修も有効であろう。

④幼児や高校生世代との関係づくり

地域と関わりの薄い幼児および高校生世代への有効なアプローチを探る必要がある。久米地区青少年健全育成連絡会には、幼稚園、保育園が入っており、保育園も里山の菜園でいも作りなどを行っているが、基本的に地域の活動からは幼児と高校生の層が抜け落ちている。例えば高校生や中学生に職場体験活動の中で地域の保育園や幼稚園で幼児と触れ合う機会を提供する新しいプログラムを一層推進するなどの取り組みを強化していくことが重要である。

久米地域では、キャンプを経験した中学生ボランティアがキャンプで小学生を指導する等、中学生と小学生のリンクがうまくできたが、地域という感覚がない高校生に対しても、地域が地元で高校生の出番を作るべきであり、NPO 活動を中心にその仕掛けづくりに取り組んでいくことを課題と認識している。

ヒアリングを終えて

久米地区における公民館を中心とした地域活動の特徴は、何と言っても地域住民が自主的に自由に自弁で面白がって活動しながら、諸活動が地域の子どもという共通の文脈で大きくつながってきていることにある。一部の人たちによる単一の活動ではなく、男女や年齢の別なくさまざまな団体、グループの得意分野を活かした多様かつ多面的な取り組みが連携的、連関的に行われ、また、必ず活動後に成果の評価を行い、次の活動につなげるという実践と学びの循環が地域活動に体系性を与えている。ネットワーク構築型かつ開放型で地域のしくみづくりに働きかける新しい社会教育のモデルとなる事例といえる。

公民館活動も NPO 活動も、仙波氏を中心とした仕掛け人たちの働きなくしては語れない。PTA 役員時代に実施した子どもたちの生活アンケート調査で子どもの育ちに強い問題意識をもったことがきっかけとなり、以来、仙波氏らは今日まで 10 年以上にわたるさまざまな地域活動の中心的役割を果たしてきた。実践者たちの個人としての資質や社会経験に加え、実践と合わせた社会教育主事講習等の学びが活動に意味づけや方法論を与え、これまで地域の活動に欠けがちであった評価の視点や客観性、体系性を導入し、一過性に終わらない質の高い活動の発展的展開が可能になってきたようだ。活動を重ねることで地域住民や学校の理解や協力が進み、学校の教育課程に地域での体験活動を組み込むまでの連携に至ったことは大変大きな成果であるといえよう。

今回の調査を通して、社会的活動における新たなリーダー像が浮かび上がってきた。課題発見能力、情報処理および発信能力、企画能力、また、皆をやる気にして出番を提供できる対人関係能力を持ったキーパーソンの重要性である。連携、ネットワーク型コミュニティ活動に必要なコーディネーターおよびファシリテーター能力を持った人材をいかに発掘し養成していくかがこれからの地域づくりの鍵であり課題でもある。久米地区や NPO 子どもチャレンジ支援機構の事例から、子どものときから大人、高齢者に至る各ライフステージに沿った息の長い人材育

成機能に果たすべき地域の役割の大きさを改めて認識するとともに、多様な人々の関わりと知恵に学びあう社会教育の意義を改めて再認識することができた。

(塩崎 千枝子)

Ⅱ 男性の次世代育成支援活動への参画とその促進 取り組み事例

(2) 講座等を実施する取り組み

<講座等を実施する取り組み>

男性へのアプローチ、手を変え品を変え —男性対象の講座を始めて 15 年—

仙台市男女共同参画センター「エル・ソーラ仙台」
(指定管理者：財団法人せんだい男女共同参画財団)

【取り組みの概要】

仙台市男女共同参画推進センター「エル・ソーラ仙台」では、「男女共同参画せんだいプラン」の重点課題に対応して男性向けの講座の充実に取り組んでいる。男性対象の講座はこれまで講演会やリンゴの皮むきコンテスト、男の家事大賞などのイベント、男性の料理教室という実習、講座や少人数の父子ワークショップなどさまざまな形で展開されており 15 年の歴史を持っている。現在はプレパパ(妊娠中の妻をもつ男性)、就学前の子どもをもつ父親など若い層の男性を対象とした講座(「パパのためのコミュニケーション講座」「プレパパ&0-3 パパのためのタイムマネジメント講座」)に力を入れている。講座終了後の評価とニーズ把握をもとに、より効果の得られる企画を考え続けている。

1. 施設・機関の概要

(1) 体制・事業方針等

エル・ソーラ仙台の運営体制

(財)せんだい男女共同参画財団は、国内外のネットワークの構築や、仙台の現状を調査研究し地域の実情に即した政策提言を行いうる「専門性」と、男女平等推進に向けた市民の自主的な活動に対する多様な支援など、地域に根ざした事業展開を行える「地域性」を兼ね備えた新たな事業主体として平成 13 年 4 月 1 日に設立された。仙台市における女性の自立及び社会参画を促進する事業ならびに男女平等を阻害するさまざまな問題の解決をめざした市民の主体的な活動の援助育成を行うとともに、男女平等の社会的風土づくりを進め、もって「男女平等のまち・仙台」の早期実現に寄与することを目的として事業を展開している。

平成 13 年 4 月 仙台市よりエル・パーク仙台の管理運営を受託

平成 15 年 4 月 仙台市より仙台市男女共同参画推進センターの管理運営を受託

平成 15 年 5 月 エル・ソーラ仙台開館

(エル・パーク仙台およびエル・ソーラ仙台の 2 館体制開始)

平成 15 年 4 月 指定管理者としてエル・パーク仙台およびエル・ソーラ仙台を管理運営

財団の組織は理事長を筆頭に事務局の中に総務企画課、エル・パーク仙台、エル・ソーラ仙台の 3 部門から成り立つ。このうち今回のヒアリングの対象であるエル・ソーラ仙台は 21 名、管理事業係と相談支援係の 2 つの係に分かれており、事業を担当しているのはプロパー職員 4 名(うち 1 名は育休中)、臨時職員が 1 名、課長 1 名、係長 1 名の組織である。

「男女共同参画せんだいプラン 2004」に位置づけられた男性向け講座

「男女共同参画せんだいプラン 2004」では重点課題Ⅲとして、子育て・介護・地域活動等と仕事との両立支援に男性の家事・育児・介護等への参加の促進、父親の育児・介護休業取得の促進、男性も参加しやすい地域活動の推進が挙げられている。男女共同参画センターや児童館、市民センターなどで、男性向けの講座を充実させるほか、男性も育児・介護休業制度を利用しやすくなるような社会環境をめざし、企業への働きかけを行うと記載されている。男性の家事時間の増加に関する目標値として現状値(男性の1日平均家事時間約30分『平成13年社会生活基本調査』)より平成20年度末に30分増加を目標値として挙げられている。

エル・ソーラ仙台では男女共同参画社会形成のために数多くの調査研究事業、広報啓発事業、情報事業、学習・研修事業、交流事業、育成・支援事業などを行っているが、ここでは男性を対象とした事業についてみてみよう。

エル・ソーラ仙台では男性を対象とした事業は実施事業の中の学習・研修事業の啓発講座として位置づけられている。平成20年度は「パパのためのコミュニケーション講座」「プレパパ&0-3パパのためのタイムマネジメント講座」を実施している。

2. 講座等のプログラムについて

(1) 事業を実施するに至る背景

長い歴史を持つ男性対象講座

エル・ソーラ仙台の男性を対象とした講座は長い歴史を持っている。平成5年のまだエル・ソーラ仙台ができる前のエル・パーク仙台1館体制の時から、男性を対象とした講座を実施してきた。当時は、メンズリブの活動が盛んになり始めた頃で、男性学の先生を講師に開催したり、男性の料理講座を実施したりした。

体系だったものというよりは、男性向けにいろいろ手を変え品を変えやってきた。しかし、「男性一般」を対象に企画していたので、なかなかうまくはいかなかった。平成13年に(財)せんだい男女共同参画財団が設立され、エル・パーク仙台の管理運営を受託した際に男性向け講座の持ち方を再検討した。これまでの男性学的な講座は対象の年代もバラバラで焦点が定まりきれなかった。平成15年度から父と子に対象を限定したワークショップを始めた。男性は家事や育児の時間がほとんどとれないので、それをどうするかが課題ではあるが、その前に自分の子どもとさえわかっていない、まずはそこにアプローチしたいと考えた。

子どもと直接向き合って、その向き合うことの大切さとか、一般名詞の子どもではなくて、自分の子どもというものにちゃんと向き合う講座を何か仕掛けたほうがいいのではないかということになり、「小学生の子どもをもつパパ」に限定した講座を平成15年度から4年間実施した。

最初の年には2コマで実施。子どもと直接向き合える強烈な体験をしてほしいと考え、1コマは父親が子どもに髪を切ってもらおうという内容(美容師の立ち会いのもと)を実施した。この講座では父親と子どもとの関係を作るために、父親が子どもに身を任せてみるということが意図されている。もう1コマでは2人で何かを作るという体験をしてもらうことを目的として父親と子ども

で等身大の絵を描くというワークショップを実施した。大きな模造紙に、父親と子どもが好きなポーズをとってその輪郭を描く。そしてその輪郭に父親と子どもの共同作業で色を付けたりして作品を作るという方法を取り入れた。

その後は、父親が子どもにその場で取材して、子どものことをニュースにして壁新聞を作るというワークショップや、父親と子どもが紙芝居を作るというワークショップを実施してきた。このようなワークショップでは人数にも限界があり、参加者はだいたい 10 組くらいで推移してきた。父親と子どもの協同体験は参加者の評価も高く、「初めて子どもと向き合った」という感想はよく聞かれた。こうした講座は父親と子どもの関係を作る上で取っかかりとしてインパクトはあるものの、その時の父子の関係を一過性のイベントとしてではなく、どのようにして継続させていくかが残された課題となった。そこで子どもが未就学のころからコミュニケーションを積極的にすることを重要と考え、「パパのためのコミュニケーション講座」を始めたのである。

平成 18 年度までは定年後の男性を対象とした事業も実施されてきたが、現在は「小さい子どもをもつパパ」―若い男性をターゲットとした講座の充実に力を入れている。

(2) プログラムの趣旨・内容・方法

パパのためのコミュニケーション講座

平成 19 年度からは「どのようにして父親と子どもの関係を継続させていくか」という課題に対応した「パパのためのコミュニケーション講座」が始められた。一回きりのものではなく連続講座にし、コーチングのスキルを学ぶ形にしたのは、学習好きの男性が興味を持つ場合もあると考えたからである。

基本は、まずは人の話をきちんと聞くことができるようになること、子どもや妻の話を聞けるようになるというための訓練。2 人 1 組になって、人の話を聞く姿勢や、うなずいて聞くなどのテクニックやスキルを徹底して学ぶ。次に自分で目標設定(理想のパパ像の設定)をして、それに向けて計画を立てる。1 週間ごとの講座だったので、次の回までの課題をたてる。例えば子どもとの時間を増やすという目標を立てたら、次の週にどうだったか報告する

パパのためのコミュニケーション講座

～ちょっとしたコツでHappyになれるよ!～

今、あなたのパパ度は何点ですか?
家族に帰宅を待たれる。愛されパパですか?
パパのコミュニケーション力がHappyの鍵。
あなたがなりたいパパ像に近づくお手伝いをします。

プログラム (全4回 すべて水曜 午後7時～9時)		
1 回	6月4日 (水)	今のあなたのパパ度チェック 『現状分析』の手法と『傾聴』スキルの実習
2 回	6月18日 (水)	あなたはどんなパパになりたい? 反復練習による『目標設定』
3 回	7月2日 (水)	「今のあなた」と「目標とするパパ」のちがいは何? コミュニケーションの向上のための『承認』スキルの実習
4 回	7月16日 (水)	さらに目標に近づくには! 叱る、命令、慕求、期待、懲罰など『伝達』スキルの実習

6月4日(水)午後7時 スタート(全4回)
会 場 エル・ソーラ仙台 研修室2 (アエル 228F)
対 象 未就学児をもつ父親
定 員 15名程度
参加費 4,000円 (賛助会員 3,600円)
託 児 6ヶ月以上小学校1年生まで
・しやうがいのあるお子さんについてご相談ください
・託児利用料: 子ども1名につき、300円
申込締切 5月28日(水)

申込・問合せ
仙台市男女共同参画推進センター
エル・ソーラ仙台 管理事業係
TEL022-268-8044
FAX022-268-8045
<http://www.se-nai-j.jp/>

昨年 参加したパパたちの声

「いい男と、同じ悩みを持つ仲間と繋がりました」
2児の父 (30代)

「自分が理想とするパパを考えるきっかけになった」
1児の父 (30代)

「気持ちに余裕ができました」
1児の父 (40代)

「理想と現実を知る良いきっかけになった」 1児の父 (30代)

「日曜、時間が足りない、と言っていたことがなくなった」
2児の父 (30代)

二児のパパ 講師 長瀬勝美氏
認定生涯学習指導員・認定コーチ
オフィス・ド・コイニング 代表

京都育生まれ、名教育者。04年(財)生涯学習開発財団認定コーチ取得。05年日本プロフェッショナル・キャリア・カウンセラー協会プロフェッショナル・キャリア・カウンセラー及び認定キャリア・コンサルタント取得。

現在、企業内コミュニケーション研修の講師、社員個人及び少人数のグループへのコーチングの実施など、コーチングによる人材教育を得意とする。

主催: (財) せんだい男女共同参画財団

ことによって、傾聴、目標設定、承認、伝達といったスキルを身につける内容とした。子どものしかり方にしても、子どもがやったことを頭ごなしに否定するのではなく承認する、「お父さんはこう思うよ」のようないい方をするなど、実際に使えるようなコミュニケーションのスキルを身につけることが学習内容となっている。

定年後の男性を対象としたプログラム

平成 14 年頃から定年後の男性を対象とした事業を企画した。介護研修センターと共催して家庭介護の男性に向けた講座を実施。

介護の技術的なことは介護研修センターで担っているので、エル・ソーラ仙台は、もう少しメンタルな部分を役割分担して企画した。たとえば定年後の男性で実際に介護経験のある人に話をしてもらうようなプログラムとした。

一方、仙台では、高齢者が住み慣れた町で地域の住民として安心して自立した生活ができるように、地域の住民とともに食事支援活動を通してそのお手伝いをしたいという目的で「賢和会ひろせグループ」が平成 12 年に設立されていた。平成 15 年には「あなたにもできる『男の台所』プロジェクト」がスタートし、(財)せんだい男女共同参画財団から助成を受けた事業を実施。平成 18 年には「男女共同参画社会の実現をめざす全国シンポジウム in みやぎ」のパネラーとして「男の台所」の活動を通じた“男の食の自立”を発表している。

またエル・ソーラ仙台にある男女共同参画の推進に資する公益的な活動を継続的に行う団体等の活動をサポートするための有料ブースで活動が続けている。

このように、定年後の男性を対象とする事業は、市民団体の力によって効果的に行われていることが、(財)せんだい男女共同参画財団は対象を若年男性にシフトした背景にあった。

父親対象講座

<平成 16 年度>

「お父さんとこどもの“かべ新聞”作り ～お父さんはかけだし記者?!～」

趣旨：父親が記者になって子どもを取材し、一緒にかべ新聞を作成する。子どもと向き合い受け止めることの大切さにあらためて気づくことで、父親と子どもとのコミュニケーションをより深めるきっかけとする。

対 象：小学生の子どもをもつ父親

日時・会場：

(1) 8 月 21 日(土) 13:30～16:30 エル・ソーラ仙台 大研修室 (3 組参加)

(2) 8 月 22 日(日) 10:00～13:00 エル・ソーラ仙台 大研修室 (5 組参加)

形態：ワークショップ

講師：冒険遊び場せんだい・みやぎ連絡会 須藤達也

参加費：500 円

<平成 17～18 年度>

「お父さんをつくろう～父子(ふたり)が主役の紙芝居！」

趣旨：父親の多くは就業時間が長く、子どもと向き合う時間が不十分と感じているのではない。コミュニケーションがよく深まり、父親が子どもと過ごす時間の楽しさに気づくきっかけとなるよう、父子共同で紙芝居づくりをする。

対象：小学生以上の子ども 1 名とその父親

日時・会場：日曜日 10：00～15：30 エル・ソーラ仙台 大研修室

講師：財団法人仙台市市民文化事業団職員

<平成 19～21 年度>

「パパのためのコミュニケーション講座」

趣旨：未就学児をもつ父親が自分のなりたい父親に近づけるよう支援する。また効果的なコミュニケーション技術を習得することで、子どもだけではなく妻など家族とのコミュニケーション作りを目的とする。

対象：未就学児をもつ父親

日時・場所：全 4 回 19:00～21:00 エル・ソーラ仙台 研修室

形態：ワークショップ

講師：生涯学習開発財団認定コーチ

参加費 4,000 円

託児あり 託児対象は原則として、6 か月以上小 1 まで。託児利用料 300 円(子ども 1 人 1 回につき)要申込

<平成 19 年度>

「楽しく子育て！パパ&プレパパのカンタン離乳食講座」

趣旨：主に母親が担っている離乳食作りを父親に体験してもらうことで、離乳食期の子育ての大変さ、楽しさを知ってもらい、男性の育児参加を促し、夫婦ともに子育てをするきっかけを作る。また、母親と比べて少ない同世代の子どもをもつ父親同士が話しあう機会を提供するとともに、育児に積極的に参加している父親たちをロールモデルとして迎えることで、子どもへの関わり方を考える契機とする。

対象：子育て期の父親、これから子どもが産まれる父親、祖父、子育て支援に関する地域活動をしたいと考えている男性等

日時・場所：土曜日 13:15～16:00 エル・パーク仙台 食のアトリエ

形態：調理実習・交流会

講師：仙台市保育課所属栄養士

<平成 20 年度(予定)>

「プレパパ&0-3 パパのためのタイムマネジメント講座」

内容：家事・育児を両立させるため時間の使い方を見直す

対象：これから父親になる方 3 歳までの子どもの父親

定員：10 人

参加費：3,000 円

定年後の男性向け講座

＜平成 16 年度＞

男性のための介護講座「定年後の暮らしと介護」

趣旨：多くの男性が漠然としかイメージしていない「定年後の暮らし」を具体化することを通して、定年後の生活に必ず関わる介護について考えるきっかけとしてもらう。

対象：男性

形態：講演会

講師：定年塾主宰 西田 小夜子

共催：介護研修センター

＜平成 18 年度＞

男の生き方講座「わたしの定年物語」

趣旨：定年退職後、地域や社会とのかかわりをどう築いていくかが、課題となる男性は多い。

講師は男性(特に高齢者)の食の自立支援と仲間づくりを理念に、賢和会「男の台所」を立ち上げた。その実体験を聞き、第二の人生を考えるヒントや励ましを得る。

対象：一般(特に定年前後の男性)

講師：安海 賢(賢和会「男の台所」主宰)

形態：講演会

日時・会場：11 月 25 日(土)10：00～12：00 エル・ソーラ仙台

参加費：500 円

男性の家事時間アップ・キャンペーン

仙台市における男女共同参画を推進するため、「男女共同参画せんだいプラン 2004」の男性の家事時間増加に関する目標値である 30 分増加(平成 20 年度末)の実現に向けて、実施した。

＜平成 16～18 年度＞

リンゴの皮むきコンテスト 男の家事大賞

＜平成 19 年度＞

男性の家事時間アップ・キャンペーン 新人パパ向けミニ講座

内容：子育てを開始する時期の若い父親対象の啓発をねらいとし、各区役所保健福祉センターで実施している両親教室のうち、キャンペーン実施の協力が得られた 3 区について、10 分程度のミニ出前講座を実施した。

スタッフ：財団職員および仙台市男女共同参画課職員

場所：平成 20 年 1 月 26 日(土) 青葉区役所

平成 20 年 1 月 26 日(土) 若林区文化センター

平成 20 年 2 月 16 日(土) 泉区役所

平成 20 年 3 月 8 日(土) 泉区役所

平成 20 年 3 月 8 日(土) 若林区文化センター

平成 20 年 3 月 15 日(土) 青葉区役所

(3) 企画・運営の工夫・特色

事業を分析して次の企画に

男性に対するアプローチは初期には男性学という切り口で実施していたが、参加者の年代等がバラバラでテーマを絞るのが難しかった。その後は講演会を実施したりしたが、ただ話を聞くのでは、1 回に人数は集められてもその後の成果がよく見えなかった。契機になったのは父子ワークショップ、このワークショップで対象をギュッと絞り込めた手応えを得ている。

妻へのアプローチが効果的

広報は市の広報以外に、子育て関連の施設など、子どもを連れた母親たちが多く集まるところにちらしをおいている。仙台市には区が 5 つあり、それぞれの区でいわゆる両親学級が実施されているので、その機会を活用して、父親が来る回はもちろんのこと、父親が来ない回でも母親にちらしを配ってもらうことを各区にお願いしている。父親に直接、講座の情報を届けることが望ましいが、各家庭に配布している市政だよりという市の広報誌に情報を載せても、忙しい父親の中には読んでいない人もいる。60 歳以上の男性は市政だよりをみて定年関係の講座に来ることは多いが、子どもをもつ父親にアプローチする場合には、市政だよりよりも妻からの勧めが効果的のようである。これまでも妻から勧められたので参加したという声も聞いている。妻が申し込むという例もある。

託児の連絡はお父さんが

平日の夜に開催する父親向けの講座にも託児をつけている。託児についても父親に連絡をして相談することになっている。これは父親が子どものことをわかるようにしようという企画者の意図である。申込みは妻からの電話でもよいが、その後の託児に関しての連絡、子どものことについてのやりとりは母親ではなく父親本人と話をする。多忙な父親と話すので、時間や手間がかかるが、父親が子どものことを話そうとすることによって子どもへの理解が深まっている。

女性からのニーズの把握

エル・ソーラ仙台では、育休中女性のメーリングリストや育休復帰の女性のためのワークショップも実施しているが、その参加者からの要望も聞くようにしている。これから予定しているタイムマネジメント講座も男性からのニーズと企画側の考えだけでなく、育休復帰支援のワークショップの際に出された、「夫向けにも何かやってくれないか」という声を反映させたものである。

エル・ソーラ仙台で実施している調査研究を活かす

(財)せんだい男女共同参画財団では、男女共同参画に関わる調査を事業の重要な柱の 1 つとして位置づけ、平成 16 年度から「仕事と家庭およびその他の活動との両立(ワーク・ライフ・バラ

ンス)に関わる調査研究」を実施している。平成 17 年度には企業とそこで働く女性を対象に、平成 18 年度には配偶者と子ども(高校生以下)をもつ男性を対象に質問紙調査を実施し報告書をまとめている。男性の働き方の実態と時間の使い方を質問したが、家事とか育児をやる気持ちはあっても、働く時間が長時間化しているのではなかなか難しい。理想と現実はかけ離れているという課題が明らかになった。こうした調査の結果を企画を立てるときに使ったり、講座の講師にも提供している。

(4) 取り組みの評価・参加者の変化

コミュニケーションスキルを使うことによって、子どもとの対話だけではなく、連れ合いとの対話が増えていくことも期待して企画されている。子育てをテーマにしているが、子どもを育てていると家事の大変さへの気づきもあり、「もっと家事の手伝いをしたい」という目標を立てる参加者もあり、企画側のねらいもヒットしていると評価している。

「この 4 週間で、子どもとしっかり向き合うことができた」というような感想があり手応えがとてもある。また初めての参加者からは、このようないい体験をすると、今度は子どもが大きくなった時に、大きくなった子どもとの遊び方講座をやってほしいという声もある。

(5) 課題・改善が必要だと思われる事項

参加者の絞り込み・若い男性へのアプローチ

例えば「男性のジェンダーを見直してみませんか」といった、かつて実施していた漠然とした男性講座では、年齢を絞ることができなかった。20 歳代の後半から 80 歳代ぐらいのまでいたので、いろいろな話が聞けるという井戸端の意味はあったが、話が拡散しまとめることは難しかった。もう少し焦点を絞った講座を企画したいと考えた。現在は、若い男性へのアプローチとして「小さい子どもをもつパパ」を対象としたプログラムの充実を図っている。

男性のグループ化は難しい

研修終了後、女性の場合はグループになったり、その後の活動につながるようなことがあるが、男性の場合はあまりない。パパのコミュニケーション講座では、講師がメーリングリストを立ち上げてくれた。でもほとんど書き込みがないのが現状で、メーリングリストによる交流はあまり行われていないようである。仲良くなって独自に飲みに行ったり、家族ぐるみのおつきあいをしている人もいるようだがグループ化には至っていない。まずは自分のことであり、グループになって他のパパにも伝えていこうという動きはまだ先になると考えている。

(6) 今までの課題の改善に向けた取り組み・工夫

手応えのあった父と子のワークショップ

男性一般を対象に募集していたので、年代もバラバラで焦点が定まりきれなかった。そこで平成 15 年度から父と子のワークショップを始めたことによって、参加者の数は多くないが手応えのあるプログラムとなった。男性は家事や育児の時間がほとんどとれないのでそれをどうするかは課題ではあるが、その前に自分の子どものことさえわかっていない。まずはそこにアプローチし

たいと考え、一般名詞の子どもではなくて自分の子どもというものにちゃんと向き合う講座としたことで絞り込むことができた。

3. 企画・運営の視点について

(1) 男女共同参画の視点

妻とのコミュニケーション

エル・ソーラ仙台では男女共同参画の視点が意識化されている。例えば父親と子どものコミュニケーション講座であっても、その底には親子のコミュニケーションだけでなく“妻”とのコミュニケーションも意図されている。

「子どもとのコミュニケーションいうことで皆さんいらっしゃるんですけども、こちらのねらいとしては、プラス妻とのコミュニケーションですね。妻に育児が全部偏っているという状況が課題なので、学んだコミュニケーションスキルを使うことによって、連れ合いの方との対話が増えていってということも企画意図として期待してやっています。」

実際、今年度の参加者の中にも、課題を立てる時に、子どもとの関係をこうしたいという人もいるが、中には妻が子育てと家事で大変なので、もっと家事の手伝いをしたいという目標を立てる男性もいて、ねらいもヒットしていると考えられている。

またこれから企画されているタイムマネジメント講座は、男女共同参画の問題意識から企画されている。コミュニケーション講座を受けてコミュニケーションのスキルを身につければ、たまの休みのコミュニケーションは、少しよくなるかもしれない。しかし「仕事時間を削れません」という。つまり妻の家事とか育児の分担が減るわけでもないことは問題であると考えられて企画された。離乳食講座や料理講座でもいいけれども、見えてきた課題は夫と妻との関係性である。

共働きが増えてきているが、特に共働き夫婦が初めての子どもをもつ時は、ワーク・ライフ・バランスが大きく変わってきてしまうので、お互いにどういうふうに働いて、どういうふうに生活するかを話し合わなければならない時期と捉えられる。しかし妊娠・出産は、女性の負担が大きく、産休をとることによって家事の負担も大きくなる可能性がある。自分の妻が今どういう生活スタイルになっているかもわからなくなってしまうところから、自分と妻との関係性を大事にすることが必要であり、夫婦それぞれのワーク・ライフ・バランスの問題を考える講座にしたいという目的で企画されている。

(2) 地域参画の視点

今のところは男性の地域参画を主目的とした講座を実施してはいない。

例えば家庭生活を営む中で、名義は夫の名前であっても、地域の役員で実際に働いているのは妻といった問題意識から地域参画を考えるということはあるかもしれない。

男女共同参画推進をめざすことを目的とする男性グループが、なかなかできないのが課題ではあるかと思うが、グループ化が必要なのかということも考えていかなければならない。自分たちの問題から、さらに男性全体の問題になって、他のパパとつながるという方向でグループができればいいが、無理に男性だけのグループを作っても目的がしっかりしていないと続かない。

4. 今後に向けた展望・課題

(1) 今後実施予定の男性を対象とした事業

プレパパ&0-3 パパのためのタイムマネジメント講座

前述したように、父親と子どものコミュニケーション講座で身につけたスキルによって、たまの休みのコミュニケーションはよくなるかもしれないが、依然として「仕事時間を削れません」というのが現状である。つまり妻の家事とか育児の分担が減るわけでもないことは問題であると考えられて企画された。仕事がすごく忙しいような状況の人に、ただ家事、育児もあなたも責任があると言うよりは、タイムマネジメント、つまり時間の使い方をどうするかを考えるというタイトルは魅力的ではないかと考えている。

ママが 285 分の家事をやっているとすれば、パパは 33 分(『平成 18 年総務省社会生活基本調査』共働き夫婦の家事・育児などの 1 日の平均時間)、この差を踏まえバランスを取るためにはどうすればいいということを考える、ワーク・ライフ・バランスの 3 回のカリキュラムを作った。

初回は自己紹介を中心として、現状を参加者で共有、次にそれをどうしていきたいかの目標をたてる。妻へのヒアリングを次回までの課題とする。2 回目はその課題をもとに発表し、その感想を話して傾聴のスキルを身につける。こうした中で、仕事に対する思い込みについて、本当にそうなのかな?とを考えてほしい。まずやれることとやれないことの書き出しをして、それについて本当にやれないのかをみんなで話しあう中で、女性は「今日は子どものことで帰ります」と言えて、それが受け入れられる素地を女性たち自身が作っていることに気がついてほしいと思っている。

(2) 今後の事業の方向性と課題

パパのコミュニケーション講座とタイムマネジメント講座の充実

しばらくはこの 2 つの講座の流れを続けるという方向を考えている。10 名ぐらいのワークショップが一番効果的なので、1 年に 2 回実施しても参加者は 20 名にしかない。参加者のニーズを十分に把握するためにも参加人数を増やしたい。開催回数やコマ数も検討していきたいと考えている。

DVに関する講座の企画

現在大きな課題となっている DV について男性へのアプローチを考えている。暴力をふるう男性を対象とするのではなく広く考えたい。表向きはストレスマネジメント、ストレスコントロールの内容とし、男性向けにできればいいのではないかと考えている。予防的な講座を企画したい。

ヒアリングを終えて

エル・ソーラ仙台の男性対象のプログラムには長い歴史があり、テーマ、対象、方法等バラエティに富んだ展開が続けられている。多くの人を対象とした講演会やリンゴの皮むきコンテストや男の家事大賞と行ったイベント型のものから、少人数の父子ワークショップなど講座の蓄積は大きい。また、この蓄積を基にマンネリ化することなく、これまでの講座の参加者やエル・ソーラ仙台の他の講座の参加者など男性だけでなく女性のニーズもすくい上げるとともに、調査研究の成果も

反映させて常に新たなアプローチを続けていることから学ぶことは多い。

また、父親と子どものコミュニケーション講座でも、単に子どもとの関係を見直し、男性の子育て参加を進めるだけではなく、妻との関係を見直すという男女共同参画の視点が意識されている。それが男女共同参画推進を進めるという目的を持ったプログラムがぶれることなく続けられた要因だったのではないかと思う。

今回の調査研究のテーマである地域の活性化にどのようにつなげるのかは今後の課題になると考えられるが、家庭の中で夫と妻、親と子の関係を見直しワーク・ライフ・バランスを推進する先に生活の場である地域社会という視点を入れた事業の展開が望まれる。

(中野 洋恵)

＜講座等を実施する取り組み＞

企業による社会貢献活動プログラムを通じた ワーク・ライフ・バランス推進と社員ボランティア の育成

コスモ石油株式会社コーポレートコミュニケーション部

【取り組みの概要】

コスモ石油株式会社では、平成 4 年より全社的に社会貢献活動に取り組み、さまざまなプログラムを実施している。平成 18 年からは、父親の育児参加を応援することを目的とし、父子がコミュニケーションとアートを楽しむ「パパとキッズのアートプログラム」を全国の営業所のある地域を中心に実施している。各回のプログラムには、社員がボランティアとして参加している。

社会貢献活動のほとんどのプログラムでは、コスモ石油グループ社員がボランティアとして参加することを前提としている。平成 5 年より毎年実施している交通遺児の小学生を対象とした自然体験プログラム「コスモわくわく探検隊」にボランティアとして参加する社員は、2 泊 3 日の事前研修を受け、子どもを対象としたいろいろなプログラムに参加し、会社の社会貢献活動を支えている。

1. 機関の概要

（1）体制、事業方針等

全社的な社会貢献活動で 17 年間ぶれない基本方針

コスモ石油の社会貢献活動は、「子ども・環境・社会をテーマにした活動」⁵「環境メッセージの発信」⁶「コスモ石油エコカード基金による活動」⁷等を行っており、コーポレートコミュニケーション部が主幹部署となっている。ここで紹介するプログラムが含まれる「子ども・環境・社会をテーマにした活動」は 2 名で担当している。

⁵ 「子ども・環境・社会をテーマにした活動」としては、本報告書で紹介する「パパとキッズのアートプログラム」「コスモわくわく探検隊」のほかに、「子どものための自然アートワークショップ」（小学生対象、平成 19 年は「大地の絵画 ～アボリジニのオーカ・ペインティング～」）、「小学生向け『地球環境ブック』の配布」、「クリスマスカード・プロジェクト」（長期入院中の子どもたちに社員やその家族、友人、また同社プログラムに参加した子どもたちとで励ましのメッセージを送る）、「Web コスモ子ども地球塾『エコネッツ』」、「コスモ絵かきっず」（児童養護施設で家族と離れて生活する子どもたちの心のケアと元気付けを目的としたアートコミュニケーション・プログラム）、「ユース・フィランソロピー」（子どものための社会貢献教育プログラム(小学 4 年生対象)）、「ハッピードールプロジェクト」（長期入院中の子どもを対象としたワークショップ）がある。

⁶ 「環境メッセージの発信」としては、「コスモ アートコンシャス アクト アースデー・コンサート」「コスモ アートコンシャス アクト ラジオ番組『ずっと地球で暮らそう。』」「コスモ アースコンシャス アクト クリーン・キャンペーン」「コスモ アースコンシャス アクト 野口健講演会」「環境文化誌『TERRE』」「インターネットムービー&DVD『野口健 小笠原自然学校』」がある。

⁷ 「コスモ石油エコカード基金による活動」としては「熱帯雨林保全プロジェクト」「南太平洋諸国支援プロジェクト」「シルクロード緑化プロジェクト」「循環型農業支援プロジェクト」「学校の環境教育支援プロジェクト」「さとやま学校」「野口健 環境学校」「秦嶺山脈森林・生態系回復プロジェクト」「参加型総合が講習・環境教育サイト EEkids」「種まき塾」がある。

同社では、企業が発展していくためには、地球環境が保全されていること、社会が平和で健全であることが前提条件になると考え、地球と人間と社会との共生を基盤に、持続的な発展に向けて、さまざまな社会貢献活動に取り組んでいる。社会貢献活動のコンセプトとして、次の3つを掲げている。

- ・未来の社会をつくる子どもたちの啓発
- ・人間社会が存続するための基盤である地球環境の保全
- ・平和で心豊かな文化的社会の構築

また、全社的に社会貢献活動に取り組むにあたり、平成4年に次のような3つの基本方針を定めている。

- ・コスモ石油としてオリジナリティのある活動を行う
- ・社員が参加して活動する
- ・経営状況に左右されず長期継続する

基本方針を定めてから17年経つ現在も、それぞれの活動はこれらの方針からぶれておらず、特徴のある豊かな取り組みとなっている。

（2）事業概要

「コスモわくわく探検隊」を根幹として多様なプログラムを展開

初めての社会貢献プログラムとして、平成5年に、交通遺児の小学生を対象とした自然体験プログラム「コスモわくわく探検隊」を開催し、以来10年以上にわたり毎年、継続実施している。コスモ石油が主体となり、NPOの協力のもとにプログラムを企画・運営することで、子ども向けプログラムづくりのノウハウを蓄積し、このプログラムを社会貢献活動の根幹と考え、そこから他のプログラムが派生、多方面に展開するとともに、社員の社会貢献活動についての意識醸成を図っている。



「コスモわくわく探検隊」参加者とスタッフ

「コスモわくわく探検隊」では、毎年20名程度のコスモ石油グループ社員がボランティアとして参加し、プログラムを運営している。ボランティアとしてプログラムに参加する社員は2泊3日の事前研修を受け、参加者である子どもたちの安全管理やアクティビティの活動支援について学ぶ。この事前研修とプログラム運営への参画を通して、子どもを対象としたさまざまなプログラムで活躍できる社員ボランティアの育成を図っている。「コスモわくわく探検隊」をはじめ、ほとんどのプログラムでは、コスモ石油グループ社員がボランティアとして参加することを前提に企画・運営が行われており、全国で延べ300名以上となった「コスモわくわく探検隊」を経験した社員を中心に、社員がコスモ石油の社会貢献活動を支えている。また、同社が主催する社会貢献活動以外にもさまざまな分野のボランティア情報を社員に提供するなど、ボランティア活動の推進にも注力している。

平成 19 年 4 月に同社が推進する CSR の一環として、社会貢献活動に多くの社員が関心を持ち、自ら参加していこうという意識を持ってもらいたいというメッセージを込めて、「ボランティア休暇制度」をスタートさせた。この制度は、会社が認めるボランティア活動に参加する場合、年間 3 日間の有給休暇を認めるものとなっている。

2. 講座等のプログラムについて

(1) プログラムの内容・方法等

父親の育児参加を応援する「パパとキッズのアートプログラム」

父親の育児参加を応援することを目的とする「パパとキッズのアートプログラム」は、父子がコミュニケーションとアートを楽しむワークショップとして、平成 18 年より東京をはじめ全国の営業所のある地域にて実施している。

平成 18・19 年には「パパとキッズのアートプログラム ～世界でたった 1 つの絵本～」を全国 9 カ所(18 年 3 月東京、5 月大阪、10 月札幌 福岡、19 年 3 月仙台、5 月高松、6 月広島、7 月名古屋、8 月松山)にて実施した。プログラムは、土曜日または日曜日の午後 3 時間。1 回のプログラムの参加者は 20 組 40 名程度の小学 1～4 年生の子どもとその父親。アーティスト MAYA MAXX さんをナビゲーターに、ワークショップでは、父子が MAYA MAXX さんのデモンストレーションを見た後、父親が「お父さんのお父さんはどんな人だったの?」「子どものときは大好きだったものはなに?」「どんなことがうれしかった?」の 3 つの質問について、子どもに話をする。子どもたちは、父親の答えを聞きながら、それをイメージし絵に描いていく。最後に子どもたち一人ひとりがみんなの前で、自分の描いた絵について発表するという構成になっている。

平成 20 年からは、「パパとキッズのアートプログラム」のパート 2 として、「パパとキッズのアートプログラム part2 ～世界でたった 1 つのかたち～」を実施している(平成 20 年 7 月広島、8 月東京、11 月北海道、21 年 2 月仙台)。「ノッポさん」をナビゲーターに、「歌のおねえさん」古家喜代美さんとゴン太くんの生みの



絵を描く父子



「パパとキッズのアートプログラム Part1」
作品の発表と運営を手伝う社員ボランティア



「パパとキッズのアートプログラム Part2」
北海道立近代美術館にて



ノッポさんたちによるデモ制作を見る参加者

親・枝常弘さんの2人のゲストとともにプログラムを進行する。音楽に合わせた3人の登場、制作の説明の後、「世界でたった1つのかたち」を作る時間では配られた大きな紙に子どもと父親がお互いのかたちを寝転んでそれぞれ写し取り、お互いをじっと観察しながら顔や服装を描き込む。作品は切り取って後ろに針金をつけ、好きなポーズで壁面に立てる。その後、ノッポさんが絵本の読み聞かせを行い、絵本に出てくる自然の風景を子どもと父親たちみんなで、手に絵の具をつけたハンドペインティングで壁画を制作するという構成になっている。



できあがった作品

「コスモわくわく探検隊」社員ボランティアの育成

「コスモわくわく探検隊」は、独立行政法人自動車事故対策機構に登録している交通遺児の小学生を対象にした2泊3日の自然体験プログラムで、平成5年から毎夏実施している。毎年新しい場所を探して開催しているこのプログラムだが、平成20年は、山梨県八ヶ岳少年自然の家で実施し、「自然に生きる知恵を動物たちから学んじゃおう！」をテーマに、野生動物の観察、木の実・草花等の標本箱づくり、体験したことをもとにした新聞づくりと発表会等を体験した。このプログラム開催にあたっては、毎年20名程度のコスモ石油グループ社員がボランティアスタッフとして参加する。募集に集まったボランティアスタッフは、本番と同様の2泊3日の事前現地研修、研修後のフォロー研修、本番前日の最終ミーティングに参加し、自然体験プログラムについての知識や情報を学んでいる。

平成 20 年「コスモわくわく探検隊」本番スケジュール

7 月 31 日(木)＜1 日目＞	8 月 1 日(金)＜2 日目＞	8 月 2 日(土)＜3 日目＞
8:00 児童受付開始	6:00 起床、早朝観察、朝食	6:00 起床、早朝観察、朝食
9:00 本社出発	9:30 動物観察	9:00 荷物整理・清掃
11:00 八ヶ岳少年自然の家到着	11:00 標本箱作り、昼食	9:30 新聞作り&発表
13:00 周辺散策・動物観察 (途中、休憩)	13:00 動物観察	12:00 昼食
17:00 入浴	16:00 屋台村準備(野外炊事)	13:00 八ヶ岳少年自然の家出発
18:00 夕食	18:00 屋台村	16:00 本社到着、解散式
19:00 ナイト・プログラム(夜の 森観察)、グループタイム	19:30 入浴	16:30 解散
21:00 就寝	20:30 ナイト・プログラム (夜の動物観察)	
	21:30 就寝	

平成 20 年「コスモわくわく探検隊」事前現地研修スケジュール

6 月 13 日(金)＜1 日目＞	6 月 14 日(土)＜2 日目＞	6 月 15 日(日)＜3 日目＞
11:00 事務局スタッフ集合	6:00 起床	6:00 起床
12:00 社員スタッフ集合 コーポレートコミュニケ ーション部長挨拶、スタ ッフ自己紹介	6:30 早朝観察・野営者の報告	6:30 早朝観察・野営者の報告
12:30 本社出発	7:30 朝食	7:30 朝食、身支度、 部屋の掃除
15:00 八ヶ岳少年自然の家到着 オリエンテーション	9:00 小動物観察	9:00 巣箱作り
15:30 ミーティング① 動物観 察についてのレクチャー	10:00 標本箱作りレクチャー、 標本箱の発表、観察ポイ ント探し	10:00 班ごとに観察エピソード 発表、雨プログラムにつ いて、班・役割ごとの打 ち合わせ
17:00 ミーティング②	12:00 昼食	12:00 昼食
18:00 夕食	13:00 観察ポイント作り、 昼間の動物観察	13:00 八ヶ岳少年自然の家出発
18:30 入浴	14:30 ミーティング③、 指導案作り	16:00 本社到着、 出発式・解散式の予行
19:00 夜の森での小動物観察、 情報交換会	16:00 屋台村説明・実施 (野外炊事)	16:30 解散
23:00 就寝	18:00 夕食 屋台村	
	19:00 入浴	
	20:00 夜の森での小動物観察	
	23:00 就寝	

事前現地研修後の 7 月 8 日(火)には、フォロー研修を行い、「コスモわくわく探検隊の意義」「コスモ石油の社会貢献活動とは?」「研修の改善案」等について、2 人 1 組の意見交換・発表等のワークショップ形式で再確認、共有を行った。フォロー研修は、終業後の 19 時くらいから 2 時間程度のものであるが、東京に勤務する社員が中心になるが、参加できなかったスタッフには、研修内

容をまとめた報告書を送って情報を共有した。また、本番前日は東京に前泊をするので、その際にも本社会議室に集まって、最終ミーティングを行い、留意点等の確認を行った。会議室は開放時間を設け、本番のグループ分けの班ごとに打ち合わせが必要なスタッフが利用できるようにした。



事前現地研修を行う社員ボランティア



事前現地研修後のフォロー研修

（２）企画・運営の工夫・特色

アートを通じた次世代育成支援

コスモ石油の社会貢献プログラムが柱とするテーマは環境と次世代育成であり、平成 14 年からは環境とアートを組み合わせた「子どものための自然アートワークショップ」を行っている。「パパとキッズのアートプログラム」では、「子どものための自然アートワークショップ」を協働で行った社外プロジェクトパートナーと一緒に企画・運営を行った。絵を描くことを久しくしておらずに最初はとまどっていた父親が、ナビゲーターの効果的な誘導もあり、子どもと一緒に自由に表現し、最初来た時と全然ちがう表情で帰っていく。あるいは、最初は静かだった会場が、プログラムの最後には親子の会話がとても大きく響いているというように、プログラム前後の変化がとてもよく見える。短時間のプログラムでも、アートという手法を用いることは、参加者の緊張をほぐし、父子のコミュニケーションを円滑にするのに効果があると考えている。

社会貢献のしくみが幾層にもなったプログラム

コスモ石油の社会活動のプログラムは、活動を社会に還元する方法がさまざまに工夫されている。父親の育児参加を応援するプログラムである「パパとキッズのアートプログラム」は、全国のコスモ石油営業所のある地域で開催して、公募で一般の父子の参加を募るとともに、営業所の社員の親子参加とボランティアスタッフとしての参加を促している。

1 組 500 円の参加費は、全額にコスモ石油が同額をマッチングして、長期入院している難病の子どもたちの家族滞在施設をサポートする NPO ファミリーハウスに寄付している。病気の子どもの持つ家族が滞在するファミリーハウスは、そのほとんどの施設が個人の好意による提供とボランティアによる運営によって支えられている。

また、「コスモ・クリスマスカード・プロジェクト」という他のプログラムともつなげている。「コスモ・クリスマスカード・プロジェクト」は、平成 15 年より開催しているプログラムで、同

社が主催する社会貢献プログラムに参加した子どもたちの作品をモチーフとしたオリジナルのクリスマス・カードに、全国のコスモ石油グループ社員やその家族、友人、プログラムに参加した子どもたちとで励ましのメッセージを添えて病院に送っているもの。平成 19 年には、全国から集められた 1,357 枚に、「パパとキッズのアートプログラム」に参加した児童から寄せられた 198 枚のカードを合わせ、合計 1,545 枚のカードを全国の 15 の病院にクリスマスプレゼントとして届けた。このプロジェクトは、回数を重ねるたびにプロジェクトへの社内外の参加者や病院から希望される枚数が増加しており、各病院の医療スタッフからも毎年楽しみに待っているとの声が寄せられるようになっている。

このように、社会貢献活動の多様なプログラムが相互に関連しながら、プログラムの社会貢献のしくみが幾層にもなるような工夫がなされている。

(3) 講座等を実施するに至る背景、地域の課題・ニーズ

男性社員が多い会社として少子化問題を鑑みたプログラム

コスモ石油は男性社員が多く、昨今の少子化問題に対応するプログラムとして、父子を対象としたプログラムが何か実施できないかと検討を行った。同社の社会貢献プログラムは土日に行うことが多く、子育て中の父親社員からは、土日は子育て等に忙しく、プログラムへの参加が難しいという声があったこともあり、土日に親子で参加できるプログラムを考え、「子どものための自然アートワークショップ」のプログラムを協働で行っていた社外プロジェクトパートナーと一緒に、アートを用いたプログラムを企画した。

(4) 内外の評価や参加者の受講後の変化

効果が見えづらい地道な活動の評価を社員に伝え意識を醸成

社会貢献活動のプログラムは、企業の他の取り組みと比べても、その効果が見えにくいものであるが、参加した子どもや大人からは毎回アンケートで感想をもらったり、社員ボランティアには活動の報告を提出してもらい、その結果を社内で共有し、プログラムに対する社内評価が高まるよう努力している。コスモ石油の社会貢献活動は、ここ数年外部からも周知されるようになり、平成 19 年度には「過去 10 年以上にわたり率先して活動または支援を行い、その活動が他の模範となるもの」として評価され「平成 19 年度ボランティア功労者厚生労働大臣表彰」を受賞した。活動を外部に発信し、その評価や反響を社員に伝えることで、社員が自分たちの活動が外部から注目されていることを実感することもまた、社会貢献活動に対する意識の醸成を図ることに役立つと考えている。

参加後の生活に変化

「パパとキッズのアートプログラム」では、アートを通して子どもとコミュニケーションをとる機会を持つことが、父親が子どもと向き合うきっかけづくりになっている。ある父親の参加者からは、普段は忙しくて子どもと工作等をする時間がなく、プログラムでははさみをもつのが 20 年ぶりだったけれども、プログラムに参加したことをきっかけに、家でも子どもと工作を始めたという声が届いた。

また、「コスモわくわく探検隊」にボランティアスタッフとして参加した2人の子どものいる男性社員からは、休日に子どもとでかける時に、従来だとテーマパークのようなところへ行っていたのが、キャンプ等、自然と触れ合ったり、より子どもとコミュニケーションのとれる場所を選ぶように変わったと聞いた。

（５）課題・苦勞する点

自然体験プログラムの実施場所探し

「コスモわくわく探検隊」の毎年の実施場所の確保には苦心している。参加する子どもの中には、小学1年生の時から卒業まで毎年楽しみに参加する子どももあり、開催場所は毎年変え、開催場所にあわせてプログラムの内容も毎年変えている。候補地の選定は、1年以上前から始める。一緒にプログラムを企画・運営しているNPOやサポートスタッフの人たち等から情報収集したりして、10くらい候補地を挙げた中から2、3か所選んで実際に訪れる。泊まりの施設だけというのはいくらでもあるが、周囲の自然を含めて活動するプログラムとなると限定される。特に公立の施設は、学校の利用が優先され、企業の利用は抽選であったり、予約が後回しになるという不利な面がある。

3. 実施の体制・連携等

（１）社内の連携

全社をあげた社会貢献マインドの醸成

コスモ石油では、「ボランティア休暇制度」の導入やプログラムの全国各地での展開等を通して、社内への周知と活動に参加しやすい体制づくりに努めている。社会貢献活動は、企業の行う事業としては効果の見えづらい活動であるが、「コスモわくわく探検隊」には毎年、部長や役員が隊長として参加し、プログラムの内容や子どもたちの反応を実際に見て、活動の意義を確認している。平成16年に就任した木村社長も、これまでに、富士山の清掃登山や「コスモわくわく探検隊」に参加している。社長は自ら活動に参加する意義について、「仕事を離れ社会貢献活動をすることで、会社がどう見られているかを知り、さまざまなステークホルダーの存在を再認識する機会になりました。ステークホルダーの顔が見えることで、その信頼を裏切ることなく誠実に対峙していく決意をもつことができます。これは、社員としてCSRを実践する一歩となります。」⁸と語っている。

（２）他機関との連携

会社が主体となった他機関との連携

社会貢献活動のプログラムごとに、専門分野の社外プロジェクトパートナーと連携し、企画・運営を行っている。社員の事前研修を含む「コスモわくわく探検隊」はアースコンシャス、「パパとキッズのアートプログラム」はワンダーアートプロダクションという団体と一緒にいった。社

⁸ 『社会貢献活動レポート2008』（p.3）、コスモ石油株式会社、2008年3月発行

会貢献活動については、企業が他機関に全部委託して実施するところが多いが、コスモ石油では、社員がプログラムの企画・実施にしっかり関わり、会社のコンセプトに合致したプログラムを構築している。

プログラムを開催する地域の美術館や博物館等、実施会場となる施設と共催で事業を実施することもあり、美術館のボランティアの人たちが当日の手伝いをすることも多い。また、広報の際にも実施会場を通したちらしの配布等で協力をもらっている。広報は他に、一緒に企画・運営する団体を通して行ったり、業界紙や、開催する地方の一般紙、社会貢献・CSRに特化した雑誌等にプレスリリースを行っている。

4. 企画・運営の視点について

（１）男女共同参画の視点

子どもをテーマとした社会貢献活動で次世代育成支援の意識醸成

「パパとキッズのアートプログラム」も社員ボランティアの育成も、社会貢献を目的とした取り組みであるが、男性社員が圧倒的に多い同社において、社員が参加する子どもをテーマとしたプログラムを実施することによって、社会貢献マインドの醸成だけでなく、2（４）で示したような自分の子どもとの関わり方の変化や、広く次世代育成支援に対する意識の醸成が図れるように努めている。また、社会貢献活動がきっかけでワーク・ライフ・バランスについて意識するようになることも大切であると考えており、ワーク・ライフ・バランスの推進や研修を進める人事部とも連携し、社員の社会貢献活動への関心を高めるよう努めている。

（２）学習成果の活動への反映

「コスモわくわく探検隊」は子どもを宿泊で預かるプログラムであるため、子どもを預かることでは素人の社員が責任をもって子どもの安全管理ができるよう、また、特に交通遺児を対象にしていることから子どもへの接し方等を学んだ上で本番のプログラムに臨めるように事前研修を組み込んでいる。現地で事前研修することで、当日に自発的かつ的確に行動するのに役立っている。事前研修をする前と終えた後では、ボランティアの表情や行動が変わり、てきぱきと動いて子どもとフレンドリーに接することができるようになっている。

「コスモわくわく探検隊」は、今年で16回を迎えているので、複数回参加している社員は経験を蓄積し、新しい人へ教えることもある。また、ボランティアスタッフ同士は、研修や当日のプログラムを通して、とても濃い時間を過ごし、プログラム終了後も、研究職や事務職、本社や支店といった全く違う部署や職種の社員のネットワークができている。

5. 今後に向けた展望・課題

（１）今後実施予定の男性を対象とした事業

平成21年度の「パパとキッズのアートプログラム」は、平成20年度のプログラムの開催地が東京、広島、札幌、仙台だったので、営業所のある残りの地域で開催する。

(2) 今後に向けた課題と方向性

社員の意識醸成や研修の質の維持

今後さらに、社員のマインドやスキルの向上が図れるよう、社員が参加する社会貢献活動の裾野を広げるだけではなく、深みをもたせた上でプログラムを続けていきたい。最近、CSR 関連のアンケート等では、ボランティア休暇の取得率等、数を問う質問が多いが、数だけではなく、活動1つ1つの意義を問い続けたいと考えている。

社員ボランティアが活躍できる場の開拓

「パパとキッズのアートプログラム」は社員のボランティアの力が発揮できているプログラムであり、現在は受付や製作の補助等を行っているが、活躍できる場をもっと増やしていけないかと思っている。

プログラムの広がり

現状ではプログラム実施の地域が限られており、主に事業所、支店のある地域において実施しているが、今後、工場、グループ会社の周辺等を中心として全国に広げるプログラムを検討していきたい。

ヒアリングを終えて

コスモ石油の取り組みは、企業の取り組みとしては非常に特徴的であると思う。企業の次世代育成支援関連の取り組みとしては、社員のための制度や設備を整えるという視点のものがほとんどだと思われるが、同社では、子どもをテーマとした社会貢献活動に、社員ボランティアの育成や父親の育児参加の推進という課題を結びつけ、社員の社会貢献活動に対する意識醸成だけでなく、次世代育成支援活動への意識醸成を図っている。「コスモわくわく探検隊」から派生した各プログラムは、同社の社会貢献活動の基本方針のとおりオリジナリティのあるもので、工夫が凝らされている。活用を前提としたボランティア育成、「コスモわくわく探検隊」参加のために育成した社員ボランティアの他のボランティア活動へつながり等、学習と活動の循環、育成と活用のしくみとしても、とても参考になるプログラムであると思った。

(飯島 絵理)

＜講座等を実施する取り組み＞

行列のできる男性講座開催で 地域活性化に向けた男女共同参画推進

大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」
(指定管理者：特定非営利活動法人男女共同参画おおた)

【取り組みの概要】

「エセナおおた」は昭和52年に大田区立婦人会館として開館し、平成12年に改称。平成16年、「特定非営利活動法人男女共同参画おおた」が指定管理者となり、施設管理を受託した。平成18年より再指定とともに、男女共同参画社会実現のための地域の拠点として、男女共同参画に関するセミナーや各種講座等の実施を委嘱され、現在に至っている。

平成13年策定の「大田区男女平等推進プラン」、平成18年策定の「大田区男女共同参画推進プラン」のなかに、「男性の家庭参画支援セミナーの実施」が行われるべき事業とされていることから、平成13年から男性向けの講座を積極的に行っている。当初はタイトルのつけ方も「男性の家庭参画セミナー」と固く、参加者も少なかった。現・理事長の牟田静香さんがスタッフとして加わり、タイトル、ちらし、内容に工夫を重ねたところ、男性の受講者が大幅に増えた。現在、「エセナおおた」の講座企画力、運営力は全国から注目されている。

1. 施設・機関の概要

(1) 体制、事業方針等

区からの補助金事業として行う講座

平成16年から「特定非営利活動法人男女共同参画おおた」が指定管理者として「エセナおおた」を管理・運営。職員17名の内訳は常勤2名、非常勤1名、パート14名である。主な業務は施設管理と受付業務で、講座事業は平成18年よりすべて区からの補助金事業として行っている。その補助金に人件費は含まれていない。

職員のうち、講座事業に関わっているのは3分の2程度。講座事業を行うため、講座に参加した区民にもボランティアスタッフとして講座等の企画や運営に参加してもらっている。現在、80名程度の登録スタッフがあり、うち男性は2割程度。月1回のボランティアスタッフ会議（午後と夜、1日2回実施）には、常時20名程度の参加がある。ボランティアスタッフには、活動費として交通費程度（2時間以上で1,000円）を支払っている。

「大田区男女共同参画推進プラン」に位置づけられた男性向け講座

「大田区男女共同参画推進プラン」のなかの施策12に「男性の家事・育児・介護への参画」が謳われ「家事・育児・介護等に関する講座の実施」「男性の家庭参画支援セミナーの実施」が行われるべき事業とされている。「エセナおおた」では平成13年から男性向けの連続講座を試行錯誤しながら行ってきた。基本的には女性問題はイコール男性問題だと捉え、講座を組み立てている。

(2) 事業概要

男性向け講座の定番、「夏休み父子チャレンジ」と「男の生き方塾」

前述のとおり、平成 13 年より「大田区男女平等推進プラン」に沿って、男性向け連続講座「男性の家庭参画セミナー」を始めたが、参加者は少なかった。平成 16 年に内容を一新し、夏休みの父子を対象にタイトルも「名人が教える手打ちそば作り」と変え、単発講座にしたところ、多くの応募があった。同じ 7 月に「男の料理教室 魚のさばき方 (アダルト編)」「男の料理教室 魚のさばき方 (ヤング編)」など男性向け単発講座を集中的に行ったところ、いずれも好評で多くの男性の応募があった。

しかし、単発では終了後のネットワークが作れないことや、男女共同参画の話を入れ込んでも、その効果が薄い。同時期、「2007 年問題 (団塊世代の大量定年退職)」が話題となり始めたことから、まず団塊男性向けの連続講座の開講を決め、準備を開始。平成 16 年 9 月から団塊世代向けの 5 回連続講座「男の生き方塾」を開講。同様に父子向け講座も、翌 17 年からは 3 回の連続講座「夏休み父子チャレンジ」に練り直した。

この 2 つの連続講座は内容を見直ししながら、「エセナおおた」の男性向け定番講座となり、現在も続いている。

2. 講座等のプログラムについて

(1) 講座等を実施するに至る背景

日本の縮図、大田区

大田区は東京都のほぼ東南部にあって、東は東京湾に面し、西と南は多摩川を挟んで神奈川県川崎市と隣り合い、北から西にかけては品川、目黒、世田谷の各区に接している。高級住宅街の田園調布、日本を高度経済成長期から支えてきた中小企業が集積する羽田、物流拠点としての湾岸地域と、多彩な様相を持ち日本の縮図とも言われている。広さは東京 23 区で最大で、羽田空港の再拡張事業に伴う第四滑走路や浜辺公園の整備に伴う埋め立てなどにより、さらに拡張。人口も約 69 万人で増加傾向にある。

しかし、区の出生率は全国平均 1.34 (平成 19 年・厚生労働省統計情報部『平成 19 年人口動態統計』) より低く、平成 9 年に 1.1 を割り込んで以来、1.00 から 1.09 の間を推移している (東京都福祉保健局人口動態統計)。

住民の考え方は保守的であり、男女共同参画の視点は前面に出さず、さり気なく入れていく工夫がある。町工場などで働く男性は 60、70 歳代でも現役。組合や町会など役目もあるので、「エセナおおた」に足は向かない。

地域に居場所のない男性たち

定番化した「夏休み父子チャレンジ」には応募が多い。平成 20 年度も 15 組募集に 39 組の応募があった。今の父親世代は育児に対する抵抗感は少なく、積極的に子育てに関わりたと思っていて。しかし、ふだんは仕事に追われているため、なかなか仕事以外に時間をとれない状況にある。

一方、定年を迎えた団塊世代は地域では「若造」で町会デビューには早過ぎ、また、元サラリーマンには地域情報はほとんどなく、地域に居場所がない。地域活動のきっかけを求めている。

前述のように「2007 年問題」が話題となり始めた平成 16 年 7 月に「男の料理教室 魚のさばき方」をヤング編（40 歳代以下）とアダルト編（50 歳代以上）に分けて募集したところ、アダルト編には 7 倍もの応募があった。終了後にはアダルト編に参加した 10 名の男性によりサークルが誕生した。こうした単発講座の積み重ねによって、男性向けの連続講座の必要性もニーズもあると確信した。

（２）プログラムの趣旨・対象・内容方法

子育て世代と団塊世代の男性をターゲットに

「エセナおおた」の男性向け講座の主なターゲットは、若い父親と定年退職前後のサラリーマンである。

「夏休み父子チャレンジ」は小学生の子と父親（男性の保護者）を対象に、3 回すべてに出席することを参加条件に募集している。働き盛りの若い世代の男性を対象に講座を開催しても参加は得にくい。父子を対象とし、父親の参加を促している。講座によって父親同士の出会いの場を提供し、子育てや地域の情報も提供している。講座を通じて男女共同参画意識醸成のしくみづくりも目的としている（表 1 参照）。

表 1 夏休み父子チャレンジ

年度	タイトル	時期	曜日・時間帯	内容
平成 16 年	名人が教える手打ちそば作り	7/31	土曜日 10:00～13:00	親子で調理
平成 17 年	夏休み父子チャレンジ 和食編 洋食編	7/24～全 3 回 7/31～全 3 回	日曜日 10:00～13:00 最終回～14:00	調理、工作、 屋外でバーベキュー
平成 18 年	夏休み父子チャレンジ	7/23～全 3 回	日曜日 10:00～13:00 最終回～14:00	調理、工作、 屋外でバーベキュー
平成 19 年	夏休み父子チャレンジ 真夏の 3 連発！	7/22～全 3 回	日曜日 10:00～13:00 10:00～12:30 10:00～14:00	調理、工作、 屋外でバーベキュー
平成 20 年	夏休み父子チャレンジ 真夏の 3 連発！	7/27～全 3 回	日曜日 10:00～13:00 10:00～12:00 10:00～14:00	調理、工作、 屋外でバーベキュー



夏休み父子チャレンジ 真夏の3連発「手打ちそばにチャレンジ～名人に教わろう！」そばを切るの難しい！

一方、「男の生き方塾」は、定年退職後の男性が、企業倫理を引きずったまま地域や家庭に戻ってくることは、何より男性自身が生きにくくなると予測。男女平等の視点に立ったプログラムで男性の地域デビューを応援することを目的に始まった(表2参照)。

表2 男の生き方塾

年度	タイトル	時期	曜日・時間帯	内容
平成16年	オレ流男の生き方セミナー ～力を抜いて生きようよ～	9/25～全5回	土曜日 or 日曜日 13:30～16:30	話し合い、調理実習等
平成17年	オレ流男の生き方セミナー ～力を抜いて生きようよ～	10/15～全4回	毎週土曜日 14:30～16:00	コミュニケーション、調理実習
平成18年	さよなら、会社人間 男の生き方 黄金の60代を創ろう ※内閣府助成事業	11/18～全5回 1/21 1回	毎週土曜日 13:30～16:00	人生再設計、地域社会、 調理実習 コンサート (1/21)
平成19年	男の生き方塾・定年後の生活ガイド したたかにしなやかにもっと楽しく ※OB会メンバーと企画	9/22～全4回	毎週土曜日 14:00～16:00	語り合い、先輩の話、 調理実習
平成20年	男の生き方塾 会話が弾む！ 酒の肴づくりとコミュニケーション術 ひととひとの気持ちいい関係づくり	9/25～全4回	毎週木曜日 19:00～21:00 25名募集	話術、行動・思考タイプ、 調理実習等

(3) 企画・運営の工夫・特色

気になるタイトル、手にとってもらえるちらしづくり

男性の目に留まるように、「オレ流」という言葉をタイトルに使ったり、ちらしの色も青やモノトーンにするなど男性らしさを逆手に取って、まずは男性に手にとってもらえるちらしづくりを工夫している。

世代を問わず人気の料理は連続講座の中に必ず入れている。男性が参加しやすい工夫として、「プロ」をキーワードに講師を選んでいる。また、コミュニケーションの大切さが学べるように工夫し、講師から一方的に話を聴くだけでなく、ワークショップなどを通じて受講者同士が語り合い知り合えるようにしている。

毎回行う受講者アンケートからもニーズ把握に努め、これまでの経験から得た講座企画や運営のノウハウの蓄積を活かしている。

連続講座で父親同士の出会いの場を提供

定番講座となっている「夏休み父子チャレンジ」は小学生の夏休みにあわせて設定。7月末から8月前半の日曜日に3回連続講座として行う。3回すべて出席できることを条件にしているが、ふだん父親同士がなかなか話し合う機会もないので、子ども以上に父親も楽しみに出席している様子うかがえる。プログラムによって終了時間は変わるが毎回10時スタートとしている。

工作の回で父親と一緒に作った水鉄砲は夏休み明けに学校に提出できる作品になり、最終回は区の人気キャンプ施設に集合し家族で参加できるバーベキューをするなど、プログラムにも工夫をしている。各回、実費は徴収している（平成20年度：そば1組1,000円、工作1個600円、バーベキュー大人1,000円・小学生800円・未就学児500円）。

毎年夏休みに開催することで、参加者の評判が口コミで伝わって「子どもがやっと小学生になったので、申し込みます」という声もあるという。

母親からの申し込みが多いので、母親が行くような場所にちらしを配布。また、現役世代の男性は区報や広報紙は見ないので、街中各所にある区の掲示板に手作りのポスターを貼るなど、積極的に広報している。

男性の家事参画は料理から

いずれの世代向けの男性講座も料理を入れないと、なかなか人が集まらないため、連続講座に必ず1コマは調理実習を入れるようにしている。団塊世代の男性には興味を持ってもらいやすい魚のさばき方、酒の肴づくりなどの調理実習を入れている。しかし、団塊世代に人気の「そば打ち」は、あえてやらない。趣味ではなく、日常の家事として役立つ調理実習を行っている。また、「男の生き方塾」は毎年秋に行っているが、秋は結婚式等お祝い事や行事が多く、週末の土日の設定では欠席者が多いため、今期は木曜日の夜間に設定。前年の反省をもとに常に改善している。

街中各所にある区の掲示板には手作りのポスターを貼るが、他のポスターは縦型が多いため、目立つように横型に作成。企業や労組にちらしを送ったり、過去に講座を受講したその対象年代の男性全員にダイレクトメールを出し参加を呼び掛けている。



平成18年度 内閣府地域活性化事例研究事業
最終回「ミステリーコンサート」
おやじバンド、男塾劇団のショートコント、コーラスと盛りだくさんのプログラム

（４）評価・参加者の受講後の変化

団塊世代は講座をきっかけに地域デビュー

「夏休み父子チャレンジ」に参加する小学生の子どもをもつ男性は、日頃は地域の中で父親同士話し合う機会もないが、連続講座参加によって地域に顔見知りが増えるという効果がある。最終回に行う家族バーベキューでは2家族ずつグループとなるため、ここから家族同士の交流も生

まれている。

団塊世代向けの「男の生き方塾」は、講座終了後、地域デビューする人を輩出している。子ども家庭支援センターの運営委員に入った受講生が2名いるほか、大田区の男女共同参画推進プランを作る区民会議にも2名が参加するなど、審議会に関わっている男性が複数いる。

また、趣味の会の会長を務めたり、文化センターの運営に関わるなど、講座受講をきっかけにさまざまなかたちで地域デビューしている男性も多い。単身赴任で大田区に住むことになった男性が「男の生き方塾」を受講し、地方に帰ってから地元で地域活動を開始するなどの例も見られた。

（５）課題・改善が必要と思われる事柄

世代を問わずコミュニケーション下手の男性

講座受講によって男女共同参画意識を持ってもらうきっかけは作れるが、そこから先が難しい。小学生の父親は働き盛りで、働き方が変わらなないと、講座後のネットワーク化は難しい。世代を問わず、男性はコミュニケーションが下手で、講座終了後もつながりを持ちたい人は多いが、「エセナおおた」にコーディネート機能が求められる。

団塊世代の男性は自由に使える時間は持っているが、自ら行動しない「待ち」の姿勢の人が多い。講座の申し込みも妻任せ。講座終了後も「ボランティアスタッフ」に関心はあるが、まずは、一人ひとり個別に「〇〇さん、お願いします」「〇〇さん、頼りにしてます」とアプローチしないと応じてもらえない。個別に声を掛けられれば参加する。いったん参加すれば、たいへん協力的である。

自主グループ活動も料理など趣味的なものではつながっていけるが、地域貢献、社会貢献の視野を入れるまでには至っていないことも、今後の課題である。



男塾の卒塾生とボランティアスタッフがお手伝い
「焼そばを担当。炭火が均等に広がらなくてひと苦労！
お味は大好評でした」

（６）今までの課題改善に向けた取り組み・工夫

講座終了後も視野に入れた取り組み

「男の生き方塾」を平成16年に始めた時は年齢制限を設けなかったため、30歳代から70歳代までの男性が集まり、ディスカッションが難しかった。平成19年からは「50歳以上」に絞って、ある程度同じ位の年代にして、共通の話題で仲間作りがしやすいように工夫をしている。

連続講座終了後には、懇親会などを仕掛けて、サークル化、組織化を手伝っている。最初3回くらいの会場提供と立ち上がるまでの連絡係をスタッフがして、サークル作りへと背中を押している。また、「ボランティアスタッフ」の登録を勧めており、現在、10数名の男性の登録スタッフがいる。大きなイベントでは、自転車の整理、受付、調理など、男性スタッフも活躍している。世代や性を越えてともに活動することで男女共同参画の理念を実感として伝えることができ、「エ

セナおおた」の他の講座等の取り組みにつなげたりしている。

受講生が講座企画に参画

平成 18 年には内閣府の助成を受け男性向け講座を行うことになり、平成 16 年、17 年の男性講座の受講者 60 名全員に企画委員募集の呼び掛けを行った。呼び掛けに 17 人が応え、8 月から会合を重ね、平成 18 年度は 11 月から 5 回の講座を実施した。しかし、17 人と企画委員の人数が多かったため、企画会を数多く開いても、意見をまとめることが難しかった。

翌 19 年度はその内の OB 6 名が企画委員として参加。講座慣れした男性が個々のこだわりで企画を立てたため、企画に客観性がなくなり、応募者が減ってしまった。男性企画者主導になりすぎ、スタッフによる軌道修正が出来なかった。

今年度は「リベンジとしてもう 1 回やらせて欲しい」と申し出た男性 2 名の少数精鋭になり、昨年度の失敗から「客観視なくして、人は集まらない」ことを学んで、企画を立てた。タイトルやプログラムにも参加する側の視点で配慮がなされ、応募者が増えた。企画に関わる OB の数は減っているものの、団塊世代の当事者の男性の視点は、毎年の「男の生き方塾」の企画に反映されている。

講座にさり気なく男女共同参画を

父子向け講座も毎年、工夫している。今年度、2 回目の工作の回は、講座の途中で父子を別々にした。父親には「ワーク・ライフ・バランス」について話を聴いてもらい、子どもには父親への手紙を書いてもらった。仕方なく話を聴いているように見えた父親だったが、隣り合った父親同士で話し合う時間をとったところ、「仕事中心の生活でワーク・ライフ・バランスは難しい」などと、日頃のお互いの生活を語り合い、たいへん盛り上がった。最後に、父子が合流し、子どもから父親へ感謝の手紙をプレゼント。満足度が一気に高まった。



肩や胸にパープルリボンが

3 回目の屋外バーベキューでは、参加家族に目印として DV 防止のパープルリボンをつけてもらい、リボンの意味や DV について説明する時間を設けるなど、単なるバーベキュー大会で終わらないように工夫している。

3. 実施の体制・連携等

(1) 他機関・団体との連携

ヌエックで出会った他団体との連携

「エセナおおた」の指定管理者「特定非営利活動法人男女共同参画おおた」は、女性会館協議会やヌエックの研修やフォーラムに積極的に参加している。毎年、ヌエックの夏のフォーラムにはワークショップを出し続けている。前述の内閣府の「地域活性化事例研究事業」を受託して開催した「男の生き方塾」の経緯は記録誌にまとめ、平成 19 年のヌエックの夏のフォーラムで男性受講者とともに発表した。

また、ヌエックで出会った他団体との交流を大事にしている。指定管理者として女性関連施設を担っている 6 団体とネットワークができ、平成 19 年度から合同研修を行い、施設の運営や講座企画などの情報交換を行っている。

「特定非営利活動法人男女共同参画おおた」理事長の牟田静香さんは「行列のできる講座の作り方」で全国各地に講師として招かれ、そこで築いた他機関・団体とのネットワークを「エセナおおた」の事業に反映させている。



2007 年 8 月ヌエック夏のフォーラムにて
内閣府の事例研究事業を発表。北田久枝前理事長と緊張の卒塾生！

(2) 行政等との連携・支援

内閣府の「地域活性化事例研究事業」受託

平成 18 年度に内閣府から受託した「地域活性化事例研究事業」実施にあたっては、東京都生活文化局都民生活部男女平等参画室、大田区経営管理部男女平等推進室とも連携し、支援を受けた。

また、講座受講者を区民会議委員に推薦するなど、積極的に区民と行政をつないでいる。

4. 企画・運営の視点について

(1) 男女共同参画の視点

男女共同参画の視点の有無が講師選びの必須条件

「エセナおおた」では、講座の中に必ず、男女共同参画の視点を盛り込んだ話を入れている。自前講師はもちろん、依頼する場合も男女共同参画の話ができる講師、視点のある講師が講師選びの基準となっている。

また、前述のように「夏の父子チャレンジ」では、父親に男女共同参画の話（ワーク・ライフ・バランス）を聴く機会を設け、DV 防止のパープルリボンを活用するなど、講座に男女共同参画の視点を積極的、意識的に盛り込んでいる。

「男の生き方塾」の参加者は定年まで性別役割分担で生きてきた団塊世代である。定年退職後の男性が上位下達や効率優先の企業倫理を引きずったままでは、地域では生きにくい。参加男性

が自ら固定的性別役割による生き難さに気づき、自らを変えるきっかけとなるような講座内容を工夫している。

（２）家事・育児参画と地域参画の視点

ボランティアスタッフは定年後の生き方ロールモデル

「男の生き方塾」は、男性の家事参加や生活自立をねらいとしているが、講座終了後のボランティアスタッフ登録や企画委員公募などを通じて、参加者のネットワーク化を進めている。ボランティアスタッフには「エセナフェスタ」「ふれあいフェスタ」「夏の父子チャレンジ」などの手伝いなどを要請し、多くの区民と出会う機会を提供し、地域参画につなげている。

「夏の父子チャレンジ」の手伝いを「男の生き方塾」に参加した男性に要請することは、世代間の交流を図ることも目的の１つである。定年後の男性がボランティアスタッフとして活躍していることを若い世代に知ってもらう良い機会となっている。若い男性にも地域参画の大切さをわかってもらうことができ、定年後の生き方のロールモデルとなっている。

（３）学習の成果の活動への反映

学びを地域で実践するしくみ

講座の参加男性にはボランティアスタッフ登録制や講座企画委員公募、講座企画募集、講師オーディション等の情報を提供し、学びを地域で実践に移すことができることをアピールしている。また、希望があれば、受講後の参加者によるサークル化を勧め、地域活動につなげている。

団塊世代の男性はこれまでの仕事で培ってきた経験をさまざまなかたちで地域社会に還元することができることに気づくと同時に、「エセナおおた」での活動によって、自らを変えていくきっかけとなっている。

５．今後に向けた展望・課題

（１）今後実施予定の男性を対象とした事業

今後も改良を加えながら「夏休み父子チャレンジ」「男の生き方塾」は継続の予定。性別役割分担意識の是正は若い世代ほど効果的だと感じている。小学生の子どもを持つ父親だけでなく、３歳児、未就園児、赤ちゃん、さらにはプレパパ、妊娠中のカップルの講座も積極的に行いたい。

今年度行った「パパの手でつくる 赤ちゃんのハッピースマイル」は生後２か月から４か月までの第一子と父親対象の講座。１１月初めの行楽シーズンに毎週日曜日という４回連続講座で、応募があるか心配したが、１５組募集に３４組の応募があった。１５組



「パパの手でつくる 赤ちゃんのハッピースマイル」パパ、きもちいい～！ 赤ちゃんの声が聞こえそう！

中 14 組の父親が自らスリングで赤ちゃんを抱っこして参加。講座にキャンセルはなく、3 回目に 1 組が子どもの熱で欠席したほかは、皆出席だった。終了後に、「もっとベビーマッサージを覚えたい」と要望があり、初めて若い父親のサークルが生まれそうである。「パパの手でつくる 赤ちゃんのハッピースマイル」は初めて子育てに不安を抱えている父親を支援することができ、継続を検討中である。

（２）今後の事業の方向性

講座の終了後、受講者が地域貢献の視点で自主的に活動できるような方向性を入れていきたいと考えている。今後は、今まで以上に、対象の設定、講座の目的を明確にした企画を立て、人が集まる講座の「次」を展開すること、「エセナおおた」ですべきことを明確にしたいと考えている。そのための情報収集、ニーズの把握を心掛けている。

（３）今後に向けた課題

平成 20 年度に新しく実施した男性向け講座の「パパと作ろう！母の日料理」は、人は集まったが失敗だったと総括している。父子は料理、母親はカラーセラピーという内容だったが、集まったのは「幸せ家族」だった。「エセナおおた」でやる意味、やる意義が見出せないものは、人が集まっても断念することも重要だと考えている。

講座終了後もつながりを持ちたい人は多いので、今後も「エセナおおた」にコーディネート機能が求められている。初期の支援は必要だが、段階を経て受講生が自主的に動けるようなプログラムを意識的に初めから入れ込む工夫も必要である。

また、男性講師に習いたい、女性スタッフからの助言を嫌うといった男性受講者の意識を変えていくことも重要である。地域では固定的な性別役割分担意識にとらわれないコミュニケーションが大切であることにも気づいてもらうためにも、男女共同参画の視点を繰り返し事業に入れ込むことは、ますます重要で欠かせない。

ヒアリングを終えて

「行列のできる講座」で有名な「エセナおおた」の男性向け講座ならではの工夫が随所に見られた。講座終了後のボランティアスタッフ登録制や企画委員公募など、一度、来館した参加者をその後も「エセナおおた」につなぐしくみづくり等、積極的な取り組みに感心した。

これだけの講座実績を積み重ねても、「大田区男女共同参画推進プラン」に謳われている講座やセミナーの開催が指定管理業務に含まれず、別枠の補助金事業であることは、大田区の今後の課題だろう。

(松下 光恵)



パパと作ろう！ 母の日料理

ママはゆつたり  カラーセラピー 

5/11

母の日

日

10:00~14:00

大田文化の森



今年の母の日はママのために！子どもでもお料理に挑戦!!
ママは色で今の心機状態を探る「心のカラーセラピー」を受けながら、ゆっくりと料理の完成を待ちます。料理ができれば家族揃って試食タイム! さでさで、おいしくできかな??





- 日時
- 会場
- 対象者
- 参加費
- 講師
- 申込方法
- 申込締切
- 主催
- 共催

5月11日(日) 10時~14時終了予定

大田文化の森 (大田区中央 2-10-1 地図は裏面)

小学生と両親 ●定員 抽選で15組

1組1,000円(料理の材料代として)

料理…地元が誇る佐伯栄養専門学校のプロの講師陣!

カラーセラピー…評判のセラピスト 中屋映子さん

E-Mail または FAX で「エセナおた」へ(詳細は裏面参照)

5月4日(日) 必着

大田区立男女平等推進センター「エセナおた」

大田区

この事業は NPO 法人男女共同参画おたが区の補助を受けて実施しています。

「男の生き方塾」

**会話が弾む
酒の肴づくりとコミュニケーション術**

**ひとと人との
気持ちいい関係づくり**

聞くだけではなく、楽しみながら実践に結びつく参加・体験型の講座です。
「コミュニケーション術」を体得することによって、人間関係が身につき、
人と接することがどんどん楽しくなります。さあ！新しい人間関係の始まりです。

50歳以上の男性 25名募集（抽選）

プログラム

① 9月25日（木） 19時～21時	近い人ほど仲良くなれる？！ ＝自分を印象付ける話術＝
② 10月2日（木） 19時～21時	心と体のハーモナイズ ＝五感を研ぎ澄ます空間創造学＝
③ 10月9日（木） 19時～21時	長嶋・王・野村・星野 わたしはどのタイプ ＝自分の思考・行動を知ろう＝
④ 10月16日（木） 18時～21時	【調理実習】会話が弾む晩酌の「肴」 ＝男がつくる「肴」料理5種＝（大田文化の路）

主催：大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」 共催：大田区

この事業はNPO 法人男女共同参画おおたが、大田区の補助を受けて実施しています。

男の生き方塾 4回連続講座

定年後の生活ガイド

～したたかにしなやかにもっと楽しく～

いま30歳代の方々は「第二のセカンドライフ」「定年を越える前の準備」など、テレビや新聞で見ない日はないほどクローズアップされています。自分を振り返ってみてあなたはどのような？「毎日が日曜日だっというじゃないか。今まで一歩も進んでいないまま」なんて思っている。新しい人生の幕を開ける。とお尻がむずむずしてくるのか……。『男の生き方塾』『男の生き方塾』いろいろなことばや情報を見聞きするけど、自分でイメージしてみても何にも浮かんでこない。とよく聞きます。

この講座はこれからいよいよ人生を送るために、与えられたものではない自分でつくる「自分の理想の生き方」、家族（三）とのコミュニケーション、地域での友だちづくりまで目指した、男性への応援講座です。

① 9/22日 14:00～16:00 わいわいがやがや 大いに語ろう	② 9/29日 14:00～17:00 定年するとどうなるの？ 何がどう変わるの？ 講師：松本すみ子
③ 10/6日 14:00～16:00 もっと楽しく生きるために 地域で活動中の先輩を招いて	④ 10/20日 13:00～18:00 料理は楽しい!! 講師：佐野千代

会場：大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」
JR大森駅より徒歩8分（東口の東口ビルに隣接）
（第4回の料理実習のみお申し込みが必要になります）

対象：男性
定員：30名（応募多数の場合は抽選になります）
費用：料理材料費¥1,500.-（初回に徴収します）
申込方法：往復はがき、ファクス、e-mailで（郵送可）
締切：2007年9月20日（木）必着 **早急お申し込みください！**

この事業はNPO 法人男女共同参画おおたが、大田区の補助を受けて実施しています。

男の生き方塾

**会話が弾む
酒の肴づくりとコミュニケーション術**

ひとと人との気持ちいい関係づくり

評判のコミュニケーションアドバイザー
講師：櫻井優司さん

50歳以上の男性限定

① 9月25日（木）午後7時～9時 近い人ほど仲良くなれる？！ ～印象付ける自己紹介～	<p>●対象：50歳以上の男性 25名 （応募者多数の場合は抽選になります）</p> <p>●参加費：1,000円（調理材料費代）</p> <p>●会場：大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」ほか JR大森駅下車 徒歩8分（入新井第一小学校裏）</p> <p>●申込方法：FAX、往復はがき、E-Mailに ①「男の生き方塾」②住所③年齢④電話番号を記入</p> <p>●申込締切：9月18日（木）必着</p> <p>●申込先・問合せ：〒143-0016 大田区大森北4-16-4「エセナおおた」宛 FAX：03-5764-0604 TEL：03-3766-4586 E-Mail：esena@esenaoota.jp</p>
② 10月2日（木）午後7時～9時 心と体のハーモナイズ ～五感を研ぎ澄ます空間創造学～	
③ 10月9日（木）午後7時～9時 長嶋・王・野村・星野 わたしはどのタイプ ～自分の思考・行動を知ろう～	
④ 10月16日（木）午後6時～9時 調理実習 会話が弾む晩酌の肴 ～男がつくる「肴」料理5種～	

主催：大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」 共催：大田区

この事業はNPO 法人男女共同参画おおたが、大田区の補助を受けて実施しています。

(掲示板用の模型)

＜講座等を実施する取り組み＞

「子育てしやすい社会は男女共同参画社会」 という考えに基づき、企業への出前講座等、 男性を対象とした講座を実施

NPO 法人マミーズ・ネット

【取り組みの概要】

新潟県上越市にて平成8年より活動を続ける「NPO 法人マミーズ・ネット」は、子どもの幸せを願うすべての人々が、地域で支え合って子育てできる社会をめざし、講座の開催や子育て応援誌の発行、親子の居場所づくり等、子育て中の人や子育てを支援する人に向けたさまざまな活動を行っている。また、「子育てしやすい社会は男女共同参画社会」という考えに基づき、企業への出前講座等、男性を対象とした講座や、退職した世代に向けた講座を実施している。

1. 機関・団体の概要

（1）体制等

子育て中の母親を中心とした NPO 法人

NPO 法人マミーズ・ネットは、平成8年に上越市の子育てサークル連絡会の「マミーズ・ネット」、および子育て応援誌を発行する「ポケット倶楽部」を発足し、活動を始めた。平成16年には2つを合わせて NPO 法人マミーズ・ネットを設立した。

理事長は中條美奈子さん。メンバーは、乳幼児や児童を子育て中の母親が中心で、平成21年3月現在、20名。

（2）事業概要・方針等

子育てしやすい社会は男女共同参画社会

子どもの幸せを願うすべての人々が、地域で支え合って子育てできる社会、および子どもも大人も性別にとらわれずに生きやすい社会をめざし、子育て中の人および子育てを支援する人に向けたさまざまな活動を行っている。「子育て支援」「子育て情報の発信」「男女共同参画社会の推進」の3つを事業の柱とし、講座・フォーラム・子育て劇等の開催、親子の居場所づくり（子育て応援ひろば「ふう」、上越市から受託のこどもセンター運営）、子育て情報の発信、育児サークル支援等を行い、平成20年には、地域に密着した多彩な活動が評価され、「第2回よみうり子育て応援団大賞選考委員特別賞」を受賞した。

「子育てしやすい社会は男女共同参画社会」と考えることから、企業への出前講座や、経営者を招いたパネルディスカッション等、男性の子育て参画の促進のための取り組みも積極的に行っている。

2. 講座等のプログラムについて

(1) プログラムの内容・方法等

企業への出前講座

企業への出前講座は、就業時間内に会社内で行う従業員を対象とした子育て講座として位置づけている。参加者である社員からは徴収しないが企業に対して有料(2万円)で行うこととした。就業時間に行うため、時間は1回に1時間くらい。内容は、子育ての現状についてクイズ形式で学ぶことや、ほめ方や話の聞き方等、子どもとのコミュニケーションの取り方をワークショップ形式で体験すること、市の子育て支援策、国の施策等の紹介すること等を、実施する企業の希望に沿って組み込んで行っている。



企業への出前講座

地域での父親を対象とした講座

家庭教育推進協議会の事務局として、地域での父親を対象とした講座も、工夫を重ねながら続けている。

<平成 18 年度>

「お父さん講座 はじめの一步」

第1回(9月9日(土)) 「かわいい瞬間を撮って！ プロが教える写真撮影のポイント」

第2回(10月7日(土)) 「どうしていますか？仕事と子育てのバランス」

講師：中島 純(NPO 法人ヒューマンエイド22 副代表・新潟経営大学助教授)

2人の子どもの子育てを通して子育て支援 NPO にかかわっている講師から、子育ての楽しさ・仕事と子育てのバランスなどについての話題提供

第3回(11月25日(土)) 「いざというとき～子どもに対する救急法を知っておこう～」

第4回(1月28日(日)) 公開講座『パパ権』宣言！お父さんだって子育てしたい」

講師：汐見稔幸

*時間はいずれも14時～16時の2時間(第1回のみ14:30～16:30)。

*できるだけ連続での参加を促している。

*保育あり(子ども1人につき300円)。

*第1～3回の講座では、別の部屋にて「ママのしゃべり場」を同時開催。「ママのしゃべり場」は子どもと一緒に参加できる。

*第1回の講座では、後半に子どもが撮影モデルになるので、当日一緒に会場へ来ることを促している。子どもは前半は保育ルームもしくは「ママのしゃべり場」で母親とすごす。

<平成 19 年度>

「おやじパワー出陣！」

第 1 回(7 月 14 日(土))13:30～16:00

父親応援団等、父親の活動を活発にしている学校の活動報告 4 校

ワークショップ「これからの親父の会はどうあるべきか・どうあってほしいか」

(5 グループに分かれてワークショップ)

講師：齋藤主税(まちづくりプランナー)

第 2 回(10 月 6 日(土))14:00～16:30

講演会「見たか、おやじの底力！」～学校づくり・人育ち・まち育ては三位一体で～

講師：岸 祐司(秋津コミュニティ顧問)

座談会 城北中学校 PTA 会長、城北中学校区子どもを育てる会事務局長、会場に来ていた父親 2 名

団塊・シニア世代を対象とした講座

団塊・シニア世代男女を対象とした講座も地域で行っている。平成 19 年度には、祖父母を対象に「孫を預かる・育てる」(こどもセンターの子育てセミナーとして上越市主催、マミーズ・ネット企画・運営)、シニア世代を対象に「あなたの力を子育て支援に 企業人・仕事人のための『子育て支援』講座」を実施した。祖父母対象講座は約 60 名が集まる講座となったが、シニア世代対象の講座は、平日の午前開催の連続講座であるためか、参加が各回平均 10 名程度であった。

平成 20 年度には再度、「孫を預かる・育てる」を実施した。前年の講座の参加者から新たなニーズが見えたため、改善点として、集まった人がグループで話し合う時間を長く取ることにした。参加者からは、孫育ても孤立化している様子で、語る場がないという声がかかれた。周りには孫がいない人も多く、いても離れて暮らしている人のほうが多いため、近所や友人に悩みを話すと自慢のようにとられてしまうとのことだった。

<平成 19 年度>

「あなたの力を子育て支援に 企業人・仕事人のための『子育て支援』講座」

シニア世代対象

第 1 回(12 月 6 日(木)) 「シニアが子育て支援に関わる大切さ、親との関わり方」

第 2 回(12 月 13 日(木)) 「こどもとの関わり方、遊びの実践・読み語りなど」

第 3 回(12 月 20 日(木)) 「こどもの病気・けがの対応」

第 4 回(1 月 17 日(木)) 「乳幼児の子育ての実践的なこと」

第 5 回(1 月 31 日(木)) 「現代の子育て世代の女性が社会におかれている状況」

*時間はいずれも 10:00～12:00

<平成 20 年度>

1 月 30 日(金)10:00～11:30

「孫を預かる・育てる」

祖父母対象

内容：元保育園長から祖父母世代が最新の子育てを学ぶ。祖父母に期待されることとして「若いふたりの応援」と語り、仕事を続けるのは自己実現であり、2人で生活を支えるのは時代の要請であることを話された。また、祖父母が自分を犠牲にしないことも話された。講義の後、グループ討議。

(2) 企画・運営の工夫・特色

内容の改善や人との出会いを経て出前講座を実施

男性を対象とした講座については、平成11年、父親に向けたマタニティカレッジの講師派遣から出発した。その後、両親を対象とした講座も企画・実施し、育児のノウハウだけでなく、育児参画の意識醸成を図るために、父親たちの意見を聞き、先輩パパや妻の同席、お茶・お菓子で和やかな雰囲気づくり等の試みを行ってきた。先輩パパが自分の体験を語り、どこかの「立派な人」ではなく、地域で暮らす普通の男性の体験を聞くことで、参加者に自分のできることを考えてもらえるようにした。講座の開催を通して、父親も子育てに関わりたいたいと思っており、悩みもたくさんあるが、地域での学習の場にはなかなか出てこないということがわかってきたため、企業への出前講座を実施しようと考えた。

中小企業がほとんどの上越市での企業講座の実現に向けては、どのように進めていけばよいのかわからず、日ごろの活動を通して知り合う関係者に「やりたいけどどうしたらいい？」と言いつづけていた。最初は「企業での子育て講座」に対してなかなか理解が得られなかったが、マミーズ・ネットの父親に向けての活動の新聞記事を見たある企業の相談役と出会い、協力を得ることができた。そして、ロータリークラブでその必要性を説明する機会を得た。それをきっかけに、平成18年2月に第1回目の講座を実施することになった。内容については、企業の希望に沿って個別に組み立てているが、企業がやってみたくなる講座とは何かを考え、受講することの企業や社員にとっての利点や、コミュニケーション等の受講内容を職場で活かすことができる点等を説明したり、統計データを使った現状についての客観的な説明等を盛り込んだりして工夫をしている。また、複数のスタッフで出前に行き、ファシリテーターは参加者の様子をよく見て必要に応じた学習支援をしていくようにしている。

市の子育て支援課と協働

企業への出前講座を計画中であった上越市子育て支援課に働きかけ、平成19年からは協働で企業講座を行っている。費用は市が負担し、企業側は無料で受講でき、マミーズ・ネットには市から講師料が支払われる(マミーズ・ネットが単独で行うものは現在も有料)。市の職員が一緒に行き、市の施策を説明している。受講者にとっては市の職員から直接説明を受けられる、市の職員にとっては市民の声を直接聞ける場になっている。実施企業を探すのは市とマミーズ・ネットで行っているが、今のところ実現にこぎつけているのはマミーズ・ネットが探してきた企業のみとなっている。

（３）地域の課題・ニーズ

上越市には中小企業が多く、民間で女性が育児休暇を取ることにすらいまだにめずらしい状況にある。そのような状況のなかで、子育ては母親だけの問題ではないことを学ぶ場、子育てへの周囲の理解を深める場が必要だと考えている。また、企業体が小さいため、管理職だけを集めての講座よりも従業員と管理職がともに参加する場合が高く、ワーク・ライフ・バランスの必要性等を伝える場とも考えている。

（４）評価・参加者の受講後の変化

出前講座を企画する当初は、「父親」の受講が主となると考えていたが、実際は社員全員で受講する企業もあり、雇用形態、年齢等、多様な社員と一緒に学ぶ機会を提供できた。これにより、例えば、小さい子どもを育てる A さんを、社員全体で支えることについての意義・必要性を理解してもらうきっかけをつくることができています。

受講した男性たちは、受講中に表情が和らぎ、「このような講座は初めて」「楽しかった」「子どもに対する接し方は他の人への接し方にも通じるものがあった」等の声があり好評である。

3. 実施の体制・連携等

（１）他機関・団体との連携

企業への出前講座の実現に向けては、日頃の活動で培った地域のネットワークを活かし、また新たな企業関係者とのネットワークを広げ、ロータリークラブでの説明をきっかけに実施企業を少しずつ開拓している。

子育て支援の活動を開始する当初より、男女共同参画推進に向けた活動を行う地域の女性団体との交流があり、一緒にイベントを行ったりしていた。県内の子育て関連の NPO 法人のネットワークづくりも進めており、平成 20 年 12 月に開催された「子育てひろば研修セミナー上越開催」（財団法人こども未来財団・NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会主催）の際には、地域の団体に声をかけ、実行委員会を組織して地域の連携を深めた。

マミーズ・ネットには、NPO 中間支援センターや市役所、男女共同参画関連施設等で働いているもしくは働いた経験のあるメンバーが複数おり、それらの機関との連携や、メンバーの職場で培った経験、力量等を活かした事業の展開を効果的に行うことができています。

（２）行政との連携・支援

行政からさまざまな事業を受託・協働

文部科学省、内閣府、上越市からの受託事業等、行政と連携しながら活動を行っている。平成 12～16 年度には、マミーズ・ネットを中心に地域で実行委員会を組織し、文部科学省「生涯にわたる男女共同参画推進事業」「男女の家庭・地域生活充実支援事業」を受託。平成 18 年度には、内閣府「地域活性化事例研究事業」のモデル事業として上越市と協働で事業を実施。平成 19 年度からは上越市よりこどもセンターの運営を受託している。また、平成 20 年度には、独立行政法人国立女性教育会館と協働で「家庭教育・次世代育成地域協働フォーラム in 上越：ワーク・ライフ・

バランス時代の『待つ』から『届ける』子育て支援」を実施した。企業への出前講座についても、平成 19 年から上越市子育て支援課と協働で実施をしている。

行政との連携の際には、頼ったり求めたりするだけの関係にならないように心がけている。民間の団体として、0～3 歳児の親たちの思い・声を伝えることができるという強みを活かして自分たちが持っている情報の発信や力の発揮を行っていきたいと考えている。

現在のところ、経費として必要な人件費や事業の実施にかかる諸費についての行政の理解は十分とはいえず、相応の受託金額を獲得していくための交渉は、連携の際の今後の課題といえる。

4. 企画・運営の視点について

(1) 男女共同参画の視点

子育て中の母親たちが中心となった子育て支援団体であるが、活動当初より男女共同参画の推進を目的として活動を行っている。女性が自分を大切にしながら子育てできる環境を整え、子育て中の人たちが社会参画する支援を行うには、地域で支え合っている社会をめざすことにより男女共同参画社会を推進していくことが必要という考えから、企業や男性を含めた地域全体に向けた働きかけを行っている。

企業講座等では、子育てを母親の役割としないことや、「思春期になってからが父親の出番」「社会性を教えるのは父親、愛情は母」といった思い込みを持っていると実は子育てが大変だといったメッセージを、クイズやエピソードに含ませたりしながら伝えている。

(2) 家事・育児参画と地域参画の関連

家事・育児参画の講座を多く行っているが、シニア講座や「おやじパワー出陣」は男性の地域参画をねらいとして実施した。家事・育児を「助ける」のではなく本気でやれば、自然に地域とつながっていくと考えている。講座等で地域参画・ネットワーク化をねらいとする際は、いわゆる「男性役割」の範囲内での話にならないように気をつける必要があると考えている。「おやじの会」で父親だけがお酒を飲んで盛り上がり過ぎて母子が家で待っているだけだとすれば、職場の飲み会で父親が不在になると大差なくなってしまうためだ。また、アウトドア、力仕事等は、男性が抵抗なく参加するための手段としてはいいと考えるが、そこで男性役割だけを担う、または期待されて終わってしまうのは問題だと思っている。

5. 今後に向けた展望・課題

(1) 男性を対象とした今後の取り組み

企業講座を引き続き行っていきたい。子育てだけでなく、男女共同参画やワーク・ライフ バランスについても、企業でさらに伝えていきたい。

ヒアリングを終えて

子育て支援の団体にはめずらしく「男女共同参画社会の推進」を事業の柱の1つにして活動を行うマミーズ・ネット。男性を対象とした講座は、父親を対象とした講座の実施から始まり、地域の学習の場には出てこない男性、さらに多くの男性への意識醸成を図るために企業への出前講座の実施を考え、人とのつながりのなかで実現させている。子育ては母親一人で抱えることではないことを当事者の視点で伝え、中小企業が多い地域の実情にあわせて内容等を工夫して継続する取り組みは、男性を対象としたアウトリーチの子育て支援講座のモデルとなる事例といえるであろう。

(飯島 絵理)

NPO 法人マミーズ・ネット 企業への出前講座 ちらし

子育てしやすい思いやりのある 職場環境をめざして

企業講座を受けてみませんか？

“企業”が子育て支援をすると得られるものは・・・

- ・ 家庭、育児に不安のない父親は会社ではよく仕事ができ、会社の業績アップに寄与することができる。
 - ・ 会社が父親・母親に育児教育の機会を与えることは社会貢献につながる。
- なぜなら今は・・・
- ・ 働く父親は概して子どもの教育に時間を割くことができず、働いている母親も祖父母に任せざるをえない事が多い。
 - ・ たとえ父親が子どもの教育に関心があったとしても育児情報に接する機会は非常に少ない。
 - ・ 母親も妊娠時あるいは出産時に育児教育を受けることがあるが、すべての母親が安心できる情報を得てはいないこともある。

企業講座概要

所要時間 1 時間（企業内研修として時間をいただいていることが多いです）

内容（例） 「忙しい親でも大丈夫！家族とのコミュニケーション力をアップしよう」

1. 「子育て」の現状は？クイズに答えてみよう
2. いざというときの子どもの心の変化をつかむには
3. 体験！「ほめられる」、「話の聞き方」
4. 困ったときは（上越市の子育て支援情報など）
5. 参考図書、HP

※あくまでこれは1例です。内容はご希望に応じて変更できます。

金 額 2 万円

※ NPO法人マミーズ・ネットの運営資金の一部にさせていただきます。
平成 18 年度支出総額 220 万円（委託事業を除く）

（マミーズ・ネットについては裏面をご覧ください）

＜講座等を実施する取り組み＞

男女共同参画を「広める講座」とともに 「寄り添う講座」「深める講座」を模索

静岡市女性会館「アイセル 21」

(指定管理者：特定非営利活動法人男女共同参画フォーラムしずおか)

【取り組みの概要】

「静岡市女性会館」は静岡市中央公民館との複合施設として、平成4年に開館。平成19年度からは指定管理者制度を導入。審査を経て「特定非営利活動法人男女共同参画フォーラムしずおか」が指定管理者となった。男女共同参画社会実現のための拠点施設として各種講座等を活発に行っている。指定管理者制度導入の1年目は「静岡市女性会館」があることを知ってもらい、男女共同参画を「広める講座」を積極的に行った。その結果、講座の応募者総数は年間2,500人を超え、講座受講の新規来館者も250人を超えた。2年目の現在も定員割れなしの講座が続いているが、女性会館で主催する意味を問い直し、困難を抱えた人に届く講座を模索している。

1. 施設・機関・団体の概要

(1) 体制、事業方針等

人材育成講座から生まれた団体が管理・運営

「静岡市女性会館」は静岡市内の女性団体、女性グループの長年の要望に応え、平成4年に開館。静岡市中央公民館（葵生涯学習センターに改称）との複合施設「アイセル 21」として市民に親しまれ、年間利用者数は約35万人である。

平成17年から「静岡市女性会館」の一部業務（講座開設、図書貸出）を「特定非営利活動法人男女共同参画フォーラムしずおか」が受託。平成19年4月から指定管理者制度が導入されることになり、業務委託の2年間を経てふたたび応募した「特定非営利活動法人男女共同参画フォーラムしずおか」が選定され、管理・運営を担う。

「特定非営利活動法人男女共同参画フォーラムしずおか」は「静岡市女性会館」のインキュベータ（孵卵器）ともいうべき人材育成講座「アイセル女性カレッジ」（平成7年開講）の1期から6期までの修了生から生まれた団体である。現在、会館で働く職員11人のうち、「アイセル女性カレッジ」修了生は6人。利用者、当事者の視点での管理・運営を心掛けている。

11人の勤務形態は常勤9人、パート2人である。常勤9人のうち4人は、平成20年度から導入した短時間正規職員として勤務。女性が働きやすい職場環境づくりもめざしている。講座の企画運営などに関わるスタッフは6人。

結果ではなく成果が求められる講座の実施

「静岡市男女共同参画推進条例」を受けて策定された「静岡市男女共同参画行動計画」の施策に基づき事業が行われている。「静岡市女性会館条例」第2条には行われるべき事業が謳われてい

るが、その１番目が「講座、教室等の開設」であることから、最も力を入れて「講座、教室等の開設」に取り組んでいる。

また、「静岡市男女共同参画行動計画」の実施にあたっては、実施した事業がどのような波及効果をもたらしたかを重視している。「静岡市女性会館」でも、結果（アウトプット）でなく成果（アウトカム）が求められている点を常に意識して、「講座、教室等の開設」事業に取り組んでいる。

（２）事業概要

団塊男性には定年後の生き方、若い世代には育児を切り口に講座を企画

「静岡市男女共同参画行動計画」の以下の９つの基本的施策に基づき、年間の講座が企画されている。

- 基本的施策１ 男女共同参画の視点に立った社会制度・慣行の見直し
- 基本的施策２ 男女の人権を尊重する教育や学習の充実と意識改革
- 基本的施策３ 政策・方針決定の場への女性の参画拡大
- 基本的施策４ 地域における男女共同参画の推進
- 基本的施策５ 労働の場における男女共同参画の確立
- 基本的施策６ 家庭生活と職業その他の社会における活動の両立
- 基本的施策７ 世界的視野のもとでの地域社会の一員としての活動支援
- 基本的施策８ 女性に対する暴力の根絶
- 基本的施策９ 生涯を通じた男女の健康支援

男性向け講座は対象が大きく２つに分かれる。団塊の世代以降の男性に向けた講座は主として「基本的施策４ 地域における男女共同参画の推進」「基本的施策６ 家庭生活と職業その他の社会における活動の両立」「基本的施策９ 生涯を通じた男女の健康支援」に基づき、企画している。「男性応援講座」は毎年３回シリーズで行い、定年後の生活自立を切り口に行っている。

若い世代の男性に向けては、主に「基本的施策２ 男女の人権を尊重する教育や学習の充実と意識改革」に基づき企画しているが、女性会館への来館はなかなか得られないことから、大学等への出前講座を行っている。

子育て世代の男性の講座は主として「基本的施策６ 家庭生活と職業その他の社会における活動の両立」に基づき企画している。仕事に追われる世代であり、男性単独での参加はなかなか得られないことから、親子やカップルで参加してもらえらる講座を中心に行っている。

２．講座等のプログラムについて

（１）講座等を実施するに至る背景

気候、交通、経済にも恵まれ、見えにくい課題

静岡市は東京と名古屋のほぼ中間に位置し、富士山を望む景勝地や、温暖な気候でも知られる。人口は７２万８千人。面積の１０％未満しかない平野部に人口の約９８％が集中している。「静岡市女性会館」は静岡駅にも近く、静岡市役所、静岡県庁、県内で最もにぎわいのある呉服町商店街が

駿府公園を挟んで徒歩圏内にある。周辺は古くからの住宅街だが、学校も多く生活にも便利なことから転勤族が多く住む地域でもある。

静岡市は第3次産業に従事する者が多く、支店経済の街ともいわれる。大きな産業はないが、比較的恵まれた経済状況にある。そのため、課題は見え難く、講座を企画するにあたっては見えないニーズを意識的に掘り起こしていく必要がある。



男性のおしゃれ講座

(2) プログラムの趣旨・対象・内容方法

男性に向けた男女共同参画を「広める講座」

男性にも男女共同参画について少しでも理解してもらうことは重要である。そのために「静岡市女性会館」では、男性のみを対象とした「男性応援講座」を行っている。これは団塊世代前後の男性に向けた定年後の生活自立を目標にしたプログラムで、平成17年度に「エセナおおた」の「行列のできる男性講座の作り方」を受講し、そこで学んだことを取り入れている。

平成18年度は連続講座の1回目に地元で発掘した元大手百貨店勤務の男性講師による衣服の管理も含めた男性のおしゃれ講座を実施。大変好評でその後の定番となった。また、市内の大手スーパーマーケットに協力してもらい、実際にスーパーマーケットを会場にして食材の選び方などを学び、買い物から最終回の調理実習につないでいくなどの工夫も好評だった。アンケート結果や担当者の反省点をもとに講座を練り直し、整理収納やメタボ対策など、毎年、少しずつ内容を変化させるようにしている。

表1 男性応援講座

年度	タイトル	時期	曜日・時間帯	内容
平成17年	50歳から考えるわが人生の楽しみ方 ～会社人間から生活人間になるために～	9/3～全3回	土曜日 13:30～16:00 2回目のみ 10:00～14:00	定年後の人生プラン 家事としての料理 先輩たちとの交流
平成18年	ちょいモテオヤジ入門編 素敵にシニアライフ	7/5～全3回	水曜日 13:30～15:30 最終回のみ 10:00～15:00	おしゃれ、衣服の管理 スーパーで食材選び 家事としての料理
平成19年	デキる男の生活プロデュース	7/7～全3回	土曜日 13:30～15:30 最終回のみ 10:00～13:30	おしゃれ、衣服の管理 整理・収納のコツ 簡単なヘルシー料理
平成20年	今年こそ、イイ男宣言！ 自分スタイルを見つける	土曜日 1/17 2/14 3/14 全1回×3	日曜日 10:00～13:00 10:00～12:00 10:00～14:00	健康の話とエクササイズ 珈琲の入れ方 おしゃれ、衣服の管理

子育て世代はカップルで、男性も参加しやすく

若い男性の受講は単独ではなかなか得られないが、カップルでの参加には抵抗が少ない。平成 19 年度に子育て中の若いスタッフが発案した講座「赤ちゃんへのプレゼント ママの笑顔 パパと過ごす時間」は 6 か月以上 1 歳未満の第一子を持つ親子を対象にしたところ、10 組募集に 62 組の応募があった。母親はヨガなどで日頃の育児疲れやストレスを解消、父親は子どもと一緒に手遊びや本の読み聞かせを楽しみながら学ぶという、父親、母親を別会場にした点が特徴である。



カップル向け講座に集まるパパと赤ちゃん

受講した父親からは「いろんな子どもと出会い、楽しかった」「子どもとの遊び方は、おもちゃがなくても充分やれるとわかった」「絵本を読むときの声のトーンが勉強になった」「妻の苦勞がわかった」などの感想が寄せられた。

平成 20 年度はタイトルを「新米パパと新米ママのハッピータイム」に改めて、5 月、10 月、2 月と 3 回行った。子どもの月齢で対象が変わるので、同じ人の申し込みはない。毎回 2～4 倍の申し込みがあり、父親の大半は新規来館者である。

その他、育休中や育休取得を考えているカップルに向けた「安藤パパがやってくる！働くふたりのハッピーバランス」や不妊に悩むカップルに向けた「不妊治療 私らしい選択のために」などの講座はカップルでの参加を呼び掛けており、実際にカップルでの参加が多かった。

表 2 カップルでの参加を促す講座

年度	タイトル	対象
平成 19 年度	安藤パパがやってくる！ 働くふたりのハッピーバランス	育児と仕事の両立に関心のある男女
	赤ちゃんへのプレゼント ママの笑顔 パパと過ごす時間	6 か月から 1 歳未満の第一子を持つ両親と子ども
	協働講座 ゲーとパーで簡単！ベビーサイン	満 4 か月から 1 歳未満の子どもを持つ親
平成 20 年度	新米パパと新米ママのハッピータイム	6 か月から 1 歳未満の第一子を持つ両親と子ども
	不妊治療 わたらしい選択のために	第一子不妊に悩む男女
	協働講座 ダウン症児のためのベビーマッサージ パパも一緒にハッピータイム	1 か月から 1 歳半のダウン症の子どもと両親
	こころを楽に 私らしい子育て	子どもの発達に心配をもつ未就学児の保護者、 または療育や支援に携わる人

その他にも男性限定ではないが、男性の参加も促す講座をさまざまに展開し、概ね 2～3 割程度の男性の参加を得ている（表 3 参照）。

表 3 男性の参加も促す講座

年度	タイトル	対象
平成 19 年度	卒婚のススメ	概ね 40、50 歳代の男女
	弱者のための避難所シミュレーション	災害時の避難生活に関心のある人
	親こそ学ぼう 子どもの携帯事情	思春期の子どもを持つ親、教育関係者
	協働講座 傾聴入門「聴く」から始まる人間関係	傾聴に関心のある人
	だまされないための暮らしのトラブル回避術	高齢者を見守る立場にある人や悪徳商法に関心のある男女
平成 20 年度	知って得する 年金の裏ワザ	団塊世代の男女
	逆転の発想 中小企業こそワーク・ライフ・バランス	中小企業事業所の経営者や人事・労務担当者
	アラフォー世代版 おひとり様の老後	おひとり様の老後に関心のある人
	大日向雅美さんに学ぶ 子育て支援	子育て支援をしている人、してみたい人
	お墓から学ぶ 家族社会学	お墓や家族社会学に関心のある人
	協働講座 NPO であなたが変わる、社会が変わる	まちづくり、NPO に関心のある人

（３）企画・運営の工夫・特色

「広める講座」で講座申し込みは増加

指定管理者制度導入の 1 年目の平成 19 年度は、「静岡市女性会館」が静岡市にあることをより多くの市民に知ってもらうための親しみやすい「広める講座」を中心に展開した。平成 19 年度に行った講座は 21 ジャンル 65 回。1 度も募集に定員割れはなかった。HP からの申し込みも可能にし、これまで多かった先着順の受付から、定員を超える場合は抽選にする受付も増やしていった。各講座の対象もできるだけ絞った。講座のタイトル、ちらしにも工夫し、「私が呼ばれている」と思ってもらえる企画ときめ細やかな心遣いのある運営を心掛けた。

届けたい人に届く講座を

若い男性にこそ、男女共同参画社会に関心をもってもらいたい。大学生に向けた講演は出前というかたちをとっている。市内にある大学や短大へ「静岡市女性会館」から出向き、女子学生と一緒に男子学生にも「デート DV」をテーマにした講座を聴いてもらうようにしている。平成 18 年度は私大の教育学部、平成 20 年度は看護師や福祉士を目指す公立短期大学の学生に向けて講

演を行った。平成 20 年度は話題となった人気テレビドラマ「ラストフレンズ」を教材にしたところ、身近なところに DV があることをよく理解してもらえた。アンケート結果から男子学生も自分のこととして問題意識を持つきっかけとなっていることがうかがえた。学生への出前講座は今後も継続したい事業である。

子育て支援は父親にこそ必要

子育て支援というと母親支援と思われることが多いが、「静岡市女性会館」では同じように父親支援もしたいと考え、できる限り、父親と母親と一緒に参加できる講座を企画している。前述の講座「赤ちゃんへのプレゼント ママの笑顔 パパと過ごす時間」は母親と父親と一緒に来館してもらい、受講する講座を分けた点が、いずれからも好評だった。同じ館内でなら母親も父親も安心して別々に過ごせる。一緒だと妻任せになりがちな父親も、同じような月齢の父子同士、安心して子どもと向き合う様子が見られた。

平成 19 年度に行った協働講座「グーとパーで簡単！ベビーサイン」でも「パパも一緒にじっくりコース」を設けたところ、10 組募集に対し 71 組の応募があった。

参加されたうちの 1 組にダウン症のお子さんの親子があったが、事前に把握できておらず十分な対応ができなかった。健康な子どもばかりでなく、障がいを持った子どもを子育てしている親の思いに至っていなかったことが大きな反省となった。

困難を抱えた人に寄り添う講座を

こうした反省からも平成 20 年度は「広める講座」を充実させる一方で、課題や悩みを抱えている人に届く講座の企画を心掛けた。生涯学習センターやカルチャーセンターの講座との違いは何か、本来、女性会館で行うべき講座とは何かを問い直し、不妊に悩むカップル、障がいを持つ子どもを育てる親、45 歳以下のシングル女性に向けた講座等を企画、実施した。いずれも定員を超える応募があり、受講後のアンケートの満足度も高かった。

(4) 評価・参加者の受講後の変化

実施した講座の評価

指定管理者となって 2 年間が経とうとしているが、男性向け講座は少なく、まだ、具体的に受講者の変化を読み取るところまではしていない。

講座の定員に対する応募者、受入人数、実際に出席した人数は必ず確認し、記録。1 年に 1 度発行する事業報告書には一覧表を掲載し公表している。受講者アンケートでは毎回必ず、満足度調査をしている。「満足」3 点、「まあ満足」2 点、「やや不満」1 点、「不満」0 点と数値化し、一般に公表はしないものの男女共同参画課、女性会館運営協議会等には報告している。

事業報告書には、講座の目的、内容、応募率、定着率、満足度評価を必ず記入。その他に担当者が講座実施において「工夫してうまくいったこと」「予想外にうまくいったこととその原因」「予想外にうまくいかなかったこととその原因」「次の機会に向けてのヒント」を簡潔に記入して、申し送っている。

（５）課題・改善が必要と思われる事柄

意識啓発にとどまる団塊世代向け男性講座

「男性応援講座」は、これまでの３年をふり返り、平成 20 年度は募集方法や内容を改めた。申込みは定員を超えても連続 3 回出席できない男性が多いことから、毎月 1 回、各回ごとの申し込みにしたところ、3 回すべて申し込んだ男性もあり、欠席も少なくなった。内容も新たにメタボ対策などの健康の話とエクササイズを組み込んだ。また、調理実習はこれまで必ず入れてきたが、1 回の調理実習だけでは家事として定着しないことを把握し、もっと簡単な軽食とコーヒーの淹れ方に変更。会場を近隣の珈琲工房に変更し、オーナーに講師をお願いした。

講座の中では自立度チェックシートを配布し、受講の男性たちにチェックしてもらい、家庭や地域での男女共同参画の大切さを理解してもらえるように工夫はしている。こうした取り組みで、受講申し込みは増えているが、意識啓発にとどまっている点が、今後の課題である。

また、「静岡市女性会館」は複合施設であり、「葵生涯学習センター」でも団塊世代に向けた「そば打ち」「歴史講座」など多くの主催講座が行われている。その他、静岡市では葵区役所内に平成 19 年に「静岡暖快倶楽部」を開設するなど、団塊世代に手厚い支援を行っている。「静岡暖快倶楽部」ではボランティア募集や NPO の情報提供を行い、インターネットなども自由に利用できる。団塊世代の男性の支援が多く行われているなかで、女性会館がやらなくてはならない講座は何かを自問している。

女性会館がすべき子育て支援は何か

子育て世代に向けた講座は応募数、満足度も高く、実績を積み上げてきている。育児不安を解消する講座、育休取得を促す講座など、これまでやってきた講座は今後とも必要である。しかし、子育て支援もさまざまな機関が行っていることを考えると、とりわけ、どの部分、どの対象を支援していくか考えることが重要だ。現段階では「男女がともに育児を担う意識を育てる」部分を意識して講座を組み立てている。

障がいのある子どもの親支援は他の福祉分野でも行われ、自助グループもあるものの、母親支援が中心となっている。母親のためにも父親支援が重要であることを発信していきたい。

父子家庭支援は今後の課題

業務受託時の平成 18 年に、これまで夏休みの時期に行っていた父子の料理教室を継続するか検討。人気は高いものの同じような講座は併設の公民館でも行われていたため、「静岡市女性会館」では父子家庭向けにチャレンジしたが、10 組の募集のところ応募はたった 1 組だった。延期の連絡を入れ、仕切りなおした苦い経験がある。

社会福祉協議会が行う単身親家庭のサマーキャンプにヒアリングに伺ったところ、従来どおり夏休みに予定した「シングルパパと子どものためのおうちで簡単ごはん」は、講座の設定時期などが父子家庭の実態と合っていなかった。夏休みは行事が多く忙しいこと、土曜日より日曜の方が出掛けやすいこと、静岡市内では親との同居や親戚の助けを受けている家庭も多く父子だけで暮らしている人が少ないことがわかった。父子家庭グループ「おやじの会」や保育園にも協力を要請し、翌年 2 月に仕切りなおした。5 組の参加と少なかったものの参加者には満足してもらえた。

が、広報なども難しく反省点の多い講座となった。しかし、父子家庭の置かれている状況もわかったので、今後はさらに内容等を検討し、再チャレンジしてみたい。

(6) 今までの課題改善に向けた取り組み・工夫

障がいを持つ子どもの父親支援

障がいを持った子どもを子育てしている親を支援できる講座を開きたいと思っていたところ、20年度の協働講座に応募してきたグループの企画が「ダウン症児のためのベビーマッサージ」だった。メンバーのお子さんがダウン症児で、障がいを持った子どもの親を支援をしたいという当事者の思いが伝わるプレゼンテーションは、外部審査員も交えた審査会で高く評価された。12団体のうちから実施団体に選ばれて、協働で講座を実施することになった。

「ダウン症児のためのベビーマッサージ パパも一緒に！ハッピースマイル」と題して、父親の参加を呼び掛けた。対象は1か月から1歳半のダウン症の子どもを持つ親子とした。姉弟の一時保育もつけたところ、10組募集に市外からの申し込みも含め13組の応募があった。2回連続講座とし、1回目は父親が子どもにマッサージをし、母親は別室で母親同士話し合いの場を持った。2回目は母親が子どもにマッサージし、父親たちは、小学生のダウン症児を持つ男性から体験談を聴いた。その後、参加した父親同士、話し合いの場を持った。ダウン症児への思いにとどまらず、妻への思い、他の姉弟への思いなど率直に話し合い、アドバイスし合う姿が見られた。同じ立場の家族との交流によって、安心して話し合え、「心の整理ができた」「今後の見通しが得られた」との感想や主催者に感謝の言葉が寄せられた。

「赤ちゃんへのプレゼント ママの笑顔 パパと過ごす時間」で得られた親子で来館してもらい、「父親と母親は別々に受講」というノウハウが、この講座で活かされた。このように講座の経験を積み重ねることで、蓄積されたノウハウを活かして、「広める講座」と同時に「寄り添う講座」「深める講座」が行っていきけるといい。

3. 実施の体制・連携等

(1) 他機関・団体との連携

積極的に他団体との連携

「静岡市女性会館」の指定管理者「非営利特定法人男女共同参画フォーラムしずおか」は、まだ設立4年目である。ヌエックの研修やフォーラムに参加することで、多くの学びを得ている。他団体の取り組みを知り、マインド面、スキル面等、得ることが多い。学ぶだけで受身になってしまわないよう、毎年のヌエックの夏のフォーラムには、ワークショップを出すことを心掛けている。平成19年度には協働講座のつくり方について、20年度には図書コーナー発の講座を開催した。

ヌエックで出会ったNPOとネットワークができ、平成20年3月には「静岡市女性会館」で「男女共同参画に関わるNPOと指定管理者制度」をテーマに初の合同研修を行った。秋には盛岡で2回目の合同研修を行い、今後も継続の予定である。施設運営や講座企画などの情報交換など、得ることが多い。

（２） 行政等との連携・支援

構築しつつある県内行政とのネットワーク

「静岡市女性会館」に指定管理者制度が導入されるまでの経緯が、段階を経て適切に行われてきたことから担当の男女共同参画課と指定管理者の関係は良好である。平成 20 年 1 月には内閣府の「男女共同参画基本問題専門調査会」のヒアリングに男女共同参画課職員とともに出席し、そこでも市と指定管理者が役割分担しながら男女共同参画社会の実現に向けて取り組んでいることを報告できた。

静岡市は県庁所在地でもあり、県の男女共同参画室、男女共同参画推進センター「あざれあ」も徒歩圏内にある。県の男女共同参画室や男女共同参画推進センター「あざれあ」主催の男女共同参画に関わる職員研修や主催講座等には積極的に参加している。また、「静岡市女性会館」で行う大きな催しは必ず案内し、県の理事、室長はじめ職員にも快く出席していただいている。

県内市町の男女共同参画担当者からも講座の企画についての相談、講師依頼を受けつつあり、県内行政とのネットワークも構築されつつある。

4. 企画・運営の視点について

（１）男女共同参画の視点

「静岡市男女共同参画行動計画」の 9 つの基本的施策に基づき、年間の講座が企画されている。平成 16 年度から 5 年間の期間が定められた第一次行動計画が終了するため、平成 21 年度は第二次行動計画にあわせた事業、講座の見直しが必要である。

男女共同参画について理解や認識は、世代によって差が見られる。根拠のない誤解を解き、従来の性別役割分担意識などの固定観念を崩していくことで、多様性を認め合いお互いを尊重できる社会をつくることの大切さを、講座を通して伝えることを心掛けたい。

（２）家事・育児参画と地域参画の視点

平成 21 年度から 26 年度までの 6 年間を対象とする第二次「静岡市男女共同参画行動計画」が、平成 21 年 4 月 1 日より施行される。その重点施策の 1 番目に「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）」が打ち出される。子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できるよう、環境の整備を推進することが求められる。

「静岡市女性会館」でも、従来からの男性向け講座を充実させるとともに、意識啓発や本人の生活自立だけにとどまらず、女性とともに男性が子育てや介護も担う視点での講座を行いたい。

（３）学習の成果の活動への反映

「静岡市女性会館」では講座受講後に自主的に活動を続けるグループを「育成団体」として認定し、1 年間に限って集会室を無料で貸し出すなどの支援をしている。また、それ以降も登録し「協力団体」となると、半額で集会室を貸し出し、活動発表の場も提供している。「育成団体」や「協

力団体」の中には前述の協働講座に応募し、審査を経て実際に講座を行った団体もある。

「協力団体」の中には男性会員のみの「メンズクッキングクラブ」と「男の料理塾」があり、定期的に活動している。先ごろ、「メンズクッキングクラブ」から外部から講師を呼んで健康講座を実施したいと相談があり、内容、ちらしづくり、広報等のアドバイスをし、講座「知って得する健康の話」が実現した。このような自主的な取り組みには今後も積極的に支援をしたい。

5. 今後に向けた展望・課題

（１）今後実施予定の男性を対象とした事業

団塊世代に向けた「男性応援講座」、子育て世代に向けた「赤ちゃんへのプレゼント ママの笑顔 パパと過ごす時間」、学生に向けた出前講座は来年度も継続の予定である。

（２）今後の事業の方向性

意識啓発の「広める講座」と同時に「寄り添う講座」「深める講座」を行いたい。障がいを持つ子どもを育てている父親、父子家庭の父親など、困難を抱えた人に「寄り添う講座」も定員割れを恐れず実施していきたい。

また、座学だけでなくワークショップや実習を取り入れた連続講座も積極的に行っていきたい。課題は誰かに解決してもらうものでなく、自ら解決していく力、共助の力をつけることが大切である。講座を受講することによって「課題を解決する力」がつけられるプログラムを意識して考えていきたい。

（３）今後に向けた課題

「男女共同参画社会を実現するための拠点施設」として地域の信頼を得ていくためには、まず、多くの男性も含む市民に「静岡市女性会館」のあることを知ってもらう、来てもらうための「広める講座」が大事なことは言うまでもない。しかし、大勢の来館者を得ることはあくまでも「結果」にすぎない。今後は「静岡市女性会館」の講座受講で得られた「成果」を見えるかたちにして情報発信していくことが重要である。それができて初めて存在意義がある。

そのためには、講座受講者がリピーターとしてただ滞留するのではないしくみづくりが重要だ。男性に限らず、講座に来てくださった市民が単なる講座の消費者、施設の通過者とならないための次の仕掛け、しくみを考えたい。

講座実績を積み重ねることと同時に、積極的に会館の外に出ていろいろな角度から客観的に事業全体を見る力をつけることが重要である。

（執筆 松下 光恵）

取り組みを読んで

静岡市女性会館では、「結果(アウトプット)ではなく成果(アウトカム)が求められている点を常に意識して」事業の企画、実施、評価を行い、男女共同参画に関わるさまざまな魅力ある事業を行っている。男性を対象とした講座についても、団塊世代前後の男性を対象とした「男性応援講座」や子育て世代のカップルを対象とした講座等を、男女共同参画関連施設でこれらを実施する意義を問いつつ試行錯誤し「模索」しており、とても参考になる。また、父子家庭やダウン症の子どもをもつ父親等、多様な家族、困難を抱える父親の支援に着目している点は、男女共同参画関連施設で行う講座の中では特徴的である。

現在、団塊世代を対象とした講座や子育て中の父親を対象とした講座は、男女共同参画関連施設だけでなく、さまざまな機関で類似した内容のものが実施されており、静岡市女性会館において「自問」し「模索」するように、男女共同参画関連施設が行う意義・必要性についてさらに検討し、明確にしていく必要がある。その点において、静岡市女性会館の「男女がともに育児を担う意識を育てる」「母親のためにも父親支援が重要」「講座に来てくださった市民が単なる講座の消費者、施設の通過者とならないための次の仕掛け、しくみを考えたい」といった視点はとても重要で、これらが示唆するものは多いのではないだろうか。

(飯島 絵理)

男性応援講座

今年こそ、イイ男宣言!

自分スタイルを見つける!



十分のカラダとじっくり向き合う。
癒しの時間をつくる。
おしゃべりして旅に出る。
今年は少しちがう自分を発見!

**1回だけの
受講も歓迎!**

対 象: おおむね 50 歳～65 歳の男性 各 15 名
(応募者多数の場合は抽選)

	日 時	タイトル・講 師	内 容	開 講 日	場 所
Vol.1	H.21 1/17 (土) 13:30～15:30	「男のカラダと向き合う」 講師: 山崎 孝子	簡単にエクササイズと パンプスの正しい着方を知って、 健康で快適なカラダを目指します。 受講料: 無料	平成 20 年 12 月 19 日 (土) 午後 2 時～5 時	アイセル 21 2F フィットネス ルーム
Vol.2	H.21 2/14 (土) 14:00～15:30	「こだわり趣味工房」 講師: 山崎 孝子	アイセル 21 近くの人気のお店で 美味しいコーヒーの 淹れ方を学びます。 受講料: 300 円 (材料代)	平成 21 年 1 月 28 日 (水) 午後 3 時～5 時	趣味工房 イカ (アイセル 21 隣)
Vol.3	H.21 3/14 (土) 13:30～15:30	「おしゃべり旅支度」 講師: 山崎 孝子	旅のわいわい・ドキドキや 上手な衣類の 扱い方を学びます。 受講料: 無料	平成 21 年 2 月 25 日 (水) 午後 3 時～5 時	アイセル 21 4F 研修室

申込み方法: 各締切日までに、電話かホームページでお申し込み下さい。応募者多数の場合は抽選になります。
申 込 み 先: 静岡市女性会館 Tel. 054-248-7330 平日の 17 時までお電話ください。
ホームページ: <http://aisel21.jp>

・会場アクセス アイセル 21 静岡市東区東深町 3-18 TEL. 054-248-7330

交通のご案内

バ ス: 市立病院前駅「アイセル 21」下車
徒歩 5 分

電 車: 東区駅北口より 30 分
新静岡センターより 20 分
新静岡駅より 15 分

駐車場: 会館に限りがありますので、できるだけ
公共交通機関をご利用ください。




主催: 静岡市女性会館

静岡市女性会館協賛講座

ダウン症児のためのベビー・マッサージ

19 時 いっしょに **ハッピースマイル**

他のママは赤ちゃんを
どうやって遊んで
いるだろう。



家族同士で
交流してみたいね。

ベビー・マッサージって
気持ちよさそう。

みんなどんな悩みも
持っているのかな。

家族をわって、ニコニコ楽しくあそぼう!

**参加費
無料**

	日 時	内 容
1 回目	10 月 26 日 (日) 10 時～12 時	(ママ) 別室にて、ママ同士でハンドマッサージ (パパ) 赤ちゃんにベビー・マッサージ
2 回目	11 月 9 日 (日) 10 時～12 時	(ママ) 赤ちゃんにベビー・マッサージ (パパ) 別室にて、ダウン症児を持つ先輩パパから子育てアドバイス

◇会 場 静岡市女性会館(アイセル 21) 1 階 子ども室ほか
◇対 象 1 ヶ月から 1 歳半くらいのダウン症のお子さんとその両親
◇定 員 10 組程度(申込順)
◇一時保育 きょうだいの一時保育あり(原則 1 歳未満未就学児。その他の場合はお問い合わせください。要予約。無料)
◇申込方法 9 月 25 日 (木) 12 時 30 分より受付開始。お電話でお申込みください。TEL. 054-248-7330

主催: ハッピースマイル・静岡市女性会館

新米パパの

パパは赤ちゃんの
最高のプレゼント

新米ママの

ママは赤ちゃんの
最高のプレゼント

ハッピータイム

パパと赤ちゃん

遊びたいけど、なかなか時間とれないパパ。おしゃべりや絵本で赤ちゃんとの時間を過ごして、お互い楽しく過ごそう。

会場: 3 階 3F 集客室
講師: 大川 英子 さん

ママ

日ごろ育児でがんばっているママ! 1 ヶ月の睡眠法や授乳法と育児のストレス、ママの笑顔は赤ちゃんへの最高のプレゼント!

会場: 2 階 2F 集客室
講師: 藤田 美加 さん

2/28 Sat.
10:00～12:00

- 日 時 平成 21 年 2 月 28 日 (土) 10:00～12:00
- 対 象 受講時 6 ヶ月～12 ヶ月の第 1 子と両親
※30 名までの申し込みを優先します。
- 定 員 15 組
- 申 込 2 月 2 日 (月) 午後 5 時必着で往復に付き、
または、ホームページからお申込みください。
(詳しくはチラシをご覧ください。)
- 申込先 静岡市女性会館
〒420-0805 静岡市東区東深町 3-18
ホームページ <http://aisel21.jp>

主催: 静岡市女性会館

静岡市女性会館は、平成 18 年 4 月より指定管理者「NPO 法人男女共同参画フォーラムしずおか」が運営しています。

Ⅱ 男性の次世代育成支援活動への参画とその促進 取り組み事例

(3) 地域のしくみづくり

<地域のしくみづくり>

県内 5 つの生涯学習センターを通して、 地域ごとに父親のネットワーク化を支援

茨城県教育庁生涯学習課

茨城県水戸生涯学習センター

【取り組みの概要】

茨城県では、県内にある 5 つの生涯学習センターを通して「地域を育てるおやじ力活性化事業」を実施し、父親たちの地域活動とネットワークづくりを支援している。それぞれの生涯学習センターでは、地域で活動しているおやじの会等のグループの代表により実行委員会を組織して、父親たちの企画・運営による子どものための体験活動事業や父親同士の交流事業等を行っている。

1. 機関の概要

（1）体制

茨城県内には、茨城県教育委員会が所管する 5 つの生涯学習センターがある(水戸生涯学習センター、県北生涯学習センター、鹿行生涯学習センター、県南生涯学習センター、県西生涯学習センター)。5 つのセンターのうち、県北生涯学習センターは NPO 法人インパクトが指定管理者、県北生涯学習センター以外の 4 つのセンターは(財)茨城県教育財団が指定管理者として管理運営および事業実施を行っている。

2. 地域のしくみづくり等の内容

（1）取り組みの内容・方法

おやじの会の活動と交流を支援

茨城県教育庁では、平成 15 年度から 17 年度の 3 年間、地域のおやじの会および高校生の地域活動促進のため、「おやじと高校生の地域活動促進事業」を実施し、水戸生涯学習センターで実施する父親たちと高校生の自主企画事業等の支援を行ってきた。平成 18 年度からは、近年各地域に多く結成されている父親たちのグループを対象を絞り、父親の地域活動への理解と参加をさらに促進することを主眼におき、「地域を育てるおやじ力活性化事業」を展開し、県内 5 つの生涯学習センターを会場に事業を行っている。事業の趣旨は次のとおり。

「地域の子どもたちとの関わりが少なくなりがちな父親に対して、青少年育成をはじめとする地域活動への理解と参加促進を図るため、地域で活動が広がりつつある父親たちのグループ、いわゆる『おやじの会』等の、組織化およびネットワーク化を促進するとともに、その活動の活性化を図る。」

本事業では、毎年、各生涯学習センターにおいて、少なくとも年1回開催する子どもたちの体験活動と父親たちの交流の機会を企画・立案・運営している。事業実施にあたっては、各生涯学習センターごとに、おやじの会等の代表で構成する実行委員会を組織して、年3、4回委員会を開催し、各おやじの会等の横のつながりを深めることをめざしている。各生涯学習センターでの活動の様子は、水戸生涯学習センターでとりまとめてA3見開きの報告を作成し、関連機関に配布して啓発活動推進に努めている。予算は毎年、全体で約100万円。各生涯学習センターでの事業実施と水戸生涯学習センターが作成する報告資料の印刷製本費が含まれる。



実行委員会で話し合う父親たち

今回ヒアリング調査を行った水戸生涯学習センターの管内には11市町村があり、平成19年度の調査では36のおやじの会等の団体が登録されている。団体数は市町村によってばらつきがあり、団体がない市町村もある。ある市では、以前中学校が荒れており、それをどうにかしようと父親たちが集まったことが背景にあり、活動が特に盛んになっている。平成20年度事業の実行委員会には、登録団体のうち10団体が参加している。小学校・中学校を拠点として活動しているおやじの会がほとんどだが、地域のその他の男性が集まった団体も1団体ある。

水戸生涯学習センターでは、平成20年度は、年3回開催した実行委員会での企画をもとに、「おやじフォーラム2009」および「おやじフェスタ2009」を実施した。各プログラム内容は次のとおり。

<おやじフォーラム2009>

日時：平成21年2月7日(土)15:00～19:30

会場：三の丸庁舎(旧県庁)3階大講座室

参加者：県民、おやじの会会員、PTA会員、子ども会育成会会員、NPO法人、小中学校教職員、市町村関係職員等 74名参加

内容：(1)フォーラム 15:00～17:00

テーマ「地域の教育力を高めるために」

～おやじの会の活性化と地域との連携をめざして～

コーディネーター	茨城県水戸生涯学習センター所長	池田 馨
パネラー	津田小おやじの会	齋藤 公夫
	舟石川おやじの会	戸川 隆
	田彦中おやじの会	山縣 忠

(2)ワークショップ

バルーンアート	赤塚中おやじの会	出澤 裕之
---------	----------	-------

(3)交流会 17:30～19:30

<おやじフェスタ 2009>

日時：平成 21 年 1 月 11 日(日)10:00～14:00

会場：茨城県水戸生涯学習センター

参加者：県民

内容：(1)親子でトライ（親子でものづくり等の体験活動に挑戦する）

①竹とんぼ ②プラバン¹ ③風船アート ④輪投げ ⑤スポーツチャンバラ

(2)イベント（おやじの会の企画による体験活動を実施する）

①もちつき体験 ②まゆ玉つくり体験

(3)おやじと縁日（縁日やお祭りをイメージした屋台・模擬店を実施する）

①つみれ汁 ②おもち ③焼きそば ④焼き芋 ⑤わたあめ



おやじフォーラム 2009



おやじフォーラム 2009 のワークショップ
バルーンアートを学ぶ



おやじフェスタ 2009：竹とんぼづくり



おやじフェスタ 2009：もちつき体験

¹ オーブントースターで熱を加えると縮む性質をもつプラスチックの工作素材。

（２）企画・実施の工夫・特色

おやじの会の情報を県で収集

平成 18 年度より、父親たちのグループを対象とした事業を実施するにあたり、おやじの会についての情報を、県教育庁生涯学習課において一括して収集している。生涯学習課が県内の 44 市町村に調査を依頼し、市町村は幼稚園・保育園、学校等で活動しているおやじの会の数および各グループの活動内容等を調査する²。調査結果は、各生涯学習センターに配布され、各生涯学習センターにおいて事業を実施する際に、地域の状況の把握、広報、事業協力の依頼の連絡等に活用している。

（３）事業を実施するに至る背景

平成 15～17 年度には、県内で 1 つの会場(水戸生涯学習センター)において、父親と高校生の企画による事業を行っていたが、各地で形成されつつある父親の会等の活動の促進を図るため、また、地域ごとの実態に即した取り組みの支援が行えるように、生涯学習センターごとに事業を実施することとした。地域ごとの実態としては、例えば、県南地区では、つくばエクスプレスの開業に伴い、以前からの住民と新しく越してきた住民との協調を促進していく課題等があり、それぞれの地域の状況に合わせた事業の展開、ネットワークづくりを図ることが必要とされていた背景があった。

（４）取り組みの評価・課題

3 年目となる「地域を育てるおやじ力活性化事業」によって、父親たちのグループの交流が図れ、地域のネットワークが促進されている一方、実行委員会および実行委員会によって企画・運営される子どものための体験活動等の機会だけでは、普段の活動の情報交換が十分ではないと考えている。

水戸生涯学習センターにおいても、おやじフォーラムやおやじフェスタを通して、それぞれに活動していたおやじの会同士のつながりができており、参加者からも好評であった。また、おやじフォーラムではおやじの会同士だけでなく、全管内市町村の小中学校 PTA や生涯学習担当者等も参加するために、多様な関係者の交流ができています。また、フェスタ当日の運営は、実行委員のほか、多くのおやじの会の会員が協力をして盛況を博している。しかし、企画の段階では、実行委員会の委員はそれぞれの団体の活動も忙しく、委員会の回数・時間とも限られているため、センターの事務局が計画の原案を立てている。また、センターとしては、今後おやじの会の父親たちに、日頃の活動を活かし、センターで実施している幼児・小中学生を対象とした「エンジョイ・サタデー」(年間 10 回程度)や、10 月に実施するセンターフェスティバルでのブース出展等に協力してもらい、さらにおやじの会の活動を広めたいと考えている。

² 調査によると、茨城県全体のおやじの会総数は、17 年度 117、18 年度 136、19 年度 159、おやじの会総会員数は 17 年度 5,389 人、18 年度 7,025 人、19 年 7,026 人(ただし、例えば PTA でおやじの会が組織されている場合、PTA 保護者会員数をおやじの会会員数として数えている場合もある)。

3. 実施の体制・連携等

(1) 関連機関・団体との連携

茨城県において実施する「地域を育てるおやじ力活性化事業」は、県教育庁生涯学習課、県所管の指定管理者が管理運営する5つの生涯学習センター、各市町村教育委員会、各地域のおやじの会が、各々次のような役割を持ち連携して行われている。

茨城県教育庁生涯学習課：

事業費用の支出、おやじの会について各市町村への調査依頼・とりまとめ・各生涯学習センターへの配布

水戸生涯学習センターを含む5つの生涯学習センター：

おやじの会代表で構成する実行委員会の設置、父親たちによる子どものための体験活動・父親たちの交流事業の実施

各市町村教育委員会：

各小中学校、幼稚園・保育園等へのおやじの会についての照会・調査集約

各地域のおやじの会：

実行委員会への参画、子どもたちの体験活動・父親たちの交流事業の企画・運営

4. 企画・実施の視点について

(1) 男性の地域参画の必要性

「地域を育てるおやじ力活性化事業」は、父親たちが、地域の子どもたちとの関わりが少なくなりがちであることを踏まえ、父親たちの地域活動への理解と参加促進を図ることをねらいとして、3年間継続して同事業を実施している。

水戸生涯学習センターでは、この事業のほか、退職した人や高齢者を主とするセンターに登録したボランティアによる次世代育成支援活動を促進している。ボランティア登録数は男性のほうが多く、次世代育成活動に参加するのも男性のほうが多い。ボランティアが活動する事業には、毎月第2土曜日に幼児・小中学生を対象として昔遊び、工作、スポーツ、理科教室等を、センターを会場に行う「エンジョイ・サタデー」と、今年度より開始した「市町村学校移動講座」等がある。「市町村学校移動講座」は、市町村教育委員会や小学校との連携を深めるために始めたもので、ボランティアが小学校からの依頼で学校に赴き、昔遊びや絵手紙等の指導に協力する。

(2) 学習と社会活動の循環

生涯学習センターを拠点とした活動のための学習の場の提供

水戸生涯学習センターにおいて普段、学習活動を行っている男性は、退職した人や高齢者が多く、おやじの会で活動している人はほとんど利用していない。「地域を育てるおやじ力活性化事業」による父親たちの団体を対象とした取り組みは、センターにとっては、新たな利用層の拡大といえる。おやじの会の中には、「地域を育てるおやじ力活性化事業」で実施するフォーラムやフェス

ティバルに参加することを会の年間の活動の1つとして位置づけ、団体間の交流や、収集した情報を自分たちの活動に活かすことをねらいとしている団体もあり、この点では、水戸生涯学習センターが拠点となり、父親たちの活動の場と活動のための学習の場を提供しているといえる。

5. 今後に向けた展望・課題

(1) 今後の取り組みと課題

父親たちの普段の活動を活性化する取り組みへ

県では、3年間実施してきた事業の成果と課題を踏まえ、来年度以降も関連する事業を実施し、父親たちの活動の活性化を図っていきたいと考えている。子どものための体験活動の実施だけでなく、各団体の普段の活動についての情報交換や発表の機会を、フェスティバルや実行委員会の実施の際につくり、各地域での日常の活動を活性化させるためのしくみづくりを行っていきたいと考える。例えば、各地域で行っている安全マップづくりについて複数の団体で意見交換ができれば、より広域の安全マップづくりや信号機、街灯の設置の要望等、安全なまちづくりや地域の活性化にもっとつながっていくのではないかと考える。

水戸生涯学習センターにおいても、実行委員会の開催時期を早めて回数を増やし、行事の開催に向けての話し合いだけでなく、日常の活動についての情報交換の機会を増やしたり、より各委員が主体となる委員会にしていく必要性を感じている。平日は仕事が忙しく、休日は各地域での活動に忙しい父親たちの団体同士の有機的なネットワークづくりの支援が課題となっている。

ヒアリングを終えて

県教育庁生涯学習課と、県内5つの生涯学習センターのうちの1つである茨城県水戸生涯学習センターに話をうかがった。生涯学習センターを拠点とし、父親たちの次世代育成支援活動と交流を継続して県が支援するこの取り組みは特徴的である。実行委員会や交流による情報交換の機会、父親たちの地域活動のための学習の場や、ネットワークづくりの場となっている。

担当者の方が話されるように、この事業が3年間継続された結果として、新たな支援の方向性が見えてきている。今までは、子どもを対象としたイベントや父親たちの交流の機会を持つことが主なアウトプットであったが、今後はもっと、父親たちの普段の活動とそのためのネットワークづくりに直接的に関連する支援を行うことが課題として浮かび上がっている。この支援を充実させることによって、父親たちの活動がより深まり、さらなる地域と「おやじ力」の活性化につながるであろう。

(飯島 絵理)

地域住民の力を活かした教育の推進で、 学校・子ども・住民みんなが元気になる地域づくり

新潟市教育委員会地域と学校ふれあい推進課

【取り組みの概要】

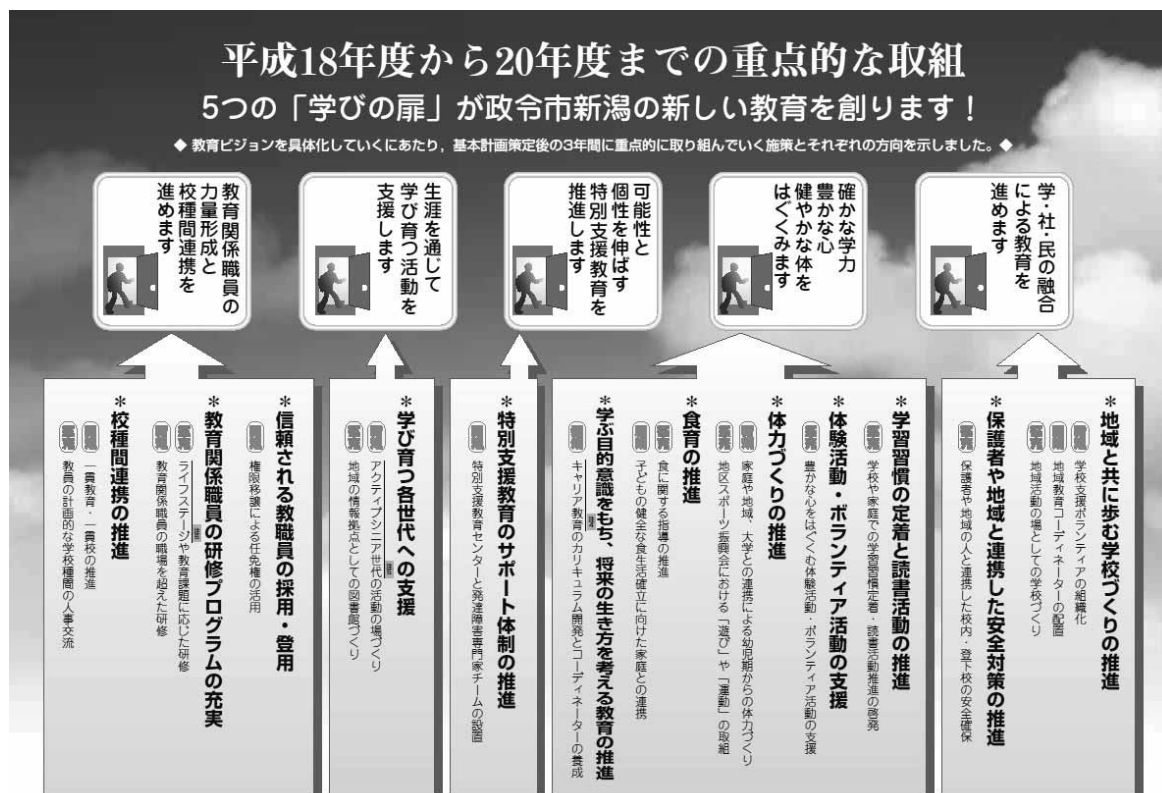
新潟市教育委員会では、地域ぐるみの教育の推進に早くから取り組んでおり、平成19年度からは学・社・民の融合による教育の推進のため「地域と学校ふれあい推進課」を設置して、さらに充実した取り組みを行っている。「地域と学校パートナーシップ事業」では、地域人材から委嘱された地域教育コーディネーターが各学校と地域をつなぐ役割を果たし、退職した男性等を含む多くのボランティアが学校を支援する活動に参加している。事業開始当初は学校側の負担増というマイナス面が懸念される声も多くあったが、取り組みのよさが多くの機会を通して周知されることにより、順調に事業が広がり、地域と学校、子どもみんなが元気になる地域づくりが進んでいる。

1. 機関の概要

(1) 体制、事業方針等

学・社・民の融合による教育の推進

新潟市教育委員会地域と学校ふれあい推進課は、新潟市が平成19年度より政令市となった際に生涯学習課にあった機能を独立させて設置された。課員は平成21年3月現在9名。



「5つの『学びの扉』」(『新潟市教育ビジョン
基本構想・基本計画 概要版』より抜粋)

新潟市では平成 18 年に「新潟市教育ビジョン 基本構想・基本計画」を策定し、新潟市の教育の方向のあり方を明確化している。実施計画の期間は平成 19～26 年度までの 8 年間(前期平成 19～21 年度、後期平成 22～26 年度)とされ、基本計画策定後の 3 年間(平成 18～20 年度)を政令市新潟の教育を方向づける重要な時期と捉え、この間に重点的に取り組んでいく施策とその方向を「5 つの『学びの扉』」として示している。その扉の一つが「学・社・民の融合による教育を進めます」となっており、その主な取り組みとして、地域と学校ふれあい推進課にて「地域と学校パートナーシップ事業」と「ふれあいスクール事業」を行っている。学・社・民の「学」は市立幼稚園・小学校・中学校・高等学校・養護学校、「社」は公民館・図書館等の社会教育施設・スポーツ施設、「民」は地域住民・家庭・地域の諸団体・企業を示している。

2. 地域のしくみづくり等の内容

(1) 取り組みの内容・方法

地域住民が学校を拠点にさまざまな活動を実施

地域の住民が学校に入り子どもの育ちを見守る取り組みとしては、平成 14 年度から「ふれあいスクール事業」を実施している。平成 19 年度からは「地域と学校パートナーシップ事業」が加わり、より充実した事業を行っている。

「ふれあいスクール事業」は、放課後や土曜日の午前中に小学校の施設を活用して、大人が見守り、遊び相手、話し相手になって子どもたちに安全な遊び場を提供する取り組みで、平成 14 年度に旧新潟市において 2 校からスタートした。平成 20 年度には市内 39 校で実施している。PTA、地域（PTA3 役、コミュニティ協議会長、主任児童委員、民生児童委員、スポーツ振興会役員、育成協等）、学校(校長、教頭等)、教育委員会から構成される「ふれあいスクール運営委員会」を組織して、学校ごとに活動内容を決め、保護者・地域住民から選ばれて委嘱された運営主任、運営ボランティア（保護者・地域住民）が実際の活動を運営している。運営主任と運営ボランティアの活動は有償で、運営主任 1,700 円／時間(1 回 2～3



「紙芝居が始まるよ」昼休みに中庭にて



凧づくり

時間の活動)、運営ボランティア 500 円／日となっている。

「地域と学校パートナーシップ事業」は、地域と学校ふれあい推進課が 19 年度に新しくできた時に、パイロット校 8 小学校から始められた。教育についての根底の考え方が学・社・民の融合であり、その具体的な事業として本事業を開始したが、この事業内容は文部科学省が平成 20 年度から実施する学校支援地域本部事業の内容と重なり、委託を受けている。委託を受けたことで、平成 20 年度は当初計画よりも実施校数を増やすことができ、小学校 32 校、中学校 8 校で実施している。本事業では、学校ごとに地域教育コーディネーターを配置している。地域教育コーディネーターは有償で、「ふれあいスクール事業」運営主任と同じく 1,700 円／時間（原則週 4 日、1 日 4 時間。ただし 1 日 8 時間以内で年間総時間数のなかで柔軟に活動できる。）、その他の活動するボランティアは無償となっている。

地域の住民が学校で活動する具体的な内容は、小学校においては、学習支援ボランティア（読書週間読み聞かせ、書道指導、家庭科ミシンかけ、生活科昔あそび体験・野菜苗植え、料理づくり、さわし柿づくり、総合学習地域の宝物）、ふれあい給食、放課後学習、子どもと地域の交流タイム（25 分休み）、行事の参加・支援（全校歩き遠足、登山、持久走記録会、〇〇音頭、文化祭での体験（たいこ・よこ笛、紙漉の絵付け、ペロタクシー体験³、わら細工体験）、環境整備（中庭づくり、あさがおトンネル、菜の花・チューリップロード大作戦）等、幅広い。中学校においてはこの他に、部活動の指導補助や、校外での調査学習の支援、キャリア教育のゲストティーチャー、職場体験受け入れ先の開拓等がある。例えば、月 1 回全校朝会の時にキャリア教育の一環として、地域の人から講話をしてもらっていたり、またある中学校では 2 年生が、今後ジュニアレスキューとして地域の独り暮らしの人たち等のために活動を行えるように、消防署職員から応急救置や避難所での動き等の訓練を受けたりしている。

男性のコーディネーターは約 3 割

「ふれあいスクール事業」の運営主任や「地域と学校パートナーシップ事業」の地域教育コーディネーターとして活動している地域住民のうち、男性は約 3 割いる（旧新潟市内の「ふれあいスクール事業」実施校 39 校において、運営主任 118 名のうち男性は 38 名 (32.2%)、運営ボランティア 1,050 名のうち男性は 249 名 (23.7%)、「地域と学校パートナーシップ事業」実施校 32 小学校 8 中学校において地域教育コーディネーター 51 名のうち男性は 15 名 (29.4%)）。平均年齢は 50 歳くらいで、退職した人や、自営業では理容師、農業、酒屋等を経営している人で、以前 PTA 会長をしていたり町内会で役職を持って活動していた人が多い。コーディネーター等ではないその他のボランティアについても、学校に入って子どもと接したり、遊んだりして活動する男性は、女性より少ない。

男性が多く参加する活動は、学校支援課が担当し、各学校で公募しているパトロールや登下校の見守りを行うセーフティスタッフで、活動を希望する男性も増えている。セーフティスタッフは、オレンジ色のジャンパーと帽子を着用し、子どもの登下校の見守りを行ったり、犬の散歩や買い物途中の“ながらパトロール”を行っている。セーフティスタッフとして一年中休みなく子

³ 環境にやさしい交通手段としてドイツで開発された自転車タクシー。

どもの登下校を見守っている元高校教諭の男性が、小学校の地域教育コーディネーターに推薦されて活動を行っている例もある。

（２）企画・実施の工夫・特色

地域をむすぶ地域教育コーディネーター

現在の地域教育コーディネーター数は、各校 1、2 名で 40 校 51 名（1 校のみ 4 名）。地域教育コーディネーターの主な役割は、学校のニーズを把握し、地域の人材を発掘・活用し、学校と地域住民がともに元気になる企画を実施すること、学校支援ボランティアの組織化、地域の学びの拠点づくり等である。今までは地域の人に学校を支援したいという気持ちはあっても、学校にも地域にも窓口がなかったが、地域教育コーディネーターが橋渡しとなって学校と地域をつなげている。地域活動、教育活動に熱心であったり学校に理解・関心があり信頼の厚い人等から校長が選び、地域と学校ふれあい推進課が委嘱する。学校は、地域教育コーディネーターとボランティアが事務や打ち合わせを行うボランティア室等のスペースを必ず提供することになっている。

地域、学校、子ども、みんなにとって利益のある取り組み

地域の住民が学校に入り、学校と子どもを支援する取り組みを行うことによって、地域と学校の双方が元気になり、地域が活性化する好循環が生まれている。

学校にとっては、地域の人材が授業に入り支援することで、多様な学習活動が可能になり、子どもの理解度が高まるという効果がある。例えば俳句を教える際には、地域の専門家や経験者が入る、家庭科の時間には日常的にミシンを使っていた高齢の地域の人各班について子どもの作業の支援を行う、計算や音読等の際に補助を行うなど。むかしの遊びや地域にある文化の体験活動等も、教員が持っていない知識、技術を伝えてもらうことができ、活動が豊かになる。これらの支援によって子どもの理解度が高まると、教員にとっても効率的に授業を進めることが可能になる。教育活動、学校運営に対する地域の学校理解が深まり、特色ある学校づくりが行いやすくなるという利点もある。

また子どもたちは、ちょっとしたことでほめてもらえることが増えたという。例えば朝のあいさつで、地域の人から「元気な声で、すごくいいあいさつができるんだね」とほめられたり、がんばってるね」、「すごいね」と声をかけられるような積み重ねがたくさんあり、自己有用感や規範意識、コミュニケーション能力等の向上を図る機会が増えた。

地域の住民たちも、人間関係が広がることが喜びとなり、子どもと一緒に活動することが生きがいになっている。また、学校が趣味や特技を活かせる場となり、特に団塊の世代以上の住民にとっては自己実現、社会参加の機会となっている。

子育て環境の孤立化の問題がいわれる中、妊婦や乳幼児をもつ母親が学校に来て小学生と接する機会をつくる取り組みも増えている。例えば、公民館が企画するプレママ学級は学校を会場にして行い、道徳の時間に小学生と妊婦がお互いに話を聞いたりする時間を設けているところがある。また、子育てサークルの母子が集えるプレールームを学校に設けて、小学生が休み時間等と一緒に遊べるようにし、家庭科の授業の中でも交流をする学校もある。子どもにとっては乳幼児に接したり、命について考えたりする機会になり、妊婦や母親にとっては学校や小学生と関わる

ことで孤立感が弱まったり、子どもを持つことの将来的なイメージを持ったりできる。

学校が地域の身近な学びの拠点となり、さまざまな世代の人たちが交流しふれあうことで、地域全体の教育力が高まっている。

次世代育成支援活動を躊躇しがちな男性にも工夫して参加を促す

地域と学校ふれあい推進課では、男女共同参画の視点からみた取り組みの状況について、運営主任・地域教育コーディネーターを対象としたアンケート調査を行った（平成20年10月実施）。この調査では、男性がボランティアに参加しようと思う際に「男だから参加しにくい」と感じた事柄として、次のようなことが挙げられている（運営主任・地域教育コーディネーターが男性ボランティアに尋ねて得た回答）。

活動を始める時に緊張した／若い女性グループが中心のようなどころには参加しにくい／すでに活動している人たちと話が合うのか不安だった／子ども相手が苦手で躊躇した

男性は、女性が多く活動する次世代育成支援の場にボランティアとして参加することを最初は躊躇する場合もあるようである。また、活動参加を促す際には、女性は一人に声をかけると自分の周囲の仲間も連れてくる場合が多いが、男性は同じようにはいかず、多くの人を集めるのには苦勞する傾向があるという。男性に参加を促して活動に引き込むヒントとして、運営主任・地域教育コーディネーターは、実際に試みている次のような事柄を同調査の中で挙げている。

子どもや孫と一緒に参加するように誘う／趣味の指導を依頼することをきっかけにする／説得する（相手の関心に合わせて楽しさをアピール、やる気の問題とはっぱをかける、あなたの力を借りたいとお願いする）／学校に足を運ぶことに比べて校外での活動（引率、安全指導等）は参加しやすいようなのでそれをきっかけにする／男性スタッフが男性に声をかける／協力的な方や顔見知りになら声をかける／自治会の役員や老人クラブ等の集いに顔を出して誘う／自治会のキーマンに協力をお願いし、他の人にはその人が協力してくれるからと誘う／おやじの会を立ち上げる

（３）事業を実施するに至る背景

学校や子どもをめぐるさまざまな状況

学校は地域からの理解が得られず、保護者も多様であるため、学校が非常に悪戦苦闘しているという状況があり、学校が保護者や地域の人たちに理解してもらうには、実際の学校をみてもらうことが効果的と考えた。また、子どもの不登校等の問題に対し、子どもが地域の多様な人たちと接する機会を増やし、学校に違う風を入れることも必要だと考えた。

新潟市教育ビジョンでめざす子どもの姿・市民の姿を具現化するためには、学校、家庭、地域、社会教育機関、地域の諸団体、企業等が一体となって教育活動を進める必要があると考えて事業を展開している。

（４）取り組みの評価

取り組みは学校（教職員・子ども）にとっても地域の人にとっても、社会教育施設にとってもメリットがあり、それぞれについて効果がでていていると考える。実施した学校からは、子どもが元気に

なり、地域の人が元気になり、それがまた子どもの元気に還元された、事業を実施してよかったという感想が、地域と学校ふれあい推進課に寄せられている。

（５）課題

量の拡大に伴う質の維持

平成 19 年度に事業を始めたパイロット校では、前例がないために関係者で話し合いながら活動を築き上げてきた。2 年目からは具体的にどのような活動を行えばよいかがおおよそわかっているため、活動を円滑に広げられる一方、活動内容一つひとつの意義や活動する人の学びについて考える機会が減る場合がみられる。また、ボランティアの人数が増えるとローテーションも組みやすく、ボランティア自身の趣味等との両立もしやすくなるために、ボランティアとなる住民の発掘や人数の確保は大切であるが、これは常に地域教育コーディネーターにとっての課題の 1 つとなっている。

今後、実施校やボランティアの人数が増加していくにあたって、研修等の内容を考慮して、活動の質の維持やボランティアの人たちの学びや主体的な関わりに努める必要があると考える。

（６）今までの課題解決に向けた取り組み

事業を行うことの利点を多くの機会に広報

平成 19 年度に事業を開始するにあたって、各学校からは仕事が増えるということで反対が多くあった。しかし、実際に事業を実施したパイロット校の実践がだんだん聞こえていく中で、地域の住民の力をもらうということが非常に効果的だということを学校側も理解できるようになり、今年度は実施校が増えた。事業を行うことの利点を周知させるために、小学校、中学校それぞれの校長会では、取り組みを説明する時間を設けた。

小学校長会では、集まって話をする形だけでなく、各学校の特色等の発表をポスターセッション形式で行う会があり、そこで地域と学校パートナーシップ事業を行っている学校が発表を行った。発表には市長も訪れており、取り組みについて他の場所で話すこともある。そのほか、公民館長の会議やコミュニティの会長の会議でも時間をもらい、事業説明を行っている。

地域の人たちへの周知についても取り組みの紹介をできる機会を増やし情報を提供している。市報である「市報新潟」や区報にも取り組みを掲載した。ボランティア募集については、ちらしを作成し、区役所等に置いてもらうようお願いしている。

３．実施の体制・連携等

（１）関連機関・団体との連携

学・社・民の融合による教育は、それぞれ機関の関係者が密接に関わり、それぞれの機能や役割分担を果たすことが重要であることから、地域教育コーディネーターが調整役となり、各地域において効果的な事業のための連携、組織化を進めている。連携の形は 2（２）で示したように多岐に渡っている。

学校と地域住民の連携だけでなく、公民館と学校が協働で事業を実施する機会も増えている（児

童が公民館のパソコン教室(年賀状づくり)で大人に教える、親子料理講習会等)。また、家庭教育学級を公民館と連携して、ほとんどの保護者が来校する個人面談等の日程に合わせて学校で実施しているところもある。これにより、学校側は多様な保護者に情報提供を行うことや、講師やワークショップのノウハウを知ることができ、公民館側は参加者が集まらないという問題を解消している。

各学校、各地域教育コーディネーターが、それぞれの地域のニーズや課題に合わせた工夫をして、公民館等との共催やさまざまな世代の住民の交流等を行っている。

(2) 行政等との連携

教育委員会の各課とは、必要に応じて連携している。ボランティアを行う人に対するボランティア保険は、理科支援員や学生の学校支援ボランティアの担当課である学校支援課で一括してかけている。生涯学習課とは、「学・社・民の融合による教育」を進めるための研修等を連携して行い、事業の効率化を図っている。施設課には、ボランティアの人たちが気持ちよく活動できるように、空き教室の冷房設置や間仕切り等の相談、依頼を行う。新潟市の教育の方針としては、新しく学校を建てる際や大規模改修する際には、地域の人たちが交流できるボランティア室をつくることになっている。

4. 企画・実施の視点について

(1) 男女共同参画の視点

地域教育コーディネーターに必要な力量の一つ

学校を支援する取り組みに関わる地域住民の多くは、性別役割を当然と思い生活してきた人が多い60歳以上の世代ではあるが、ボランティア活動を行う人たちは、人の役に立つこと、子どもと接することで自己有用感を高め、いきいきと暮らすというような価値を重視して活動を行うので、普段は男女共同参画の視点について、地域と学校ふれあい推進課の担当者が意識するような場面はほとんどないという。しかし一方で、実際の活動では、今までの経験を活かすという点や高齢者の体力的な点から、男性は囲碁や工作、球技や登山引率、もちつきのつき手やイベントの会場設営、安全指導等の活動に多く参加していたり、活動参加を促されたりするといった性別による活動内容の偏りはある。

現在のところ研修等の内容には盛り込んでいないが、地域教育コーディネーターが男女共同参画の視点をもつことは必要と考えている。実際に、地域教育コーディネーターが男女共同参画の視点をもって子どもの見守りや大人への声がけを行った場合には、ボランティアや保護者に新たな気づきを与えることができている(例えば、子どものケンカへの言葉のかけ方に子どもの性別で差があるボランティアがいた場合に、同じ男の子でもケンカが強い子とそうでない子がいることに気づくよう声がけをした。また、折り紙が好きな男の子に折り紙遊びを中断させ体育館へ連れて行った母親に対して、好きなことや得意なことを認めてほめることの大切さに気づくよう声がけを行った)。

（２）男性の地域参画の必要性

次世代育成支援活動に関心のある男性は増加

現在、登下校の見守りや安全パトロールを行うセーフティスタッフには多くの男性が登録し活動しているが、学校の授業や行事、放課後等に子どもと接するボランティアは、多くを女性の力に頼っている。一方、取り組みについての最近の市報の記事に対しては男性からの問い合わせが多く、次世代育成支援活動に関心を持つ男性の増加を感じている。

ある小学校では、地域教育コーディネーターが男女一人ずつおり、女性は元保育士で地域の女性とのつながりが深く、男性は元村会議員で、男性が多くを占める組織にいろいろな人脈を持っていて、分野の異なる多様な人材のボランティア参加やネットワークづくりが可能になっている。多くの男性が活動に加わることで、学校支援の活動内容や地域のネットワークの幅が広がると考えている。

（３）学習と社会活動の循環

活動の振り返りを通して学びを共有

学校支援を行う地域住民は、生け花や囲碁・将棋、絵画等、公民館のサークルでやっていることや、趣味でやっていることを活動に活かしている場合が多い。男性の場合は、その他に、職業としての大工のスキルや、自分が子どもの頃の遊び(コマ、めんこ等)や若い頃の球技(野球、サッカー等)の経験を活かして活動を行っている場合も多い。

地域教育コーディネーターは、活動の前や後に時間をとり、ボランティアの人たちと活動前の説明や終了後の振り返りをおこなっている。ボランティアの人たちも、最初は地域教育コーディネーターや学校の言われたとおりに活動に加わるが多いが、活動や活動の前後の話し合いを重ねるうちに、いろいろな気づきや提案について意見交換をするようになっていく。また、地域教育コーディネーターは、地域と学校ふれあい推進課が行う研修で得た気づきや情報を、活動や振り返りの時間にボランティアの人たちに還元することによって、お互いの学びが共有され、活動の質の向上に役立っている。

事例と交流で学ぶ機会を提供

教育委員会の主催で、学・社・民の融合による教育に関わる地域人材や学校担当者等を対象とした「学・社・民の融合で元気アップ講座」を、平成 19・20 年度に年 3～4 回実施している。地域教育コーディネーターと公民館、図書館、学校関係者等が情報交換する貴重な機会となっている。

地域教育コーディネーターにはこれ以外に年度の初めに説明会を実施し、パイロット校の実践の発表等を行っている。「ふれあいスクール事業」については、年 2 回情報交換会を市内全域の運営主任を対象に実施し、情報交換会と子どもたちへの対応等についての情報提供を行っている。

平成 20 年度「学・社・民の融合で元気アップ講座」

1. 趣旨

学・社・民の融合による教育がめざすものを理解し、これからの関係づくり、協働事業について研修を深める。

2. 主催 新潟市教育委員会

3. 対象者 定員 150 名

地域教育コーディネーター、各学校担当者、学校支援ボランティア

ふれあいスクール運営主任・スタッフ、学校教職員、生涯学習関係職員、指導主事

第 1 回 日時：6 月 5 日(木)13:30～16:45 場所：黒埼地区公民館

13:30～13:40 課長あいさつ

13:40～14:30 「学・社・民の融合を進めるということ」

教育政策監 手島 勇平

14:40～15:40 「学校に『社』『民』の力を取り入れると子どもが元気になる！！

～地域教育コーディネーターから学ぼう～」

15:55～16:45 「話し合い～自分にできることを考えよう～」

第 2 回 日時：8 月 25 日(月)13:30～16:45 場所：黒埼地区公民館

13:30～13:40 課長あいさつ

13:40～15:30 講演「地域における子どもの生活環境創造の取り組み

ー学社融合による子どもを中心に据えた地域教育コミュニティをめざすー」

大阪府地域コーディネーター連絡協議会事務局学校と地域の融合教育研究会

副会長 油谷 雅次

15:45～16:45 「意見交換～大阪府に学んだことを自分はどのように活用できるか考えよう～」

第 3 回 日時：11 月 20 日(木)13:20～16:55 場所：万代市民会館

13:20～13:30 課長あいさつ

13:30～15:00 講演「学校を教育コミュニティにしよう」

新潟大学教授 齋藤 勉

15:15～16:45 パネルディスカッション「学・社・民の融合で子どもも大人も元気になります」

コーディネーター 新潟大学教授 齋藤 勉

パネリスト 〔学〕入船小学校 校長 本多 英子

〔社〕中央公民館 主査 佐藤 功

〔民〕亀田小学校 地域教育コーディネーター 荻込 綾子

〔民〕坂井輪中学校 地域教育コーディネーター 原 明彦

〔民〕東中野山小学校 学校支援ボランティア 平井 久

17:30～19:45 情報交換会

5. 今後に向けた展望・課題

(1) 今後の取り組み

全小中学校での事業実施

「地域と学校パートナーシップ事業」は、平成 19 年度はパイロット校 8 小学校、平成 20 年度は小学校 32 校、中学校 8 校で実施しているが、平成 26 年までに市内全小中学校において実施することを行政目標としている(小学校 114 校、中学校 57 校)。

教育ビジョンでは、現在は事業実施の学校数を示しているが、今後組織化されたボランティアの数についても調査し公開していくことを検討している。

（２）今後に向けた課題

学校の管理職のリーダーシップと教職員の理解

市内全小中学校への事業拡充に向けた今後の課題としては、学校の管理職のリーダーシップと教職員の理解が挙げられる。この課題に対しては、新採用の管理職登用の研修を市で組む際に、学・社・民の融合による教育の重要性について、ワークショップを入れたプログラムを必ず行うようにしている。各学校で取り組みを進める際には、管理職以外の教職員の理解が十分になれば地域教育コーディネーターが孤立して円滑に取り組みを行えなくなるため、管理職だけでなく各学校の教職員の理解も必要になる。地域と学校ふれあい推進課では引き続き、事業を行うことのメリットを具体的に伝える広報を行っていく。

学校や子どもを支援したい人材の有効な組織化と活用

地域のために活動したい、学校や子どもを支援したいという男性は、特に退職した男性に増加している。新潟市でも、他の自治体と同様、公民館等でボランティア養成講座を実施しているが、参加者の多くが男性である。そのような講座の修了生やボランティアを希望する人が登録した人材データは、各関連機関で管理や配布が行われてはいるが、登録した人たちが実際に活躍している場面が多くあるわけではない。

地域教育コーディネーターの役割として一番重要なことは、学校ボランティアの組織化である。と地域と学校ふれあい推進課では考えている。各地域でボランティアをしたいと思っている人を発掘してつなげ、学校のニーズにあわせて活動を具体化する有機的な地域の組織を築くことで、地域の人材が活かされるいきいきとした地域づくりが可能になると捉えている。

ヒアリングを終えて

地域教育コーディネーターを核とした充実した学校支援の取り組みは、着実に地域に広がっている。新潟市の取り組みからうかがうことのできる効果的な事業実施のためのポイントとしては、①地域教育コーディネーターの活躍と、②広報による事業成果の周知、の２点が挙げられる。既に地域における豊富な活動経験のある地域住民である各学校の地域教育コーディネーターが、学校支援活動を行いたい人、行える人の発掘・組織化や学校のニーズから活動を具体化することまで担っている。地域と学校ふれあい推進課は、地域教育コーディネーターが事例や情報交換を通して学んだり、連携先と交流したりする場を提供し、また、日々の活動では参加した人たちが活動の振り返りを行う等、学習と活動の循環が行われている。取り組みの利点を、学・社・民それぞれを対象にさまざまな機会に広報して周知に努めていることも、学校の教職員や社会教育施設職員、地域住民の理解や支援を広げることに効果を上げている。

男女共同参画の視点については、活動する人たちのこれまでの経験・学習等を尊重することにより、性別役割にもとづいた活動が行われている場合も多いようであるが、今後、地域教育コーディネーターの研修等にこの視点を盛り込み、地域教育コーディネーター自身や活動するボランティアの人たちに新しい気づきがあり、活動する大人を見る子どもたちに対して、さまざまな身近なロールモデルが提示されることを期待したい。（飯島 絵理）

Ⅲ おわりに

Ⅲ おわりに 本年度調査研究を振り返って：事例調査からみえた課題

独立行政法人国立女性教育会館では、「地域活性化に向けた男女共同参画推進に関する調査研究」（平成 20・21 年度）の一環として、男性の家事・育児参画促進、ワーク・ライフ・バランスの推進、社会全体の教育力の向上等の今日的課題を踏まえ、地域における男性の次世代育成支援活動への参画促進についての現状・課題の把握を行った。本報告書は、取り組み事例のヒアリング調査の結果を、家庭教育・次世代育成支援や男女共同参画に関わる行政担当者、男女共同参画関連施設を含む社会教育施設担当者、地域活動を行う団体リーダー等、関連する分野の指導者・支援者が活用できるようにまとめたものである。

本調査研究では、男性の次世代育成支援活動への参画促進のための重要なポイントとして、「学習と活動の循環」と「男女共同参画の視点」の 2 つについて留意して把握・検討を行った。指導者・支援者の参考になるような事例の選定にあたっては、特に、男女共同参画の視点から参考となる事例を探すことに苦労した。地域活動や地域のしくみづくりにおいては、男女共同参画推進の意識が希薄なことがほとんどで、男性も含め地域全体で次世代育成支援の取り組みが行われている場合でも、男女共同参画の視点をもった先進的な取り組みといえる事例がないのが現状であることがわかった。また、男女共同参画の視点をもった取り組みとはどのようなものかについて、本調査研究プロジェクト委員会の中でも委員によってさまざまな認識があった。これらのプロセスによって、男性の地域参画について男女共同参画の視点が浸透していないことをあらためて認識し、本調査研究の意義を再確認することとなった。今年度の調査を踏まえ、来年度、地域において男女がともに地域活動に参画することを通して地域活性化と男女共同参画を推進する方策を検討していきたい。ここでは、調査研究 1 年次の報告として、地域における男性の次世代育成支援活動への参画促進について、事例調査からみえてきた課題を、学習と活動の循環、および男女共同参画の視点から、①男性の現状、②学習を中心とした支援、③活動を中心とした支援、の 3 つにわけて簡単に考察したい。

（１）男性の現状

仕事をもつ子育て中の男性の家庭での家事・育児への参画や地域活動への参画はあまり進んでいない。子育て中の父親の地域の次世代育成活動への参画を妨げる要因としては、仕事が忙しく時間がないこと、自分の子どもの世話だけで手一杯で地域に関わる余裕がないこと、地域にネットワークがないこと等がある。一方で、地域の次世代育成支援活動に関わる「おやじの会」等の男性のグループは多数あり、自営業の男性や子どもが既に大きくなった男性も含めた男性が所属し、土日や地域のイベントの開催日を中心に活動をしている。これら男性による地域活動は、地域の父親の情報交換やネットワークづくりに大きな役割を果たしているが、活動している多くの父親たちにとっては、やはり仕事と家事・育児、地域活動の両立が大きな課題となっている。

団塊の世代を中心とした退職した男性については、地域活動への関心が高く、各地でボランティアの登録や関連講座への参加、実際の活動への参加が増加している傾向にあるようである。団塊の世代・高齢者の次世代育成支援活動の課題の 1 つとしては、子どもの世話等、直接子どもと接する活動を行う男性が少ないことがあるだろう。登下校の子どもの見守りの活動を行う男性は

多いが、未就学児の世話や子育て支援、小学生の遊びの見守り等に関わる男性は、まだまだ少ない。また、仕事中心の生活を終えた後、地域で何かしたいがきっかけがない、ネットワークもない、ボランティアの登録や講座受講はしたが特に活動せず、声がかかるのを待っている、あるいは、職業生活で蓄積した論理やプライドを地域活動に持ち込む、といった男性も多い。

（２）学習を中心とした支援

父親の育児参画、団塊の世代の料理や地域デビュー等、男性を対象とした講座は、各地でたくさん行われている。国立女性教育会館が平成 20 年に男女共同参画関連施設および働く婦人の家を対象として実施した調査では、男女共同参画関連施設の 7 割弱、働く婦人の家の約 5 割が平成 19 年または 20 年に男性を主な対象とした事業を実施している⁴。これらの施設では、子育て中の父親を対象とした父子の料理教室、育児参画に関する座談会や、講演会、団塊の世代や高齢者を対象とした料理講座等が多く行われている。同調査によると、男性を対象とした事業を行うにあたっての課題としては、男女共同参画推進意識の醸成をどのように図っていくかということが多く挙げられている。参加者の確保の点からすると、料理等、参加者の関心やニーズの高いものをテーマにしているのが現状であるが、施設のミッションとして、男女共同参画の視点をどのように盛り込みプログラムを組み立てるかが課題となっている。また、広報、開催日時設定、内容等の工夫をしているにもかかわらず参加者が十分に集まらないという課題も多い。

男性の育児参画の必要性や団塊の世代の地域活動への関心が高まっている現在、男女共同参画関連施設に期待される役割は大きい。しかし実際には、男性の男女共同参画推進意識の醸成は依然として大きな課題であり、多くの男女共同参画関連施設では参加者の確保にも苦心している。そして地域活動を行う多くの男性は、男女共同参画の視点について学ぶ機会もなく活動をしているのが現状である。

地域において男女共同参画を推進していくにあたり、内閣府男女共同参画会議基本問題専門調査会のいう「第二ステージへの移行」を実現していくためには、男性を対象とした学習にはまだまだ多くの課題がある。今後は、地域活動を行う男性に対して、男女共同参画の視点をもった活動や地域の課題解決を行える力量を形成していくことが必要となるだろう。例えば、講座等に参加した修了者のフォローアップを行い、ネットワークづくりや地域活動への参画を支援し、学習者であった男性が地域の支援者となって、男女共同参画の視点をもった地域づくりを行うことを支援することも必要となってくるのではないだろうか。子育て中の父親を対象とした事業についても、今後は、地域の子育て支援活動に子育て中の働く父親が参加したり、活動の質を深めたりするための情報提供やコーディネート、父子家庭、外国籍、障がいのある子どもを持つ家庭等、多様な父親・家庭を支援するための情報提供・講座等、支援の内容をさらに検討して深め、女性が主に担ってきた子育てや子育て支援を、男女ともに担っていく実践に向けた足がかりを築いていく必要がある。ただ現状ではそれ以前に、男女共同参画推進の意識の浸透、男女共同参画関

⁴ 全国の男女共同参画関連施設 374 施設および働く婦人の家 185 施設を対象に、平成 20 年 8 月に郵送による（回答はファックス）アンケート調査を実施。回収率は男女共同参画関連施設 38.2%（143 施設）、働く婦人の家 30.3%（56 施設）。平成 19 年度または 20 年度に男性を主な対象者とした事業を実施した施設は、男女共同参画施設 97 施設（67.8%）、働く婦人の家 51.8%（29 施設）。

連施設へ足を運んでもらうといった「第一ステージ」に関わる課題も克服していかなければならない。

地域活動をより意識した人材の育成も課題であると考えられる。男女共同参画関連施設に限らず、子育て支援や団塊の世代を対象としたボランティア等の育成事業を行っても、活動につながらない修了者が多くいることは各地で課題となっているが、実際の活動につながるしくみを整えた上での学習が必要であろう。また、現在行われている地域活動を行う人材を養成する講座には、男女共同参画に関する内容が全く盛り込まれていないものが多く、男女共同参画関連施設がこれらを実施する機関と連携して、出前等も含め情報提供を行っていく必要があろう。男女共同参画関連施設は、地域の関連機関との連携を深め、地域活動を行う人のためのしくみづくりの一端の機能を担い、学習したことを活動に活かすことの支援や、すでに活動している人を対象とした男女共同参画推進のための学習等の機会を提供していくことが期待されているのではないだろうか。

（３）活動を中心とした支援

学校支援地域本部事業等、地域ぐるみの次世代育成支援の広がりにもなって、地域において次世代育成支援活動を行う男性も増えている。しかし、本調査研究においてあらためて痛感した大きな課題は、地域のしくみづくりを支援する行政や社会教育施設等の担当者の男女共同参画の視点に対する関心や意義・必要性の認識が低いということであった。支援者が男女共同参画の視点をもって、活動する人、学習する人を支援しなければ、いくら地域活動を行う男性が増えても、性別に基づく役割分担による地域づくりが行われてしまい、地域における男女共同参画は推進されない。

男性が地域で次世代育成支援活動を行う場合、子どもの安全の見守りや、行事の際の力仕事を行うことが多く、子どもの世話をしたり一緒に遊んだりすることは少ない傾向にあるようである。また、小学生と関わりを持つ活動を行う男性は多いが、未就学児と関わりを持つ地域活動を行う男性は非常に少ない。今まで地域で活動する機会がなかった男性たちが、自分の今までの経験や得意なことを活かして活動を始めた結果、活動の内容に性別による偏りができることは当然である。地域の支援者は、このような“得意なこと、今までの経験を活かした”活動の支援を行うと同時に、男女共同参画の視点にも無自覚にならずに、男性たちが今まで経験してこなかった新たなことや固定的な役割分担意識にとらわれない活動内容に参加することを支援していく必要がある。新たな活動、役割へのチャレンジは、活動する人自身にも新たな気づきややりがいの発見をもたらす、その人の地域活動におけるキャリアを豊かにすることにもつながる。また、子どもたちに対しても、身近にいる地域の大人の性別にかかわらず活動や役割を提示することは重要である。

男女共同参画の視点をもった次世代育成支援活動を地域で行っていくには、まずは行政等の担当者や地域のコーディネーター等の支援者に、男女共同参画推進のための実践に活かせる学習の機会を提供することが大切と思われる。また今後、職業生活の経験を活かし、地域でリーダーシップをとる男性の活動は増えていくことが予想されるが、男女ともに、男女共同参画の視点をもって活動を行う地域のリーダーを、具体的な活動の実践に即した学習によって支援していく必要があるだろう。

（飯島 絵理）

IV 参考情報

IV 参考情報

(1) 参考文献

*ここでは、地域における男性の次世代育成支援活動への参画とその促進に関わる文献を少数、選別して掲載しています。

国立女性教育会館の女性教育情報センターでは、家庭教育、子育て支援、次世代育成支援に関わる資料を多数、所蔵しています。資料はインターネット(<http://www.nwec.jp/>)で検索でき、文献複写サービスのほか、女性関連施設・図書館等を通じて貸出しも行っています。詳細は女性教育情報センターまでお問い合わせください。

荒金雅子・小崎恭弘・西村智編著『ワーク・ライフ・バランス入門：日本を元気にする処方箋』2007
ミネルヴァ書房

安藤哲也著『パパの極意：仕事も育児も楽しむ生き方』2008 日本放送出版協会

「男の居場所」見つけ隊『“まち”にさがそう!男(おやじ)の居場所』2006 日本レクリエーション協会

おやじの会小冊子編集委員会編『オヤジたちの血がたぎる：みやぎのおやじの会は活動する』2008
お父さんたちのネットワーク：みやぎ地域家庭教育推進協議会

神奈川県立かながわ女性センター企画部研究情報課編『地域社会へのソフトランディング：新たなライフスタイルの創造：男女共同参画推進講座講師用テキスト』2004

キャパシティ・ビルディング研究会企画・編集『お父さんのワークライフバランス：次世代育成応援プログラム』2006 日本家庭生活研究協会

勤労者マルチライフ支援センター編『お父さんの地域デビュー作戦：子どもと一緒に、お父さんの居場所づくり』2005 勤労者マルチライフ支援センター

勤労者マルチライフ支援センター編『子どもと一緒にお父さんの活動事例集』2005 勤労者マルチライフ支援センター

国立女性教育会館・伊藤陽一編『男女共同参画統計データブックー日本の女性と男性ー2009』2009
ぎょうせい

佐藤博樹編集代表『ワーク・ライフ・バランス：仕事と子育ての両立支援』2008 ぎょうせい

さわやか福祉財団『「おやじの会」立ち上げに向けたお父さん達と関係者の奮闘のものがたり：パートナーシップによる地域の教育力推進事業：報告書』2004

さわやか福祉財団勤労者マルチライフ支援センター『勤労者ボランティア・シンポジウム「子育て支援・お父さんの地域デビュー」地域一体で支援体制を共に考えるシンポジウム：報告書』2004. 8

さわやか福祉財団『フォーラム「“おやじ”の学校デビュー」：子どもの居場所を“おやじ”がつくる：報告書』2004. 3

静岡県教育委員会・静岡県地域家庭教育推進協議会編『父親の会実践事例集：さあ!!お父さんの出番ですよ。』2005 静岡県地域家庭教育推進協議会

静岡県労働者福祉基金協会静岡ワークライフ研究所編『静岡県内のワーク・ライフ・バランスの実態と支援に関する調査研究・中間報告書』2008 静岡県労働者福祉基金協会静岡ワークライフ研究所

全国保健センター連合会『ふたりで子育て：父親の育児参加推進事業報告書（平成18年度）』2007. 3

せんだい男女共同参画財団編『仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)に関する事例調査』2007 せんだい男女共同参画財団

男女・子育て環境改善研究所編『「おやじの会」地域の特徴から見た男性の「地域・子育て」参画に関する調査』2005 福岡市女性協会

千葉市市民局生活文化部男女共同参画課・千葉市女性センター編『男性の生活と仕事に関する意識調査：調査結果報告書』2004

鳥取県男女共同参画推進課・鳥取県男女共同参画センター「よりん彩」『さらなる人生のために：すべての中高年男性のかたへ』2004

新座子育てネットワーク『お父さんは、地球でいちばん、すてきな仕事：NPO 法人新座子育てネットワーク地域における父親支援ネットワーク構築事業報告書』2008

ヒューマンルネッサンス研究所編著『男たちのワーク・ライフ・バランス』2008 幻冬舎ルネッサンス

村上信夫[述] 富山県女性財団編『おやじの腕まくり：サンフォルテ男性生活講座』2005 富山県女性財団

労働政策研究・研修機構(JILPT)編『仕事と生活：体系的両立支援の構築に向けて：仕事と生活の調和を可能にする社会システムの構築に関する研究』2007 労働政策研究・研修機構

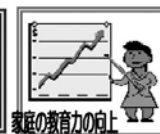
（２）関連する国の施策

文部科学省（文部科学省ホームページより）



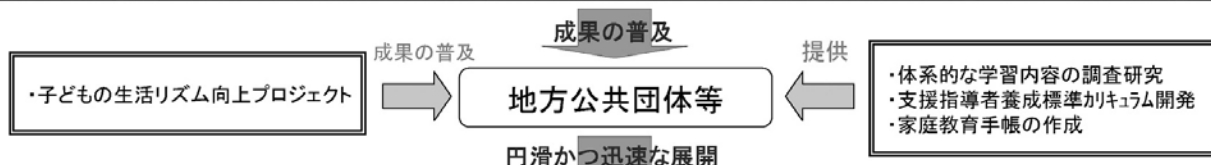
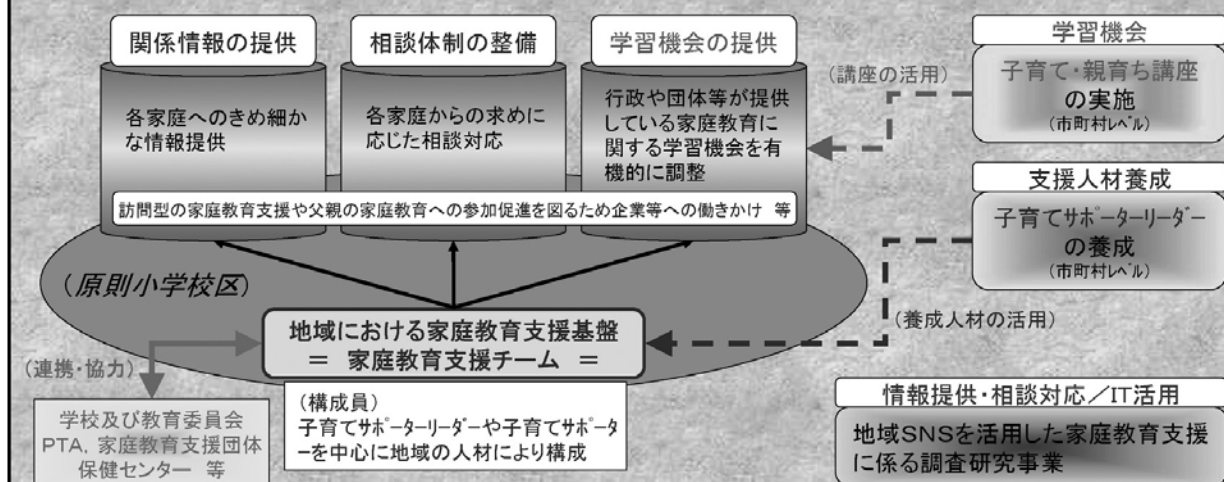
地域における家庭教育支援基盤形成事業

～ すべての親へのきめ細かな家庭教育支援手法の開発 ～



○手法開発パッケージ(モデル事業:282カ所)

20年度予算額 1,153百万円(新規)



地域において行われている家庭教育支援事業の活性化による一層の充実

家庭教育支援指導者養成標準カリキュラム開発事業

背景

20年度予算額31百万円(新規)

子育てサポーターリーダーの役割

- 子育てサポーターの育成支援
- 子育てサークル同士のネットワークの構築支援
- 子育てについての相談対応
- 学校や福祉部局との連携による子育てや家庭教育に関する学習機会のコーディネート等

子育てサポーターリーダーの養成

- 地域における家庭教育支援基盤形成事業(文部科学省委託事業)を活用
- 市町村等に設けられた協議会が研修等を開設し、養成
- カリキュラム等は統一したものはない

子育てサポーターリーダーに期待される今後の役割

- ・地域における子育てや家庭教育支援の指導者として、より多くの場における活躍
- ・学校や行政機関(教育委員会や福祉部局)等との連携の一層の促進

課題

- ・全国的に一定の資質を持つ人材の養成
- ・社会的通用性の確保

標準カリキュラムやテキストの開発・提供

子育てサポーターリーダーの資質等の提示

家庭教育手帳の作成

20年度予算額65百万円(170百万円)

中央教育審議会答申(平成10年6月)～幼児期からの心の教育の在り方について～
・家庭でのしつけの在り方や心の成長に関して配慮すべき点を盛り込んだ家庭教育資料を読みやすい
簡便な冊子として作成して親に配布する。

○教育改革国民会議報告(平成12年12月)

・国及び地方公共団体は、家庭教育手帳、家庭教育ノートなどの活用と改善を図る。

○今後の家庭教育支援の充実についての懇談会報告(平成14年7月)

～「社会の宝」として子どもを育てよう～
・今後、文部科学省は、家庭教育手帳、家庭教育ノートの…内容の充実や、子どもの
発達段階ごとに分けるなどの改善を検討してはどうか。

家庭教育手帳の作成

妊娠

出産

小学校
入学

小学校
4年生

小学校
5年生

中学校
卒業

家庭教育手帳①

対象: 妊娠期～就学前の親向け

家庭教育手帳②

対象: 小学校1～4年生の親向け

家庭教育手帳③

対象: 小学校5、6年及び
中学生の親向け

全国のエデュコム等に提供して、乳幼児や小学生等を持つ各家庭への配布や家庭教育に関する学習機会等での活用を促す

あっそうなんだ!
自分だけじゃないんだ

- ①日常生活において、子育てのヒント集として活用
- ②PTAの研修会や子育て講座のテキストとして活用

家庭の教育力の向上

子どもの生活リズム向上プロジェクト

20年度予算額 236百万円 (242百万円)

最近の子どもたち

○子どもの基本的生活習慣の乱れ

※就寝時間の遅れ

①22時以降に就寝する幼児(6歳以下)の割合: 29%

(平成17年度 ベネッセ教育研究開発センター「第3回幼児の生活アンケート」結果より)

②小学校高学年で23時以降に就寝: 29%

中学生で24時以降に就寝: 47%

(平成17年度 義務教育に関する意識調査より)

※朝食を食べないことがある小中学生の割合: 小学生 14%、中学生 19%

(文部科学省 平成19年度全国学力・学習状況調査 より)

○朝食を毎日食べる児童生徒が、正答率が高い傾向
(平成19年度全国学力・学習状況調査 より)

子どもの望ましい基本的生活習慣を育成し、生活リズムの向上をめざして、
「早寝早起き朝ごはん」国民運動を推進

子どもの生活リズム向上のための普及啓発事業の実施

【民間団体への委託】 74百万円

子どもの望ましい基本的生活習慣を育成し、生活リズムを向上させることを含め家庭教育支援の機運を高めるため、関係機関・団体等と連携し、下記の普及啓発事業を実施。

- [1]ポスター等の作成・配布
- [2]中央イベントの開催
- [3]全国フォーラムの開催



子どもの生活リズム向上のための調査研究の実施

【民間団体への委託】 151百万円

学校、PTA、子ども会、自治会、町内会など関係団体が連携し、地域ぐるみで子どもの望ましい基本的生活習慣を育成し、子どもの生活リズム向上のための全国的な取組状況を調査し、実践地域における事例研究や生活リズムの向上による効果の分析、検証等を行う。

- ・先進地域調査研究 35地域
- ・乳幼児期調査研究 35地域



子どもたちの健やかな成長のための
基本的生活習慣の確立



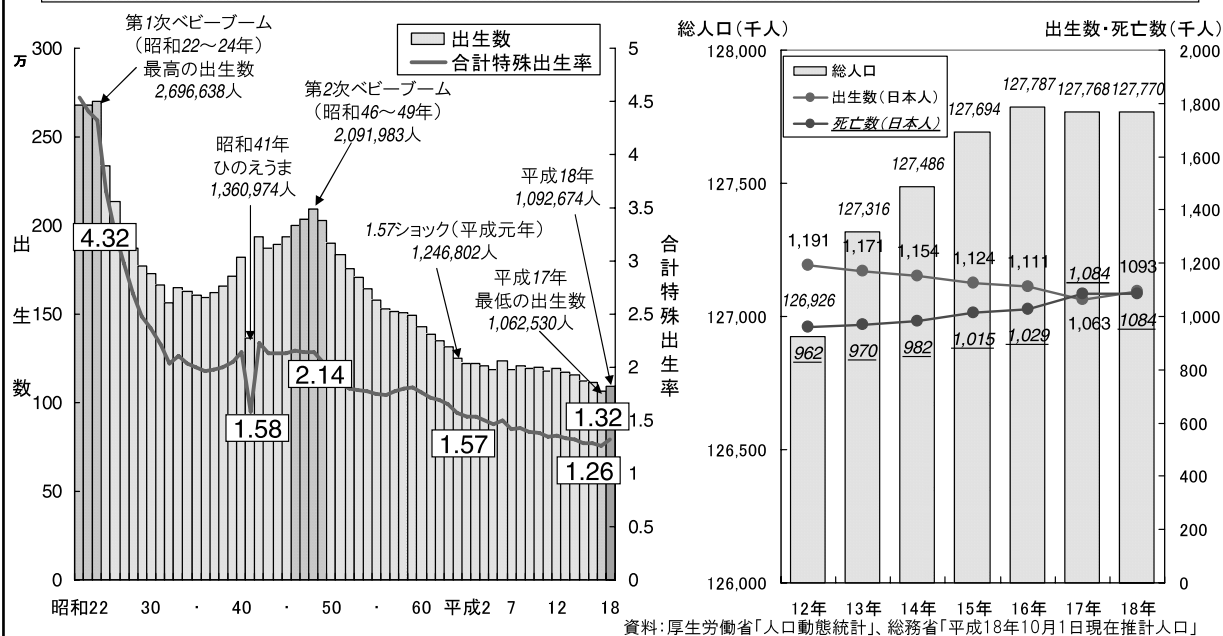
平成20年5月30日「家庭教育・次世代育成のための指導者養成セミナー」

急速な少子化の進行と 少子化対策の新たな展開について

厚生労働省雇用均等・児童家庭局
総務課少子化対策企画室

少子化の進行と人口減少社会の到来

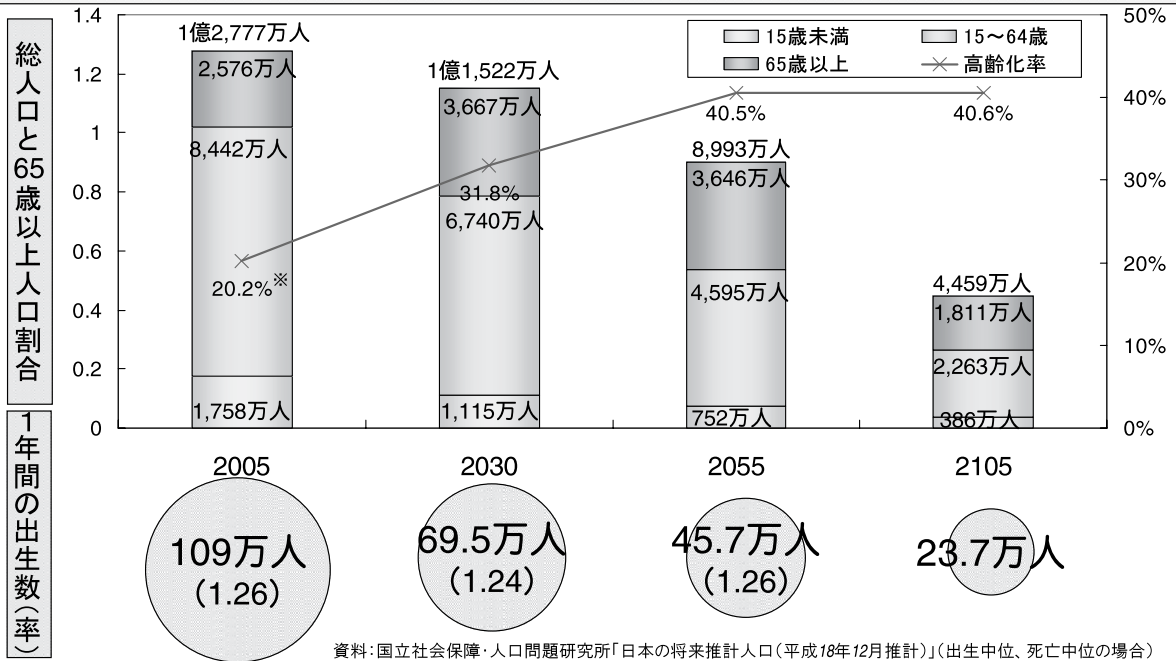
- 現在我が国においては急速に少子化が進行。合計特殊出生率は、平成17年に1.26と過去最低を更新。18年は出生数、出生率ともやや増加に転じたものの、なお低い水準。
- 平成17年には死亡数が出生数を上回り、国勢調査結果でも総人口が前年を下回って、我が国の人口は減少局面に入った。(平成18年は自然増減は微増、総人口もほぼ横ばい)



今後の我が国の人口構造の急速な変化

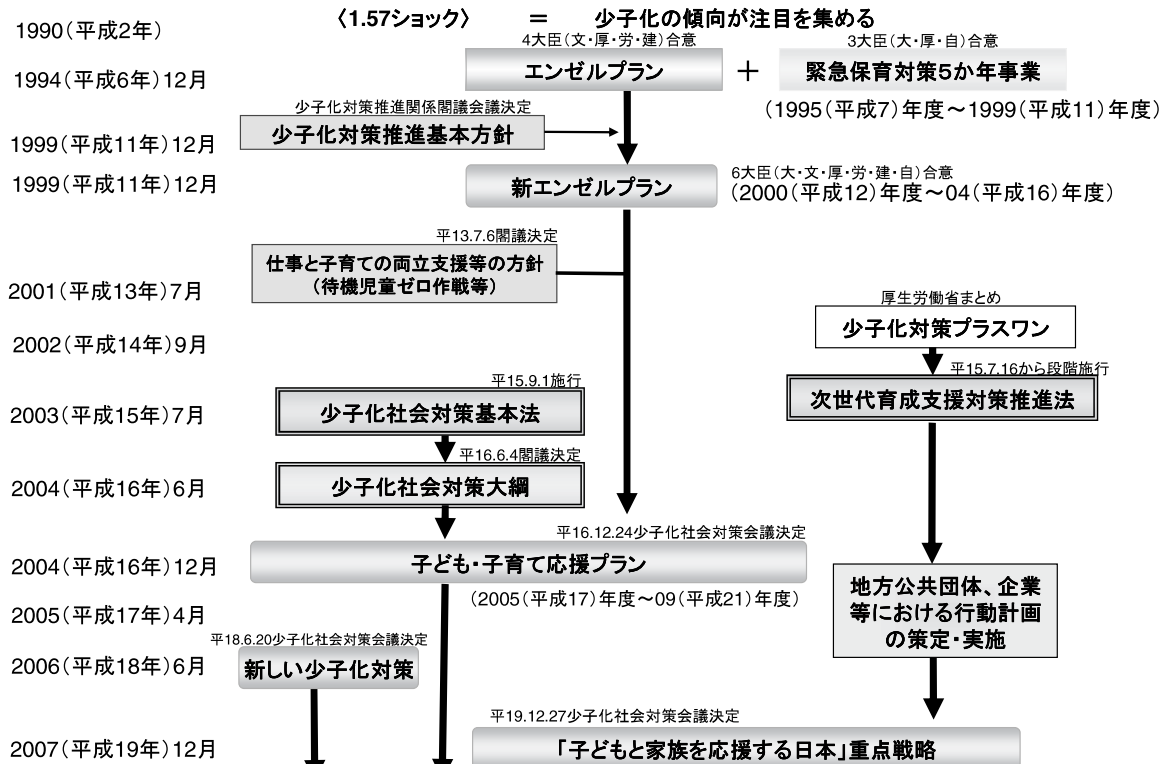
～日本の将来推計人口(平成18年12月推計)～

- 我が国の合計特殊出生率は、2005年に1.26と過去最低を更新。人口減少が始まった。
- 新人口推計(中位)によれば、2055年に産まれる子ども数は現在の約4割、高齢化率は現在の2倍(40.5%)、生産年齢人口(15～64歳)も現在の2分の1近くに急激に減少する。



2

少子化対策の経緯



3

少子化対策の政策的な枠組み

少子化社会対策大綱(平成16年6月閣議決定)

- 少子化の流れを変えるために特に集中的に取り組むべき4つの重点課題を設定
- ①若者の自立とたくましい子どもの育ち
 - ②仕事と家庭の両立支援と働き方の見直し
 - ③生命の大切さ、家庭の役割等についての理解
 - ④子育ての新たな支え合いと連帯

子ども・子育て応援プラン(平成16年12月少子化社会対策会議決定)

大綱の示した重点課題に沿って、平成17年度から21年度までの5か年間に講ずる具体的な施策内容と目標を提示

新しい少子化対策について
(平成18年6月政府・与党合意、少子化社会対策会議決定)

「子ども・子育て応援プラン」の着実な推進に加え、妊娠・出産から高校・大学生になるまで子どもの成長に応じた総合的な子育て支援策や働き方の改革、社会の意識改革のための国民運動等を推進

次世代育成支援対策推進法(平成17年4月施行)に基づく行動計画

都道府県、市町村……地域における子育て支援等について5か年計画を策定
事業主……仕事と子育ての両立支援のための雇用環境の整備や働き方の見直し等について2～5か年の計画を策定
(従業員301人以上が義務付け)

「子どもと家族を応援する日本」重点戦略(平成19年12月少子化社会対策会議決定)

少子化の背景…「就労」と「結婚・出産・子育て」との「二者択一」構造

2つの取組を車の両輪として進める必要

- ①働き方の見直しによる「仕事と生活の調和」の実現
- ②就労と子育ての両立、家庭における子育てを包括的に支援する枠組みの構築

仕事と生活の調和に関する「憲章」及び「行動指針」に基づき取組を推進

当面の課題(子育て支援事業の制度化等)について20年度に実施するとともに、包括的な次世代育成支援の枠組みについて、具体的制度設計の検討に直ちに着手し、税制改正の動向を踏まえつつ速やかに進める。

4

「子ども・子育て応援プラン」の概要

【4つの重点課題】

【平成21年度までの5年間に講ずる施策と目標(例)】

【目指すべき社会の姿(概ね10年後を展望)(例)】

若者の自立とたくましい子どもの育ち

- 若年者試用(トライアル)雇用の積極的活用(常用雇用移行率80%を平成18年度までに達成)
- 日本学生支援機構奨学金事業の充実(基準を満たす希望者全員の貸与に向け努力)
- 学校における体験活動の充実(全国の小・中・高等学校において一定期間のまとまった体験活動の実施)

- 若者が意欲を持って就業し経済的にも自立[フリーター約200万人、若年失業者・無業者約100万人それぞれについて低下を示すような状況を目指す]
- 教育を受ける意欲と能力のある者が経済的理由で修学を断念することのないようにする
- 各種体験活動機会が充実し、多くの子どもが様々な体験を持つことができる

仕事と家庭の両立支援と働き方の見直し

- 企業の行動計画の策定・実施の支援と好事例の普及(次世代法認定企業数を計画策定企業の20%以上、ファミリーフレンドリー表彰企業数を累計700企業)
- 個々人の生活等に配慮した労働時間の設定改善に向けた労使の自主的取組の推進、長時間にわたる時間外労働の是正(長時間にわたる時間外労働を行っている者を1割以上減少)

- 希望する者すべてが安心して育児休業等を取得[育児休業取得率 男性10%、女性80%、小学校修学始期までの勤務時間短縮等の措置の普及率25%]
- 男性も家庭でしっかりと子どもに向き合う時間が持てる[育児期の男性の育児等の時間が他の先進国並みに]
- 働き方を見直し、多様な人材の効果的な育成活用により、労働生産性が上昇し、育児期にある男女の長時間労働が是正

生命の大切さ、家庭の役割等についての理解

- 保育所、児童館、保健センター等において中・高校生が乳幼児とふれあう機会を提供(すべての施設で受入を推進)
- 全国の中・高等学校において、子育て理解教育を推進

- 多くの若者が子育てに肯定的な(「子どもはかわいい」、「子育てで自分も成長」)イメージを持てる

子育ての新たな支え合いと連帯

- 地域の子育て支援の拠点づくり(つどいの広場事業、地域子育て支援センター合わせて全国6,000か所での実施)
- 待機児童ゼロ作戦のさらなる展開(待機児童の多い市町村を中心に保育所受入児童数を215万人に拡大)
- 児童虐待防止ネットワークの設置(全市町村)
- 小児救急医療体制の推進(小児救急医療圏404地区をすべてカバー)
- 子育てバリアフリーの推進(建築物、公共交通機関及び公共施設等の段差解消、バリアフリーマップの作成)

- 全国どこでも歩いていける場所で気兼ねなく親子で集まって相談や交流ができる(子育て拠点施設がすべての中学校区に1か所以上ある)
- 全国どこでも保育サービスが利用できる[待機児童が50人以上いる市町村をなくす]
- 児童虐待で子どもが命を落とすことがない社会をつくる[児童虐待死の撲滅を目指す]
- 全国どこでも子どもが病気の際に適切に対応できるようになる
- 妊産婦や乳幼児連れの人が安心して外出できる[不安なく外出できると感じる人の割合の増加]

次世代育成支援のための行動計画の策定

次世代育成支援対策推進法(平成17年4月から10年間の時限立法)

地方公共団体及び事業主に対し、次世代育成支援のための行動計画の策定を義務づけ、10年間の集中的・計画的な取組を推進

都道府県・市町村

- 地域における子育て支援や母性、乳幼児の健康の確保・増進、教育環境の整備等を内容とする行動計画(5か年)の策定
- 子育て支援に関連する14の事業をはじめとして、できるだけ具体的な目標を掲げること推奨

行動計画の策定状況(18年10月現在)
都道府県：全都道府県で策定済み
市町村：全市町村で策定済み

企業(事業主)

- 仕事と子育ての両立支援のための雇用環境の整備、働き方の見直しに資する労働条件の整備等を内容とする行動計画(2～5か年)の策定
- 行動計画を策定、実行し、一定の要件を満たした企業については、厚生労働大臣が認定

行動計画の策定状況(19年12月末現在)
大企業：98.3%(13,216社)が策定届出
(従業員301人以上 — 策定が義務付け)
中小企業：9,693社が策定届出
(従業員300人以下 — 策定が努力義務)

認定状況(19年12月末現在)
認定企業：403社(301人以上371社、300人以下32社)

6

地域行動計画による子育て支援関係事業の取組状況

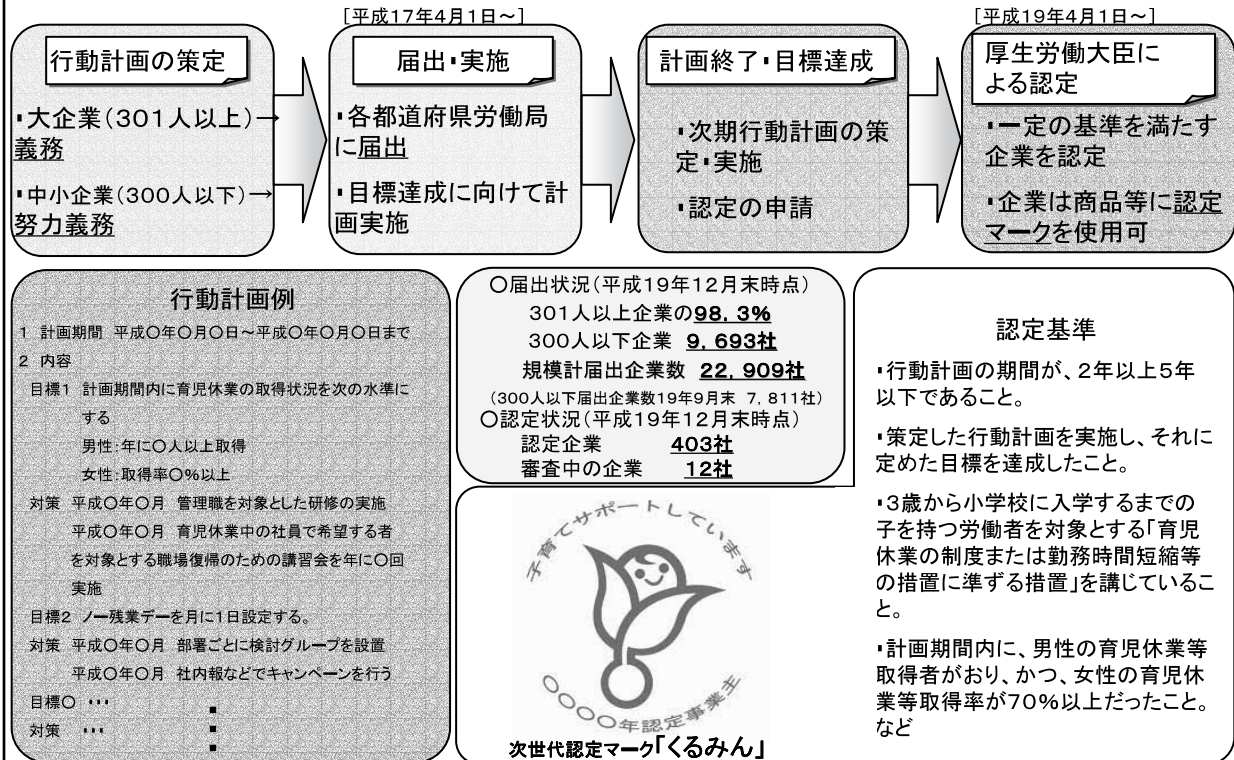
事業名	16年度実績	18年度実績	19年度実績 (交付決定ベース)	プラン目標値
通常保育事業 (保育所定員数)	205万人 (平成17年4月1日現在)	211万人 (平成19年4月1日現在)	211万人 (平成19年12月1日現在)	215万人
放課後児童クラブ	15,184か所 (平成17年5月1日現在)	16,685か所 (平成19年5月1日現在)	16,685か所 (平成19年5月1日現在)	17,500か所
地域における子育て拠点の整備 ・ つどいの広場 ・ 地域子育て支援センター	2,936か所 154か所 2,782か所	4,118か所 682か所 3,436か所	4,409か所 903か所(ひろば型) 3,478か所(センター型) 28か所(児童館型)	6,000か所 1,600か所 4,400か所
ファミリーサポートセンター	344か所	480か所	540か所	710か所
一時保育・特定保育事業	5,534か所	7,087か所	8,140か所	9,500か所
ショートステイ事業	364か所	511か所	584か所	870か所
トワイライトステイ事業	134か所	236か所	301か所	560か所
病児・病後時保育事業	496か所	682か所	735か所	1,500か所
延長保育事業	12,954か所	14,431か所	9,540か所 (注2)	16,200か所
休日保育事業	607か所	798か所	875か所	2,200か所
夜間保育事業	64か所 (平成17年4月1日現在)	69か所 (平成18年11月1日現在)	72か所 (平成19年7月1日現在)	140か所

(注1)「16年度実績」は、平成16年度終了後における各事業の実績値。(子ども・子育て応援プラン策定時は、まだ平成16年度の事業が実施途中であったことから、プランには実施見込み数で表記していたため、上記の数値とは異なっている。)

(注2)平成19年度実績(交付決定ベース)における延長保育事業については、民間分のみ。(公立分については自治体に照会予定)

7

次世代法に基づく企業の行動計画策定・実施について



8

平成20年度少子化社会対策関係予算のポイント

〇平成20年度少子化社会対策関係予算案の総額は1兆5,714億円(前年度比3.5%増)

〇平成19年12月にとりまとめた「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」及び「仕事と生活の調和推進のための行動指針」、並びに「子どもと家族を応援する日本」重点戦略の内容を反映

(1) 子育て支援策

※()内はH19予算額

I 新生児・乳幼児期(妊娠・出産から乳幼児期まで)

- ①産科・小児科医療の確保等母子保健医療の充実 278億円(256億円)
- ・産科医療機関への財政的支援、周産期医療体制の整備
 - ・産科医療補償制度創設後における一定の支援等、医療リスクに対する支援体制整備の準備
 - ・小児救急支援事業、小児救急拠点病院の休日夜間における診療体制の確保や小児救急電話相談事業など小児救急医療体制の確保等
- ②生後4か月までの全戸訪問事業(こどもにちは赤ちゃん事業)の推進
- ③子どもを守る地域ネットワーク(要保護児童対策地域協議会)の機能強化
- ②、③は、次世代育成支援対策交付金(375億円)の内数

II 未就学期(小学校入学前まで)

- ④地域における子育て支援拠点の拡充 101億円(84億円)
- ・平成20年度では、およそ7,000か所の整備を図る。 ※6,138か所(H19)→7,025か所(H20)
- ⑤待機児童ゼロ作戦の推進や多様な保育サービスの提供など保育サービスの充実 3,905億円(3,716億円)
- ・保育所の受入れ児童数の拡大、延長保育等の保護者のニーズに応じた保育サービスの推進、地域の保育資源(事業所内託児施設)を活用した取組、家庭的保育事業(保育ママ)の充実
- ⑥事業所内託児施設の設置・運営等に対する支援の推進 40億円(23億円)
- ⑦子どもの事故防止対策の推進 1.2億円(1.5億円)
- ⑧就学前教育費負担の軽減 192億円(185億円)

III 小学生期

- ⑨全小学校区における「放課後子どもプラン」の推進
- 放課後子ども教室 78億円(68億円)、放課後児童クラブ 187億円(158億円)
- ・放課後子ども教室は平成20年度は全国15,000か所の小学校区、放課後児童クラブは必要なすべての小学校区(20,000か所)において実施。
- ⑩地域における家庭教育支援基盤形成の促進 12億円(新規)
- ⑪学校や登下校時の安全対策 17億円(17億円)

IV 中学生・高校生・大学生期

- ⑫奨学金の充実 1,309億円(1,224億円)
- ・121.9万人(前年度比7.5万人増)の学生等に奨学金の貸与

V 特に支援を必要とする家庭の子育て支援

- ⑬社会的養護体制の拡充 799億円(776億円)
- ⑭子どもの心の診療拠点病院の整備 48億円の内数(新規)
- ⑮発達障害等支援・特別支援教育の総合的な推進 5億円(新規)
- ⑯発達障害教育情報センターによる情報提供 運営費交付金(12億円)の内数(新規)

(2) 働き方の改革による仕事と生活の調和の実現

- ①仕事と生活の調和の実現に向けた社会的機運の醸成 10億円(新規)
- ・業界トップクラス企業による先進的モデル事業の展開 2億円(新規)
 - ・労使、地方公共団体、有識者等による「仕事と生活の調和推進会議」を都道府県ごとに設置 8.3億円(新規)
- ②仕事と生活の調和の実現のための企業の取組の促進 15億円(16億円)
- ・労働時間等の設定の改善に向けた職場意識の改善に積極的に取り組む中小企業事業主に対する新たな助成措置の創設
- ③パートタイム労働者の均衡待遇確保と短時間正社員制度の導入促進 10億円(8.8億円)
- ④マザーズハローワーク事業の拠点の拡充と機能の強化 19億円(20億円)
- ⑤フリーター常用雇用化プラン等の推進や、若者等のチャレンジ支援等 333億円の内数
- ⑥テレワークの普及促進 1.4億円(1.1億円)
- ⑦働き方の見直しを含む官民一体子育て支援推進運動 0.4億円(0.5億円)

(3) 社会全体の意識改革のための国民運動の推進

- 〇少子化社会対策の総合的な推進 2.6億円(2.4億円)
- ・仕事と生活の調和を推進するための取組と従業員意識に関する調査、少子化対策における利用者満足度調査に関する調査研究
 - ・家族・地域のきずなを再生する国民運動の展開 等

(4) 地域における少子化対策の推進

- 〇地域における少子化対策の推進体制の充実 地方財政措置
- ・少子化対策推進のため、各地方公共団体(特に市町村)に少子化対策推進本部や少子化対策の総合窓口を設置するなど、全国ベースで体制整備を促進

(5) その他の重要な施策

- 〇「子どもと家族を応援する日本」重点戦略の策定に伴う税制上の所要の措置
- 〇社会的養護体制の見直しに関する児童福祉法等の改正に伴う税制上の所要の措置
- 〇周産期医療の連携体制を担う医療機関が取得する分娩施設に係る特例措置の創設
- 〇事業所内託児施設に係る法人税の優遇措置
- 〇家族用住宅・三世帯同居・近居の支援
- 〇自然や人とのふれあいによる豊かな人間性の育成

21

「子どもと家族を応援する日本」重点戦略のポイント

1 策定の視点

「二者択一構造」解消のための2つの取組 ～「未来への投資」としての「車の両輪」～

「就労」と「結婚・出産」の二者択一構造を変え、

- ・ 女性をはじめとする働く意欲を持つすべての人の労働市場参加を実現しつつ、
- ・ 国民の希望する結婚・出産・子育てを可能とする

このためには、

「働き方の改革」による

仕事と生活の調和の実現

(←長時間労働による仕事と家庭の両立困難や、男性の家事・育児分担の不足等の現状etc)

「親の就労と子どもの育成の両立」「家庭における子育て」を
包括的に支援する枠組み
(社会的基盤)の構築

(←保育サービス等が利用できないことなどにより、就業を希望しながら断念したり、希望する出産・子育てを断念したりしている状況etc)

「車の両輪」となるこの2つの取組を
「未来への投資」としてできる限り速やかに軌道に乗せることが必要

10

2 仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)の実現

○「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」(国民的な取組の大きな方向性を示すもの)及び「仕事と生活の調和推進のための行動指針」(企業や働く者、国民の効果的な取組、国や地方自治体の施策の方針)を策定

緊 要 性

【仕事と生活の間で
問題を抱える人の増加】

- 正社員以外の働き方の増加
→ 経済的に自立できない層
- 長時間労働
→ 「心身の疲労」「家族の困らんを持ってない層」
- 働き方の選択肢の制約
→ 仕事と子育ての両立の難しさ

【少子化や労働力の確保が
社会全体の課題に】

- 結婚や子育てに関する人々の希望を実現しにくいものにし、急速な少子化の要因に
- 働き方の選択肢が限られていて、多様な人材を活かすことができない

実 現 し た 社 会 の 姿

国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会

①就労による経済的自立が可能な社会

経済的自立を必要とする者とりわけ若者がいきいきと働くことができ、かつ、経済的に自立可能な働き方ができ、結婚や子育てに関する希望の実現などに向けて、暮らしの経済的基盤が確保できる。

《行動指針に掲げる目標(代表例)》

- 就業率(②、③にも関連)
＜女性(25～44才)＞
現状 64.9% → 2017年 69～72%
- ＜高齢者(60～64才)＞
現状 52.6% → 2017年 60～61%
- フリーターの数
現状 187万人 → 2017年 144.7万人以下

②健康で豊かな生活のための時間が確保できる社会

働く人々の健康が保持され、家族や友人などの充実した時間、自己啓発や地域活動への参加のための時間などを持てる豊かな生活ができる。

《行動指針に掲げる目標(代表例)》

- 週労働時間60時間以上の雇用者の割合
現状 10.8% → 2017年 半減
- 年次有給休暇取得率
現状 46.6% → 2017年 完全取得

③多様な働き方・生き方が選択できる社会

性や年齢などにかかわらず、誰もが自らの意欲と能力を持って様々な働き方や生き方に挑戦できる機会が提供されており、子育てや親の介護が必要な時期など個人の置かれた状況に応じて多様で柔軟な働き方が選択でき、しかも公正な処遇が確保されている。

《行動指針に掲げる目標(代表例)》

- 第1子出産前後の女性の継続就業率
現状 38.0% → 2017年 55%
- 育児休業取得率
(女性)現状 72.3% → 2017年 80%
(男性)現状 0.50% → 2017年 10%
- 男性の育児・家事時間(6歳未満児のいる家庭)
現状 60分/日 → 2017年 2.5時間/日

関係者が果たすべき役割

企業と働く者

個々の企業の実情に合った効果的な進め方を労使で話し合い、自主的に取り組んでいくことが基本

《行動指針に掲げる具体的な取組》

(総論)

- 経営トップのリーダーシップの発揮による職場風土改革のための意識改革、柔軟な働き方の実現等
- 目標策定、計画的取組、チェックの仕組み、着実な実行
- 労使で働き方を見直し、業務の見直し等により、時間当たり生産性を向上

(就労による経済的自立)

- 人物本位による正当な評価に基づく採用の推進
- パート労働者の正規雇用への移行の促進

(健康で豊かな生活のための時間の確保)

- 労働時間関連法令の遵守の徹底
- 労使による長時間労働の抑制等のための労働時間等の設定改善のための業務見直しや要員確保の推進

(多様な働き方の選択)

- 短時間正社員制度、在宅就業等個人の置かれた状況に応じた柔軟な働き方を支える制度整備と利用しやすい職場風土づくりの推進
- 女性や高齢者等への再就職・継続就業機会の提供

国・地方自治体

社会全体の課題に関わることから、国と地方自治体も、企業や働く者、国民の取組を積極的に支援するとともに、多様な働き方に対応した子育て支援や介護などのための社会的基盤づくりを積極的に実施

《行動指針に掲げる具体的な取組》

(総論)

- 実現に向けた枠組み作り
 - 国民運動の展開(政労使合意・地域の実情に応じた展開)
 - 制度的枠組の構築(企業の次世代育成支援の取組促進、働き方に中立的な税・社会保障制度の検討)
 - 取組企業への支援、社会的評価(企業情報の収集・提供、中小企業への支援、顕彰制度等)

- 法令遵守のための監督指導の強化

(就労による経済的自立)

- 若年者等の経済的自立の支援

(健康で豊かな生活のための時間の確保)

- 労使による長時間労働の抑制等のための労働時間等の設定改善のための取組の支援

(多様な働き方の選択)

- 保育サービスの充実等の多様な働き方に対応した子育て支援の推進、地域の実情に応じた育児・介護の社会的基盤の形成

3 包括的な次世代育成支援の枠組みの構築

仕事と生活の調和を推進し、国民の希望する結婚や出産・子育ての実現を支える給付・サービスの考え方

①親の就労と子どもの育成の両立を支える支援

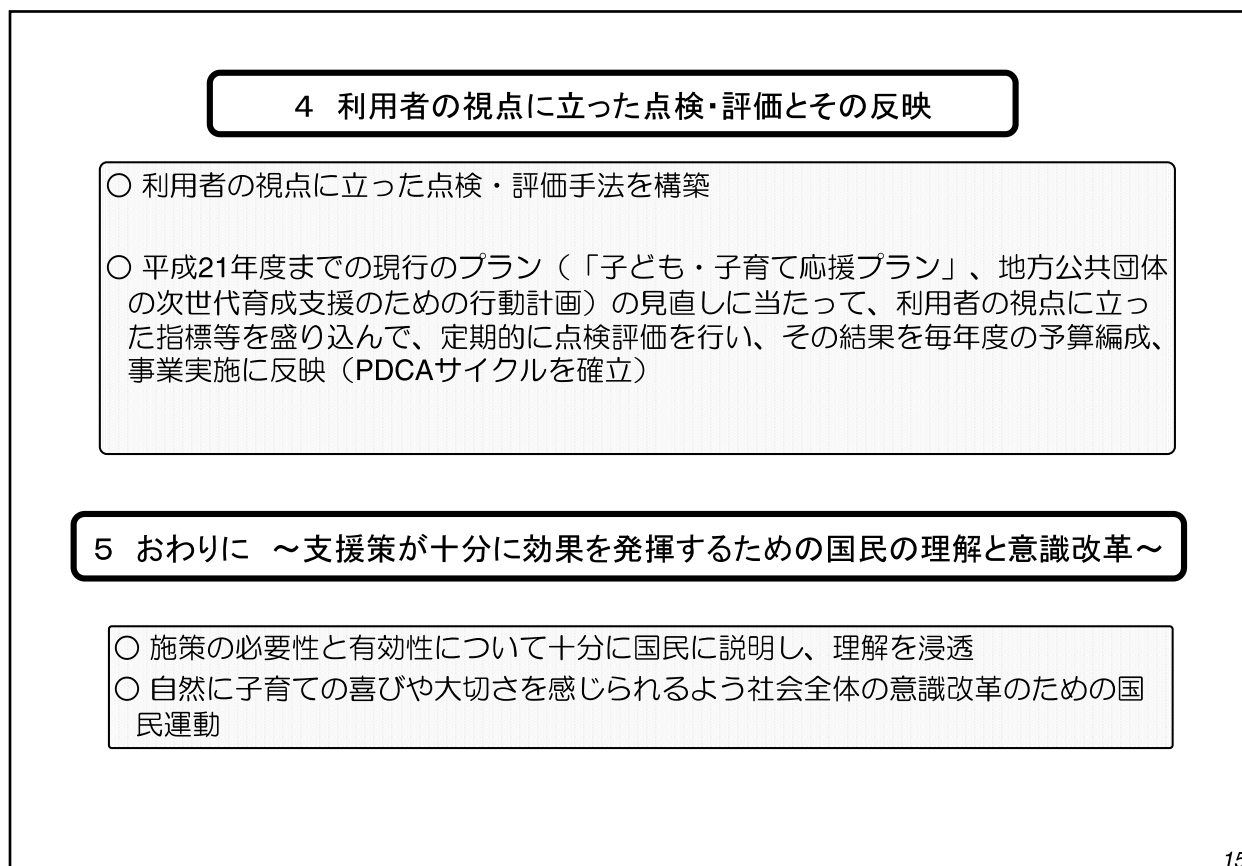
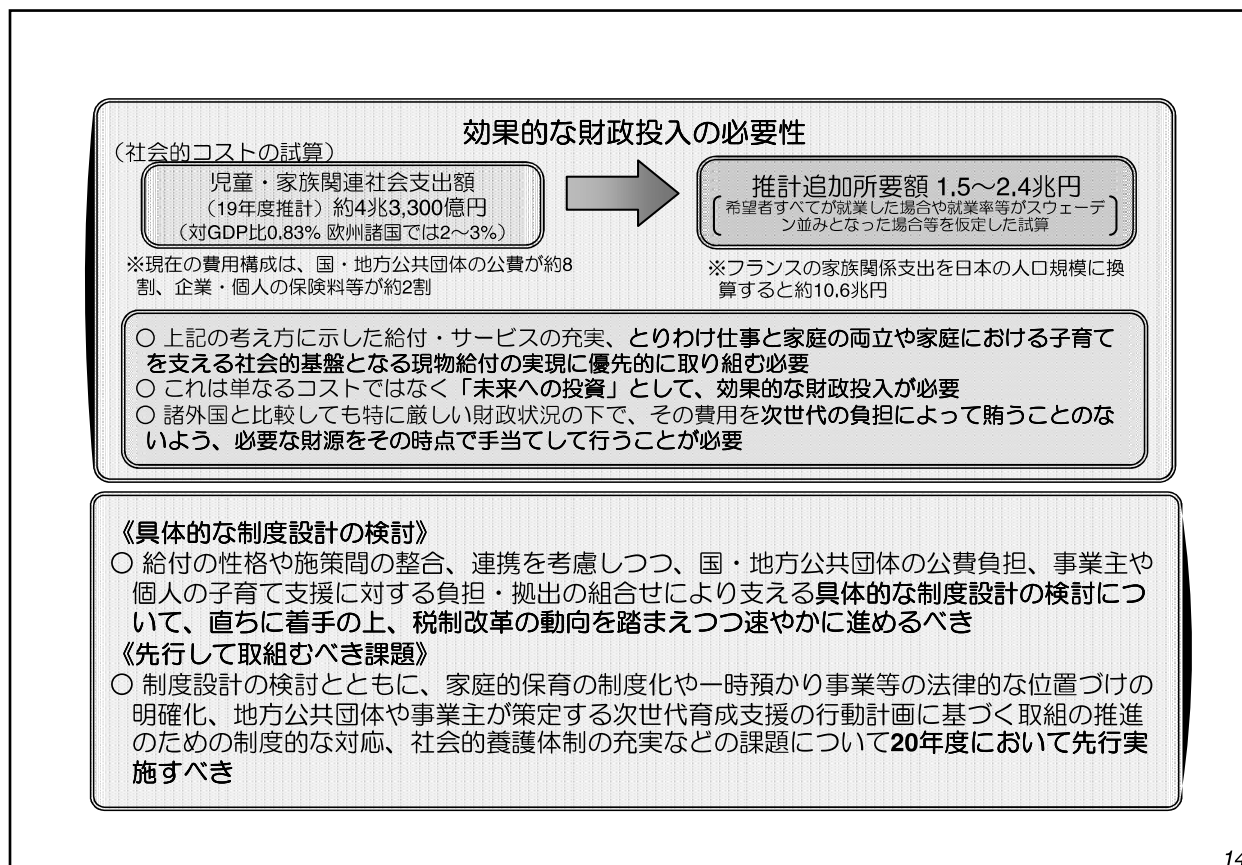
- 就業希望者を育児休業と保育(あるいはその組合せ)で切れ目なくカバーできる体制、仕組みの構築
- そのための制度の弾力化(短時間勤務を含めた育児期の休業取得方法の弾力化、家庭的保育など保育サービスの提供手段の多様化)
- 保育所から放課後児童クラブへの切れ目のない移行

②すべての子どもの健やかな育成を支える対個人給付・サービス

- 一時預かりをすべての子ども・子育て家庭に対するサービスとして再構築(一定のサービス水準の普遍化)
- 子育て世帯の支援ニーズに対応した経済的支援の実施

③すべての子どもの健やかな育成の基盤となる地域の取組

- 妊婦健診の望ましい受診回数確保のための支援の充実
- 各種地域子育て支援の面的な展開(全戸訪問の実施、地域子育て支援拠点の整備)
- 安全・安心な子どもの放課後の居場所の設置
- 家庭的な環境における養護の充実など、適切な養育を受けられる体制の整備



平成20・21年度「地域活性化に向けた男女共同参画推進に関する調査研究」

プロジェクト委員

<座長>

近藤 弘 (立教大学文学部教授)

<男性の次世代育成支援活動参画促進担当>

渥美 由喜 (シンクタンク研究員)

稲葉 隆 (国立教育政策研究所社会教育実践研究センター専門調査員)

塩崎千枝子 (松山東雲女子大学人文科学部教授)

松下 光恵 (静岡市女性会館館長)

柳田 晃宏 (資生堂販売㈱首都圏第1営業本部社員、NPO法人ファザーリング・ジャパン会員)

<女性のNPO活動・地域活動担当>

大槻 奈巳 (聖心女子大学准教授、国立女性教育会館客員研究員)

堀内 康史 (国立女性教育会館客員研究員)

<会館>

中野 洋恵 (国立女性教育会館研究国際室長、主任研究員)

飯島 絵理 (国立女性教育会館研究国際室客員研究員)

河野梨穂子 (国立女性教育会館研究国際室事務補佐員)

平成20・21年度「地域活性化に向けた男女共同参画推進に関する調査研究」
基礎資料(中間報告)

男性の次世代育成支援活動への参画とその促進 取り組み事例集
学習と活動の循環と男女共同参画の視点

発行 平成21年3月

編集 独立行政法人 国立女性教育会館
〒355-0292 埼玉県比企郡嵐山町菅谷728

TEL：0493-62-6711(代)

URL：http://www.nwec.jp

印刷 株式会社 石井印刷

